

324
543

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始





三
六
大
宗
教

大正
6. 9. 19
内交

324-543

はしがき

本書は、曾て、僕が編輯發行した、「佛教講義録」に掲載したもの、内、特に、「佛教綱要」「基督教綱要」「神道綱要」の三名著を合本したものである。

「佛教講義録」廢刊以來、既に數年、今尙、購讀を希望する者頗る多く、或はその再刊を迫り、或はその合本別冊の發賣を求むるなど、一々これに答ふるの煩に堪へない程である。乃ちまづ、本書を公にし、而して、他は、「佛教大觀」と題して、大略左の各編を、逐次刊行したいと思つて居る。

第七編	佛典の解説	學帝講國師大	常盤大定先生
第六編	禪學要義	學曹教洞授大	加藤咄堂先生
第五編	歐米の佛教	學宗教教授大	渡邊海旭先生
第四編	支那の佛教	學日教蓮授大	境野黃洋先生
第三編	日本の佛教	學東教洋授大	境野黃洋先生
第二編	印度の佛教	學帝講國師大	荻原雲來先生
第一編	佛教概論	學東教洋授大	加藤咄堂先生

はしがき

第八編 佛教研究法 東洋大學教授 島地大等先生

惟ふに、佛教がわからなくては、日本の歴史も解釋が出来ない、日本の文學も味ふことが出来ない、日本文明の由來するところも知ることが出来ない。然るに、その佛教といふものを知りたいといふ人々の、いつでも當惑するのは、唯識三年俱舍八年など、言つて、兎角、面倒臭い研究に、長い月日がかゝつて、手つ取り早く、佛教の大系を飲み込ませて呉れる人のないことである。従つて、

- 一、佛教は、どういふ風に研究したらよいものか。
 - 一、佛教は、大體、どういふことを説いて居るものか。
 - 一、佛教が、印度に興り、支那を経て、日本へ傳はつた道筋は、どういふ風になつて居るか。
 - 一、日本に現存して居る佛教の宗派の状態や、その教義の大要を知るには、どうすればよいか。
 - 一、日本の國家と、佛教との關係は、古來、どういふ風になつて來て居るか。
 - 一、佛教の經典は、その數甚だ多いが、その一々の經典の内容を、解説したものはないか。
 - 一、禪學といふものが、非常に流行して居るが、一體それは、どういふことを教へるものか。
 - 一、西洋の學者が、盛に佛教を研究して居るといふことだが、その状況を詳に知る方法はないか。
- など、いふ質問が、絶えず繰り返されるのである。今この『佛教大觀』は、確に、これ等の人々に、

満足を與へ得るものであることを確信する。

各科擔任の講師は、悉く現代有數の學者であつて、殊に、各々その専門とするところの科目を選択して、執筆せられたのであるから、世の徒に、大家の姓名だけを並べて、その實、杜撰な代作もので間に合せて居るが如きものとは、大にその面目を異にして居るのであつて、これ、この『佛教大觀』の窃に誇りとするとところである。

大正六年八月二十五日

丙午出版社にて

高島米峰識す

目次

第一編 佛教綱要 島地默雷著

第一章 總說……………一

第二章 諸行無常……………三

第三章 諸法無我……………五

第四章 涅槃寂靜……………一〇

第五章 諸法實相……………一三

第六章 性修二德……………一八

第七章 止行二善……………二三

第八章 自他二利……………三三

第二編 基督教綱要 廣井辰太郎著

總說……………一

目次……………

第一章 基督教の歴史の準備……………二

(一) 猶太建國者摩西……………四

(二) 豫言者の運動……………六

第二章 基督教の起源……………九

(一) 基督の時代……………一一

(二) 耶蘇基督……………一二

第三章 經典……………二五

(一) 舊約全書……………二七

(二) 新約全書……………二九

第四章 教義概要……………三三

(一) 神論……………三三

(二) 世界と人間……………三九

第五章 基督教の倫理……………四六

(一) 個人的倫理……………四六

(二) 社會的倫理……………四八

第六章 基督教の儀式……………五二

(一) 洗禮……………五二

(二) 聖餐式……………五四

第七章 日本基督教の概況……………五五

第二編 神道綱要 足立栗園著

緒言……………一

第一章 神道の名義……………二

第二章 原始思想と信仰……………三

第三章 儒教より受けたる影響……………六

第四章 佛教より受けたる影響……………九

第五章 三教一致……………一一

第六章 兩部神道の隆盛……………一四

第 壹 編

佛 教 綱 要

島 地 默 雷 著

三 大 宗 教

第七章	唯一神道の興起	一九
第八章	垂加神道の唱道	二四
第九章	神道復古の大勢	三二
第十章	世俗神道の勃興	四〇
第十一章	明治維新と神道の獨立	四九
第十二章	神宮及神社制度の確定	五五
第十三章	神道各派の現状	五八
第十四章	神道各派の教義と概評	六〇

四

目次

第一章	總說	一
第二章	諸行無常	三
第三章	諸法無我	五
第四章	涅槃寂靜	一〇
第五章	諸法實相	一三
第六章	性修二德	一八
第七章	止行二善	二三
第八章	自他二利	三三

佛教綱要

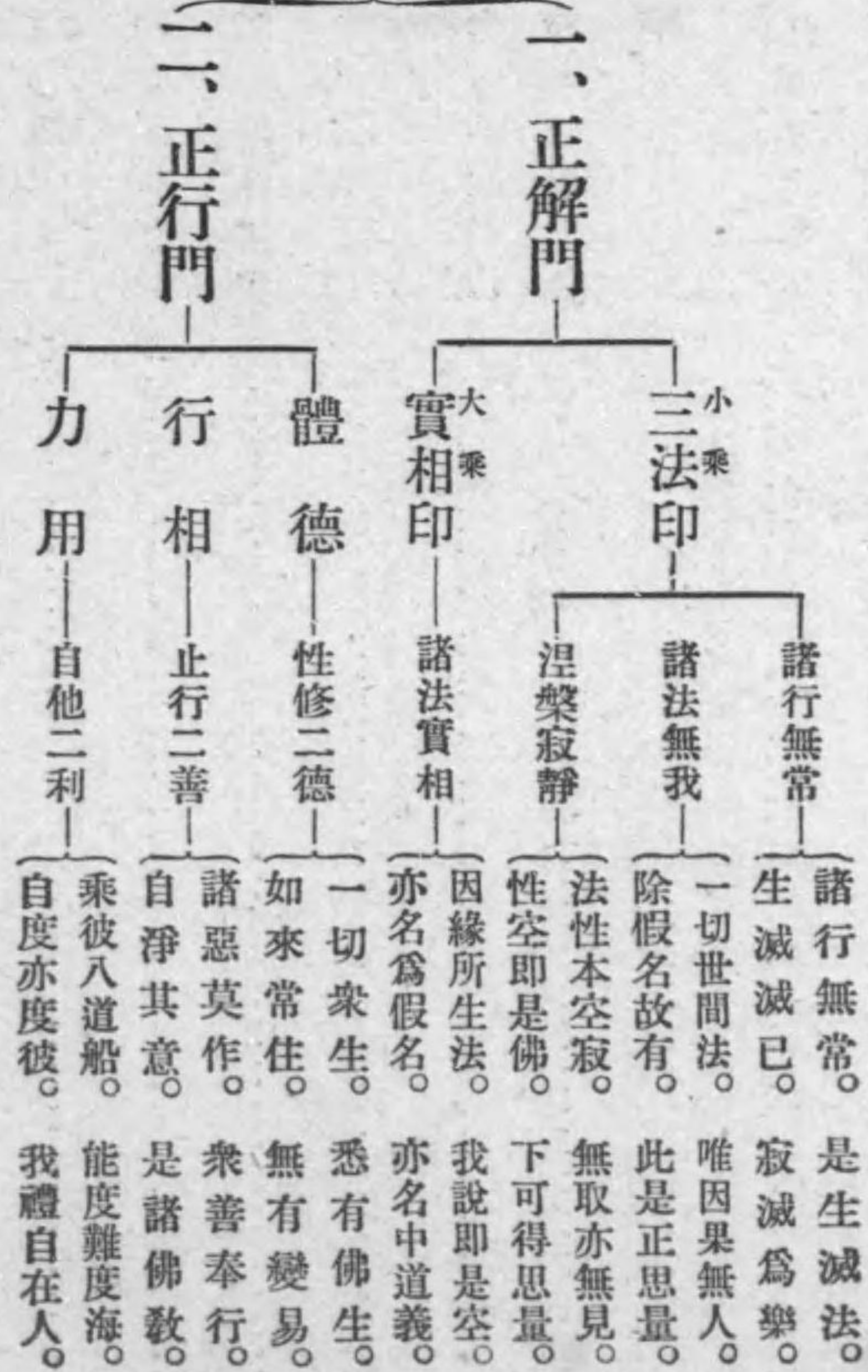
島地默雷著

第一章 總說

佛教は宇内諸宗教中に於て、最も廣大なる教法にて、經典も數千卷あり、法門も八萬四千と云ふ程なれば、宛も良醫が應病與藥の治術を施すが如く、種々の法門教義有つて、之を簡單に講話する事は、随分難事なり、併今圖示(卷端所載)する所に依て略説すれば、亦其大略を知るに難からざるなり、唯豫め注意致し置くは、佛教の要義、必ずしも此に止るに非ず、茲に圖示する所は、野衲が講話の便宜の爲めに作りし迄にて、講義の都合にては、此外種々の科門を作て、辯述せざる事を得ざる妙旨あり、他日機縁の純熟する時あらば、重ねて講話を爲すの日あるべきなり、誤ても、佛教の大意は、此に終るが如き觀をなさざらん事を冀望す。

佛教綱要

佛教



此に豫め此略圖の大概を説き置かん、先づ二大門に分つて、正解と正行の二とす。此解とは、領解にて、教理の方に屬し、次の行は、修行にて、實行の方に屬す。偕其教理の中に於て、大乘小乗の二教理に分れて、小乗教と云ふは、小機に對するの教、大乘教と云ふは、大機に對するの教なり。乘とは、乗り物の名、即ち車の名なり。劣弱なる小機、即鈍機に對するを小乗と云ひ、銳利なる大機、即大人に對するを大乘教と云ふ。小車は、羊や鹿や小牛のひく車にて、是は小兒の乗る車、大白牛車は、大人の乗る大車なり。聲聞緣覺及び小菩薩の乗る車、即ち小乗教は、二乗又は三乗教と云ひ、又大菩薩の乗る大車、即ち大乘教は、小乗人の如く自分計り乗る小車に非ず、一切衆生と同乗する、非常の大車なる故、大乘教と云なり。

此大小二乗車には、如何なる教か説いてありやと云ふに、二教共に、確乎としたる極印あり。大乘の方は實相印にして、小乗の方は三法印なり。即ち諸行無常と諸法無我と、涅槃寂靜の三なり。此三つの極印あるにより、小乗教たる事を知るべし。

第一章 諸行無常

涅槃經に曰く

諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅爲樂

此の一偈四句十六字は、無常偈と稱へて、涅槃經の説なり。先づ諸行とは、行は造作の義と云ひて、一切有爲の法は、皆造り出された者にして、此造り出されたる者は、皆變化して遷移する者なるが故に、常住の者は一もなく、皆悉く遷り變つて無常なる故之を諸行無常と云。故に之を受けて、是れ生滅法と云。凡夫は、此生滅相續して無常なる者を、常住の如く認め、我も物も、共に常住の如く心得、執著を發し、煩惱勞苦する、之が即ち迷倒の姿なり。此生滅の妄見を離れたのが、生滅滅已、寂滅爲樂なり。此寂滅爲樂の事は、下の涅槃寂靜の下に辯ずべし。

彼の以呂波四十七字は、弘法大師の作にて、其據る處は、此無常偈なり。即彼の一偈の意味を取て、此今様の一首とし、色は匂へど散りぬるを、我世誰ぞ常ならむ、有爲の

奥山今日こえて、浅き夢みし醉もせずと訓譯せられたり。今様體に訓讀すれば、別に解を贅附せずして、領得し易し。若し石州の芳淑院履善師と云ふ眞宗本派の學者が伊呂波の註を書きしものあり、此人は今の今様の伊呂波へ少し宛文字を副へて、一首の長歌に引延して作られたり。即ち

咲花のいろはにほへと頓て又ちりぬる者をわかよにはたれそつねなる者あらむいざ此うゐのおくやまをけふこゑ出てあさはけきゆめは又みじ明りなき酒には元よりゑひさめもせず

といふのである。意に曰く、春花秋楓紅紫爛漫たれ共、艶姿長く存せず、飛花落葉散亂泥に委す、獨り草木のみ然るに非ず、世相の遷り易き、人物皆同じ、誰か無常を免るゝ者あらんや、若し徒らに常住の妄見に執して空しく生滅變遷の迅速なる事を知らざれば、光陰の經過し易き、紅顏白髮、忽に轉變して、醉生夢死の悲悔を懐く事多々ならん、速に迷夢を警覺し、昏眠を醒悟して、眞源の本家に歸着すべき旨を詠出せし者なり。有爲の客旅に流轉放浪せる人を警戒して、無爲の元都涅槃の本家に歸るべき旨を指南せし者なり。故に此伊呂波の大尾に、一の京の字を添へたる者は、多劫生死

の山野邊鄙に流浪せし者も、一覺醒悟、速に本師法皇の元都涅槃の京城に還歸すべき旨を示すに外ならざる也。之を寂滅爲樂と云ふ、此樂の字は自ら都城の意義を含蓄する者と云ふべし。

第三章 諸法無我

此諸法無我と云は、諸法とは一切萬物の事にして、法とは可規の義とて、規則が有て、少しも其則に違はぬ事を云物あれば則ありと云ふが如し。佛家では、特に此法と云字が多く用ひられて而も三様に使用せらるゝなり。一は七十五法、或は百法、又は色心二法、萬法、唯心、抔と云。此時は法の字は物と云義にて、有形無形森羅の事物を諸法と云。二は六根六識に對する六境の一を法と云。即ち眼耳鼻舌身意の六根に對する色聲香味觸法の六境の一を法と云。眼は色に對し、耳は聲に、鼻は香に、舌は味に、身は觸に、意は法に對す。此時の法の字は道理の義なり。三は佛法、王法、世間法、出世間法、抔云。是は法則又は教法、抔と稱する義なり。今は其中第一の萬物の義に當る。

六
借此萬法は、因果條然紊れざる中に存在する者にて、只因縁の集合に依て、顯れ出たる果相なれば、其實體は一物もなし。只因果の結合のみなれば、我もなく、我の所有もなし。之を諸法無我と云ふ。即大智度論に曰く、

一切世間法 因果而無人 除假名故有 此是正思量

今諸法無我の事を説んとするに、此大論の文が的切なるに依り、此文に依て、諸法無我の大略を語るべし。此一切世間法と云は、上は天上界より、下は地獄界迄を云。此中には無量の依正色心たる萬物あれ共、唯因縁のみにて、我と云ふべき者は一物もなし。併し我の實體はなけれ共、假に名を施してある相だけあり。其假に呼ぶ所を除けば、實體は更に無しと云ふが、此文の意なり。此が即ち正思量と云て、正しき考察である。と云事なり。因果の語は因縁と云ふと意同じ。

假令へばい。の字又は十の字に寄せて語らん歟。い。の字にも十の字にも實體無く、墨が字にも非ず。筆紙が字にも非ず。其實體は得べからざる者也。只左のい。が因にて、右のゝ。點が縁也。此因縁の成就したるが、い。の字なり。横のい。が因にて、豎のい。が縁なり。此因縁が調ふたるが、即十の字なり。其他無量の字に、無量の因縁ある事は、例して

知るべし。一切世界の千種萬類、みな如此千萬種類の因縁和合の相のみ、此外決して實體とすべきものは、一物も無し。是を無我法と云。小乗教は只人の無我のみを説け共、大乘教は、人無我の上に更に法無我迄を説いて、我とすべき人もなく、又此人が所有すべき物一物もなしと云。是れ我及び我所なしと説く者にて、佛教の無我を説く、微細精密を盡して、反覆丁寧を極むる者は他なし、全く凡夫固着の我執を除き去らしめ、我もなく我所有物もなき事を示して、煩惱業苦を解脱せしめんとする、佛の大悲親切懇到の誠意より出づるに外ならざるなり。是れ獨り、佛教の私説に非ず、眞に宇宙の眞理萬物の實相なり。故に、古昔各國の諸聖賢に於ける、其説の同じき、殆ど符節を合するが如し。

去は、孔子は四を絶つと云ひて、毋意毋必毋固毋我と示せり、其無我なる事分明なり。又七十而從心所欲不踰矩と云ふ者、全く無我の極地に達せる者と云ふべし。若し聊にても、物我の隔て有て、私心我情の存在するあらば、其所欲に從て事を行ふ、必ず規矩を踰えて、非道に陥る事ならん。其折欲に從つて矩を踰えざるは、私心我情の無き事明了なり。又孟子が浩然の氣を養うて、天地の間に塞ると云ひ、曾子が、自から反

八
して縮き時は千萬人と雖も我往んと云ひたる如き、皆物我の隔を泯し、物と我と一體なる事を認得したるが故なり。彼の莊子が齊物論に、萬物の齊等同一なる旨を論ずる。之れを指と馬とに寄せて曰く、以指喻指之非指、不若以非指喻指之非指也。以馬喻馬之非馬、不若以非馬喻馬之非馬也。天地一指也、萬物一馬也。等と云へり。是れは天地萬物、本來一體にて、我他彼此區別の實體なき事を言ひ顯らはしたる言なり。即ち我等の指をさして、是は指に非らずと説き諭しても、平生已に指は指なりと信じ居れば、俄に指に非らずと諭しても、容易に承知せず。夫よりは、他の指に非ざる耳や鼻をさして、是は指に非ざるべしと云はゞ、直に納得して、然り指に非らずと承知せん。又彼の馬を指して、彼は馬に非らずと諭すとも、平素彼は馬也と信じ居る者故、決して馬に非らずと信ずる事は難きなり。ソコで馬に非ざる所の猫や犬を指して、彼は馬に非ざるべしと云はゞ、容易に承知して、然り馬に非らず、犬猫也と領得すべし。ソコで彼の犬猫が馬に非ざる以上は他の人を騎せ、萬物を運ぶ動物も馬に非ざる事が論さるゝなり。何となれば、畢竟馬と云ひ牛と云ふも、其形の異なるに隨ひ、其名を差別せしのみ、其實體は皆同一にて、肉も血も同質の物なり、焼けば同一の灰となり、埋れば同一

の土となる何一ツ替る者は無い、故に、終りに、天。地。は。一。指。な。り。萬。物。は。一。馬。な。り。と。結。べり。已に然れば、萬物は皆一體にして、此間に我と云ふ物もなく、我が所有とすべき者微塵もなし、但一體中に、個々の不同有て、差別の其儘が同一なり。宛も一身中に、眼耳鼻舌等の諸根在て、諸根各形相を異にし作用を別にする。と雖も皆一身中の徳用なれば、互に我他彼此を争ふ事なく、各自の任務功用を盡して、以て一身平等の體徳を全うすべきなり。

之を一身の上にて談ずるも、一家の上にて説くも、一國及び全世界に及ぼして廣説するも、其理同一、毫も違ふ事なきなり。彼の君主と人民との關係の如きも、亦此道義を同うする者にて、君を元首とし、臣を股肱とするは、一體中の分別なり、殊に軍人は、一國安危存亡の間に進退する者なれば、特に元首股肱の關係を嚴示し玉へり。然れども、此君臣一體は國民皆蒙る所の通務にて、軍人は我等一般國民の代任者なり。已に然れば、君民上下一體同心にて、其中自己適當の任を務めて、我見なく、私情なく、以て元首の勅命に服膺して、股肱の忠節を盡すべきなり。是自づから諸法無我の眞理に相應する者なり。夫の日露の戦役に、連戦連捷の功を奏して、我武を萬國に輝か

したるは、全く君臣一體、元首股肱の感より發りたる、光影の現象と云ふべきなり。

第四章 涅槃寂靜

涅槃とは梵語の略稱にて、具には涅槃那と云ふべし。譯語も數多あれ共、通例滅度と譯する方を多く用ゆ。滅度とは大患永く滅して、四流を超越するの義なり。其大患とは、此身心が世に有て、違順愛情喜怒哀樂種々の煩惱業苦が生じ來る、之を有爲の苦患とす。即ち生死の大患なり。若し無我寂靜の觀道成就して、無餘涅槃に入る時は、灰身滅智して、身心兩つ乍ら滅無する故に、百千の紛紜、一時に消滅して、些の有爲煩勞なし。之を大患永滅と云ふ。已に生死の關門を踰たれば、四苦の我に纏縛する者なし。之を四流を超越すと云ふ。四流とは、生老病死の四苦なり。略して生死の苦海と云ふ。具にして生老病死と云ふ。萬物に施しては生住壞滅と云ひ、世界に及ぼしては成住壞空と云ふ。名は異なれ共、四相遷移の有様は全く同じ。此生死生滅の海を渡りたるが、涅槃滅度の彼岸なり。此生老病死の四苦に、愛別離苦と、怨憎會苦と、求不得苦

と、五陰盛苦との四苦を加へて、八苦と云ふ。佛書を讀まざる文盲の俗士が、何某は、四苦八苦にて命終れり、抔云ふ事あり、笑ふべきの至りである。四苦八苦は、死時の苦に限らず、一生貫通の苦なり。就中、生老病死の四苦は、肉體に就ての苦なり。後の四苦は精神上の苦なり。愛別離苦は、君臣父子夫婦兄弟朋友等、長く親愛を共にせんと欲せしに、風燈草露、後先定りなく、生滅分離するを云ふ。怨憎會苦は、性情の相反する、殆ど怨敵の如き者と同居雜處して、互に其死の速かならん事を祈るが如き者を云ふ。求不得苦は、人の求め多き、一を望んで之を得れば、更に十を得ん事を願ひ、十を得れば更に百を求めて、何處迄も満足することなく、

思ふ事一つ叶へば又二ツ三ツ四ツ五ツ六ツかしの世や

との古歌の如く、生命は盡るも、希望は盡きざるを求不得苦と云ふ。五陰盛苦とは五蘊假和合の此身體ある故に、此諸苦ありと、此一ツは、苦境を總稱せし者なり。上に云ふ如く、身智共に滅しなば、衆累此に除かる、之を涅槃寂靜と云ふ。即ち大患永滅、超度四流の義なり。

此涅槃寂靜の趣を示す經論の文多しと雖も、最も適切なるが華嚴經の

法性本空寂 無取亦無見 性空即是佛 不可得思量
である。然るに、經文の當意は大乘の涅槃を説く者なれ共、今は小乘涅槃の方に借用する者なり。法性本空寂とて、元來一物もなき虚空の中に忽然生じ來りし因縁の關係なれば、其因縁が盡れば、本來の空性に歸る故、取るべき物もなく、見るべき物もなし。此法性の空寂を證したるが、佛の正覺にて此境界は、實に不可思議にして、未覺の凡夫の思量には、到底及ばぬ處ぞと示せる文なり。

誠に此喧雜なる社會を去つて、閑靜なる境界に移るを以て、之を無上の快樂として喜ぶ事は、彼の老莊虛無の道を尙ぶ徒の、常に目的として、喪に臨んで喜び、盆を鼓して歌ひたるが如き、尋常一般の人情よりすれば、自然に背く非道異端とすれ共、其天理の眞諦より論ぜば、死は畢竟、本元に歸る者にて、敢て之を否むべきに非ず。換言すれば、任を全うして故郷に歸るの謂なり。故に、曾子は、門人を病牀に召して、予が手を啓け、予が足を啓け、戰々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し、今にして免るゝ事を知ると云ひて、即ち處世の行路難を履み畢て、今より樂地に歸るを喜びたり。仲尼の高弟にして、猶此くの如し。此樂地に歸するは、他所に赴くに非ず、是れ

即ち、諸聖賢否一切衆生の歸着すべき、本來の安宅なればなり。

殊に大乘教に於ては、此涅槃を以て、灰身滅智の單空とせず、如來眞寂の元都にて、非有非空の常寂光界なれば、妙有を含藏する真空にして、虛無之身無極之體を自在無碍に用かする妙果なり。次の大乘實相印諸法實相の下にて辯ずべし。

第五章 諸法實相

小乘三法印は、略辨上に畢て、以下、大乗實相印を講ずべし。大乘教は、廣大無邊の教義にて、宇宙萬物有形無形、總て皆道の活動法の作用に非ざるはなしと説くが、大乘の面目なり。故に大乘の法義、無量の門戸を分つも、實相の極印の中に攝せらるゝ者にて、此實相の印に反對するの説ある者は、大乘教とすべからざるなり。即ち法華經方便品に説く所の諸法實相是なり。抑諸法實相とは、相法は上にも云ふが如く、一切萬物の謂なり。此諸法は、因果相を爲して、變化無常なりと雖も、其は只相貌のみ、其本體は常住にして、少しも變化せず存在すれば、是れ一時虛假の幻影に非ず、全く眞實

無妄の本體なる事を示せり。これ眞如實相と稱する所以なり。此眞實なる事を如是と云ひて、如是は讀て字の如く、是の如くにて、更に平言すれば、其通り又はソウヂキと云ふが如し。其通りとは性にも相にも少しも違はぬ事にて、諸法萬物皆如是なれば、一も實相に背くものなしと云ふ事なり。此如是の有様を細説して、十如是とし、相性體力作因緣果報本末究竟と云ふ。即ち相貌も性質も物體も能力も作用も因種も助緣も結果も報酬も根本枝末の極端迄、一として眞實ならざる者は無し。柳緑花紅、水濕火燥、蛙鳴鶯飛、魚躍すべて萬物自然の作用にて、毫も人爲壓抑の控制に非ざる故に、之を誠は天の道なりと云ひて、法爾本然の徳相なる事を示せり。然れば、一切萬物は、皆其性徳に依て顯はれたる相貌なれば、因果自然の相用にて、一も下實の物は無い。皆悉く眞實無妄の實相である。之を諸法實相と云ふ。此義を委曲に談ずるは、天台宗の務むる所にて、所謂三諦の妙觀なり。三諦とは、空假中の三觀にして、中觀論に分明一偈に之を顯出せられたり。即ち

因緣所生法 我説即是空 亦名爲假名 亦是中道義

と云ふ者、是なり。文の意は、一切世間の森羅萬象は、本來實有の物に非ず、皆因緣の關

係より生じて、種々無量の相を爲せり。此一切萬物を、佛教には、因緣生起と説きて、一因に依て起る者にも非ず、二因に依て起る者にも非ず、又多因に依て起るにも非ず、無因に依て起るにも非ず、必ず因緣の結合に依て生ずる者とす。其因緣果報の事を、微細に穿鑿調査して、六因四緣五果等の説有て、因緣を説くの精微なる、恐らく他に比例する者無かるべし。今は簡短に述べ難きが故に、之を略し、通常簡易に談ずる所にて、責を塞げば、即ち内因外緣相扶けて結果を引くの談にて、的當ならん。

喩へば、草木穀菜の如き、其果實に根芽を生ずべき内因、あれ共之を桶若くは俵に入れて、倉庫に貯へ置かば、何日迄も根芽を生ずる事能はざるべし。之を氣候に従ひ、田畠に種植すれば、雨露水土の外緣に導かれて、内因の根芽を生じ、各々果實を結ぶ事を得べし。之を因緣果報の正説、因果爲宗の法門と云ふ。

他の外教者の説く所の如きは、一切萬物は、皆天主の一力一手にて造る所の者とす。が故に、是は一因計の説と云ふ者にて、佛教の因緣説より見る時は、甚しき非理の説となる。又萬物は、偶然に生ずる者と云ふ説の如きは、無因説と云ふ者なり。又他に多數の神有つて造ると云ふは、多因説にて、是等皆正因緣所生の理を説く佛教よ

り見る時は、正理に契はざる非説と心得べし。
夫已に因縁に依つて生ずれば、因縁は假の和合なり、實體あるべき所以なし、之即空と云ふ、古歌に、

引寄せて結へば柴の庵なりほどけば故の野原なりけり

と云ふが如く、棟梁椽柱等種々の材を集めて、家屋を作れ共、是れ衆材の集合のみ、此衆材を分雖すれば家屋は解けて、又一軒の實體なきが如く、因縁生の物は、何にても實體は無く、只空のみである。是を因縁所生法、我説即空と云ふ。即空、諦なる者なり。

然れ共、是れ必しも單空に非ず、草木瓦石等有て、集合結成すれば、忽に家屋を造り出す事を得べきが故に、是所に造り出さるゝは、是れ本來の性徳に背きたるには非ず、生滅縁起すれば、いつても如是の姿を現はす事を得るなり、是れ實體に非ざるが故に、亦名爲假名と云つて、即ち假に名を施して分別するの法なり、此假和合の根、即ち假に名を施したる所を假諦と云ふ。

然れば、實有に非ざるが故に、之を空と云ひ、假名なるが故に、之を假と云ふ。空假は

畢竟實有を破斥すると假有を建立するの相對法門にて、其實は非有非空の妙體、亦有亦空の假相、即是絶對中道の實相なり、之を亦是中道義と云ひ、略して之を中諦と云ふ。此を合して空假中の三諦と云ふ。此三諦は、天然の性徳にて、法界自然に存在する所、無始無終に因縁活動して、暫時も休息なく、互に相扶くる者なり。

此の三諦は、元是れ法性眞如の妙徳にて、本來時空兩間に融通遍滿して、創造の始めもなく、破滅の終もなし。豎に三世に通じ、横に十方に亘りて、寸分も斯徳の存せざる處なく、毫釐も此用を持せざる者なし。而して大乘教は主として此意義を詮顯するの教なるが故に、一色一香無非中道と言ひて、宇宙萬象皆此徳を外にする者なし。然れば我等大乘教を奉ずる者は、此三諦の性徳を保持し居るが故に、天然の妙徳は我人自から具有する者なり。決して自暴自棄、我より卑屈墮落して、草木禽獸に下るが如き、羸弱怯劣の心に安んずべき者ならんや。奮勵一番大白牛車に乗じて、二利最勝の寶城に到達せずして可ならんや。

第六章 性修二德

上來は解行二門の中、第一正解門の下に於ての談にて、世間語にて云へば、理論の方に屬し、之より以下は第二の正行門にて、正しく實際に履行する方面なり。此下、自づから三種に分れて、第一は性修二德、第二は止行二善、第三は自他二利、即ち是れなり。

性修二德と云ふは略語にて、具には性德修德と云ふべきなり。性德とは本來内に具はりたる德を云ふ。修德とは修行して其本具の德を外に發見せしむるを云ふ。喩へば璞玉を琢ぐが如く、鑄鏡を磨くが如し。青鏡の鏡面を覆へば、鏡に光りなく、荒石が珠の外表を包めば、珠は隠れて通常瓦石の如く見ゆれども、中心に珠玉があれば、琢さし時、始めて其光が放射するなり。然れ共此琢さし時、始めて珠の出来るには非ず、本來光る珠の性質は彼の璞玉即ち荒石の中に含まれ居るなり。若し此珠のなき石を琢き、黒炭の如き者を磨きなば、百年切磋琢磨するも、光の放射する時節は絶え

て無き事なり。彼の卞和の珠の如き其明玉を璞石中に含み居る事を充分鑒達し居たるが故に、屢主君に献上せしに、凡眼者流は、明玉の含み居る事を知らざる故に、上を欺く不臣の所爲なりとして、數回罪科に處せられたれ共、其明玉なる事を確信し居る故に、唯世人の無識なるを悲歎して止まず、號泣して眼力ある人の世に出づるを待ち居たるに、果して明玉なる事を鑒識保證する人あり、王に説いて之を琢磨せしに、正しく天下無雙の寶玉を得たり、所謂趙氏連城の玉なる者即是なり。

我等凡夫も亦此に同じく、表面は璞石の如き凡愚なれ共、其内心には、佛陀の性質を具へ居る事猶璞石中に明玉を含み居るが如し。故に華嚴經には、

奇哉奇哉 此諸衆生 具有如來 智慧德相 迷惑不知

等と説玉へり。其奇哉奇哉と歎言を重ねし者は、表面凡夫の相にて、内心に佛性を具し居る一の奇なり。已に自から佛性を持し乍ら、之を知らずして、流轉する者、二の奇なり。如此一切衆生皆佛性を具し居れば、之が修德顯現の方法を説く者、諸大乘經の通説なり。故に此佛性を具して、之を修得顯現する事を知らざれば、寶の持ち腐りにて何の所詮もなし。

磨きての後こそ光れ磨かざれば玉も瓦になに替るべき
とは此意を咏せし和歌なり。

一切衆生悉有佛性如來常住無有變易

此の一偈は涅槃經の説にて前に云ふが如く表面は迷悟染淨千差萬別なれ共其内心には必ず同一の佛性を具へ居れり之を一切衆生悉有佛性と云ふ何故に一切衆生には悉く此佛性を具へ居るかと云ふに是は本來具へ居るべき筈にて眞如とも一如とも云ひて世界の萬物は本來一體の中より分れ出たる者にて其根本なる一體は靈明洞徹の妙體にて萬德を具へ居る者なれば因縁の關係に依つては千差萬別いか様にも分れ出て或は上り或は下り迷ひともなり悟りともなりて其結果の隔りは天地雲泥の差異を爲せども其體は平等にして差別なき者なり此平等なる一體の所が眞如とも佛性とも法性とも一如とも言はれて靈明なる本覺の眞體なり此佛性は常住不變にしていつも替りなき者なり只之を琢くと琢かざるとの不同に依て凡夫と賢聖との分れが出来るなり凡聖時に不同あれ共佛性は迷悟共に増減生滅なし只隱顯出沒の差あるのみ之を如來常住無有變易と云ふ。

此佛性は本有なるが故に此本有の德を琢き顯はして成佛の光を放つ之を正因佛性と云ふ此正因を磨き出すには必ず聖賢の教を假らざるを得ず之が助縁と成つて開悟する事を得る故に之を縁因佛性と云ふ此聖賢の教に由て正しく眞性を發見する智を了因佛性と云ふ即ち本有の佛性が發顯して大覺の妙果を開くに至るは此縁因と了因との二つの用きに依る故に之を三因佛性とも云ふ宛かも中庸の開卷第一章に天命之性と云と云へる者は今の正因に當り性に從ふ之を道と云とあるは今の了因に當り道を修むる之を教と云と示す者は今の縁因に當ると思考せらる儒佛自から其旨を同じうする事單に此一例に止らざる也然らば即ち一切衆生に佛の性質を本來より具へ居ると云ふ事は其理明白なり只何者か是れ佛性なるか之を指示し之を見得せざれば只是空論にして實行に益なし故に此より正しく吾人の心上に於て佛性の存在する所を指示せんとするに豈他を求めんや宜しく佛性の名に就て檢尋するを捷徑とす既に佛性と云ふ宜しく先づ佛の何物たる所以を研究すべし佛とは梵語佛陀の略言にて此に譯して覺者と云即ち自覺覺他覺行圓滿する者を覺者と云或は天人師或は大聖或は世尊或は無上覺等皆其德

を稱賛するの名なり其徳圓滿功徳に限量なし故に約めて萬徳の覺體と云所謂萬徳は廣大不可思議なれば略して智慧慈悲方便の三徳とす此智慧慈悲方便の三徳は今日學校教育の骨子たる智育德育體育の三育と自から其旨を合する者なり是れ亦智仁勇の三徳と一にして我皇室の神寶として尊び玉へる神璽寶劍靈鏡の三種の神寶と其性質を同じうする者なり

大覺圓滿の佛果の勝徳既に此の如し此佛果の因種となるべき佛性の物體も亦自から推知せらるべきなり我等人類の心意上に存する所の徳を擧るに孟子は之を四端の心と稱して仁義禮智は天理の本然人事の本徳として固有に存する性徳とせり人として是非邪正の考察をなす者は即是智徳の發する所にて怵惕惻隱の情所謂孺子の井に陥らんとするを見ては之を等閑に附し置く能はず直に奔り行いて抱き止むる者は自然に發する仁慈の性徳を根據とする者也之を行ふに勞苦を忘れ勇奮事に従ひ巧みに其所志を盡して任務を遂る者は方便勇徳の爲す所なり如此人々此性情を具へ居る者は其佛性を保持し居る事分明なり故に人の世に生活する所以の行爲の如きも人を損傷し世を妨害するの行爲あれば社會に共存

すべからずして共に交際親睦する所以は自他相救ひ彼我並へ利する所あるを以て人たる者の通義とする者全く人類の根本よりして佛性の明徳を具へ居るが故なり已に其性徳を具す奚ぞ之を琢磨するの修徳を等閑にして可ならんや

第七章 止行二善

止行二善とは略稱なり委曲に云へば止惡修善往生要集又は廢惡修善玄義分と云へり即ち止惡行善の二なり諸惡を廢止して衆善を勤修するの謂なり止惡は消極の善にて修善は積極の善なり消極の善と云へば猶十惡を行ぜざるを十善と名くるが如し今の位置より後へ退却せざるを止善と云ひ更に前途に進步するを行善と云ふ是れ佛教修道の方規覺路進趣の次第なり即ち七佛通戒偈に示す所是なり

諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸佛教

これ獨り過去七佛の通説のみならず番々出世の諸佛百十方三世古今通貫の定説

なり。初の二句は、即ち止行の二善を掲げ、第三句は佛教の眞面目、萬法唯心、外無別法にして、百事萬行皆心を根本とすれば、此心意を清淨にすべき事を述べ、第四句に至つて、之を諸佛の教道とする旨を結べり。

彼の白樂天が儒者にして佛教に篤信にて、殊に晩年は專修念佛の行者となりしは、入門の初め、此止行二善の言句を授りしに由る事、普く世人の知る所なり。初め樂天、鳥窠禪師に向て、如何なるか佛教の大意と問ひしに、禪師は諸惡莫作、衆善奉行と答へられたり。其時樂天曰く、佛教は深遠高妙の玄旨ある者と思ひしに、其大意は、但諸惡莫作、衆善奉行と云ふ、何ぞ淺薄の甚しきや、如此は、三歳の兒童も猶能く知る所なりと云ひしに、禪師は直ちに、三歳の兒童も能く知ると雖も、八十の老翁も猶行ふ能はずと一喝して、彼の心頭に一針を與へられたり。樂天大に感悟する所あり。後、開法修道終に深信の居士となれり。彼の念佛の詩の如き、吟じ來つて餘味の津々たるを覺ゆる感あり。此道念の發起する根本は、鳥窠禪師より、此止行二善の教誨を受けたるに依る者なれば、此一偈は、最も修道の標本となる者なり。予は先年此一偈を訓譯して、

すべての惡を作す莫れ、すべての善を行へよ。自から意を淨むるは、是ぞ諸佛の教へなる。

と一首の今様歌に綴りたり、幸ひに樂器に合はせて、唱歌とせられたし。

扱教育の程度種類一準なり難しと雖も、すべて消極に始り、積極に終るの順序なり。小兒赤子の如きは、消極に適して、積極に合はず、花を折る勿れ、障子を破る勿れ、衣服を汚す勿れ、杯と總べて勿れと止むる方に屬す。然れ共、學齡にも達する程に成長せば、花を折る勿れ、障子を破る勿れ、衣服を汚す勿れのみには止むべからず、更に進んで、読み書きをせよ、裁縫をせよ、茶を點ぜよ、花を挿せよと、男女の性質と年齢の多少とに従つて、相當の課程を授くる者なり。是れ發育の順序なり。獨り子女教育の事のみならず、政教の人世を進歩せしむる事も、皆此順序に依らざるはなし。先づ從來の惡性惡行を改悛して、而後に、君父に忠孝を盡し、世間に善德美行を施すべき者なり。未だ惡を改めずして、直に善を行はんとするは、是れ徳行の順序を誤る者なり。惡を作りつゝ、善を行ふ事を誇らば、其善はこれ眞善に非ずして、僞善と云ふべき者なり。苟くも善惡邪正の分別を知らば、先づ我が從來の惡を改め、而後に相當の善行を

行ふべきなり。

又人有て悪業だに行はざれば、十分なり、別に善行を行ふ用なしと心得居るが如きは、宛も後方に退却せざるのみにて、徒らに中路に止り、敢て進歩する事を知らざる者なり。是豈、人の性情に全き者と云を得んや、即ち世には、如此言をなす人あり、我は人を害せず、世を亂さず、盜賊をせず、放火を爲さず、刑罰を受ける罪過なき故、完全の人なり、此上に、佛法杯聞くべき必要なし、杯と誇る者あり、是れ只後方へ退却せざるのみにて、進歩を知らざる痴漢と云ふべし。

抑人を害し、世を妨げ、刑戮に罹る如きは、人の本分を忘れたる者、禽獸隊裡に墮落せし者なり。是れ其形を人にして、其行を禽獸とする者なり。如此は、人界より放棄せられて、人に非ざる位地に下れる者なり。只此に陥らぬ事のみを自負して満足するは、本來人の尊ぶべき進取の徳を忘るゝ者なれば、何ぞ甘んじて満足すべき者ならんや。

喩へば、此の盛岡に多種の人あり、東京に上らんと欲して、已に花巻仙臺等に進む者あり、又誤て方向を失ひ、福岡青森の方へ退却する者あり、更に一人有て冷笑して

曰く、何某は盛岡人にして、東上を希望し乍ら、却て福岡青森に退却す、其愚真に笑ふべし。我は彼の如き顛倒を爲さずと自負せり。唯其徒らに退却せざるのみにて、依然として盛岡に止り、敢て東上の道に進むを知らざる者あらば、是を何とか云ん、殆ど福岡青森に退却する人と、五十歩百歩の間のみ、東上を知らざるは同一なり。

孟子は、之を戦争の敗軍者に比して、五十歩を以て百歩を笑ふ者とせり。敵と戦ひ、勝て追撃すべき大任を忘れ、怯憶の心より敗走して、五十歩奔り乍ら、百歩奔れる者を笑ふの非なるは、勿論にて、唯歩數に多少の不同あるのみ、敗軍たるは同一なり。退却して人類の位地を墮落すると、凡庸の位地に止り居ると、暫く幾分の不同あれ共、凡夫たるは同一にて、君子高人、聖賢佛菩薩の位地に上る事能はざるは同一なり。故に人は、唯刑戮に罹らざるを以て満足とせず、更に進んで、賞典褒美を受くる身と成り、聖賢佛陀の位地に上らざるべからず、是れ止行二善の全きを得たる成徳の人と云ふべきなり。以上止行二善一往の解釋なり、更に一轉して、一種異例なる止行二善あり、以下少しくこれを説くべし。

止行の止の字、上來は廢止の義なり、以下は止住の義なり。止惡の止は、廢止にて、訓

じてヤメルとす。止善の止は止住にて訓じてトマルと云ふ。彼の綿蠻黃鳥止于丘隅人而不知所止可不如鳥乎と云ふが如き是なり。此時は止は止まるべき所に止るが故に、止は衆徳の止なり。大學之道在明明徳在親民在止。至善と云ふ止は明德親民に伴ふ至善を云ふ、即人の君としては仁に止り、人の臣としては忠に止り、人の父としては慈に止り、人の子としては孝に止り、人の夫婦としては愛敬に止り、人の兄弟としては友悌に止り、人の朋友としては信義に止る等、能く其位地に従ひ、其責任を全ふする者、之を其止るべき所に止ると云ふ。休止はやめて行はず、止住は止つて之を行ふ、全く反對する者なり。一の止字にて此の不同あるは怪しむべきに非ず、一の亂の字の亂るゝと讀み、又は治ると訓ず。亂臣十人の如し、又一の利の字が私欲の小利となれば、義に背く失徳の字となり。又佛教に無上大利と云ふ者は、自利々他弘濟の大悲に名くるなり。又彼の忍の字の如きも堪忍と熟用すれば善となる。佛教には之を忍辱行と云うて、六度勝行の隨一とす。又殘忍酷薄と用ゆれば、人情を失へる獐猛虎狼の心を云、一字と雖も、其の義の雲泥なる此の如し。

今の止も此に同じく、廢止住の二義有て、其止住の時は、其本務に止り、本分に住

して、而後に其行爲の益々發達進行せん事を力むべきなり。此止住と進趣とを合稱して、止行二善と云、之を換言すれば、知足安分と進趣發達との二義となるなり。然るに、此中進趣の要務なる事は、人皆之を知れ共、知足安分の如きは、其要行なるを知らず。甚しきに至つては、之を文明の要行とせざるのみならず、却つて未開の卑行なるが如く認め、從來東洋の進歩せざるは、儒佛の教多く知足安分を教へて、退縮主義を尙ぶが故なりと妄斷して、之を筆舌に載せて儒佛を非難せし者あり、誣ふるも亦甚しと云ふべし。

いかにも儒佛の教、知足安分を示すと雖、是れ道徳養成の根本にて、世の醜行汚風の行はるゝは、概して皆此知足安分を忘るゝが故なり。而も是れ進趣發達に伴ひて、毫も放蕩懈怠を導く者には非ざるなり。故に、孔子は川の上に立て曰く、逝者斯如不舎晝夜と、河水の源泉滾々たるを指して、門弟子に勉強を勧められ、或は冉求の力不足と辭したるを呵して、力不足則中道而廢せよ、今汝は晝れりと誡められしが如き、すべて勇進奮行を勤めて、一も放縱蕩逸を許せし事なし。佛教も亦然り、布施持戒忍辱精進等と云ひて、六度行中、第四に精進を勧めらる。精進は即ち懈怠の反對にて、

精一に道に進むを云ふ。今日世俗が唯魚鳥の肉類を食せざるを精進と云ふ如きは、
謬りの大なる者なり。唯魚鳥の肉を避けたるのみにて大酒醉顛喧嘩争論に耽るが
如きは、全く精進の意味を誤解せる者にて、畢竟忌日の法筵には肉食もせず、心身共
に清淨にして、淨行を精一に勤め行ふを精進と云ふなり。且つ佛教の勇猛專精を尙
び、功德を愛して、飽足なく、勉力する尙ほ海の衆流を呑んで、止足の情なきが如しと
喩へらる。是等の證文を以て、儒佛二教が進趣發達を勸めて、毫も懈怠放縱を許さ
る事推知すべきなり。

然らば、知足安分とは、是れ各自當然の位地に止住する事にて、懈怠退去する事
には非ず、去り乍ら之を進趣發達に對すれば、自ら反對の意あり。如此の反對は、獨り此
二行の間のみならず、一切萬物の世に在る。皆此反對力が相對抗して、程よく權衡を
保つが爲なり。天地陽陰の相對する、男女剛柔の性を異にする、皆然り。天は高く、地は
低く、水は冷にして物を潤し、火は熱して物を燥かし、一は下より上に向ひ、一は上よ
り下に向つて流る。此水火の相反する者有て、我輩の飲食衣服百般の用皆足る。船車
の行通も、問對の音信も、水火の作用に依らざるはなし。其他寒暑の相反する、晴雨の

相異なる、世は皆反對の物に由て權衡調和を爲す者なり。然るに、世人往々此理を知
らずして、却て背理の言をなす者あり、曰く我は性急なり、彼は性寛なり、故に性質相
背ひて調和琴瑟ならずと、是れ太だ謬見なり。若夫婦共に性急に傾き、或は性寛に偏
しなば、却て一方にのみ偏局して、中庸に背く事あらん。其性質寛急不同なるは、却て
長短補充交互容與して、雙方全きを得るに至らん。男女の體格に於ける陰陽不同な
り、一身の腹背に於ける骨肉一様ならず、其反對する者互に相補益する所あるべき
なり。

彼の地球の運行宜しきを得るは、求心力遠心力の二力相反對して、互に相持して
相下らず、二力の平均する所、遂に公轉私轉して、此地球が運轉するなり。又我等が道
路を歩行するも、全く之と同じく、止住と進行との反對並行するに依れり。看よ右足
が進んで運ばんとする時は、左足は必ず能く安住底止する所あり。一足が能く踏み
止るが故に、一足は能く進行する事を得る。此左右の止住と進行とに依て、萬里の行
を爲す事を得、是れ反對者の能く調和の功を爲す例證なり。

兩者例證已に如是、實際も亦然り。知足安分と進趣發達とは、兩者殆んど反對すれ

共兼行並用亦妨なし。之を因果に分ん歟。因の行は進趣に従ふべし。果の報は知足安分すべし。進趣はすべて人爲にあり。勉強以て其職に盡すべし。安分はすべて天爲に任す。或は因縁の所感に従ふ外なし。人事を盡して天命を待つと云者はなり。又之を二利に分たん歟。自から奉ずる所は知足安分。にあり。他の爲にする所は進取發展にあり。己れに薄うして公事に厚かるべく。此事たる小にしては一身一家大にしては一國及萬國の事に及すべし。人各恒産あり。其職を守て吻りに轉職すべからず。而して奔走經營以て家道を擴むべし。是れ知足安分と進趣發達と相伴ふ所以なり。之を一國の上にて云ん歟。我邦の皇統連綿萬世一系なるは天壤無窮の神勅に原して萬國無比の國粹なり。國民宜しく之を奉載して皇室に忠事すべきは本分なり。而して此忠君愛國を全うせんには。文明を萬國に學び。彼の長を取て我の短を補ふべきなり。是れ其自ら守るべきを守つて而して盡すべきに盡し。安分と進趣とを全うするは止善行善の謂なり。

第八章 自他二利

上來吾曹の體徳たる佛性を發見する爲めに修行する。其修行の行相として。止行の二善を順次に實行すべき所以を説きたるが。此實行の目的は如何と云ふに。今茲に示す所の自利々他の二つなり。此二利の外に用事は無きなり。

凡そ世の善行美德と云は。何を以て標準として之を定むべきや。只此自利々他の外なし。此二利の徳多きを大善とし。其徳少なきを小善とす。其徳なき者を自ら無善造惡と云。故に苟も人たる者は。貧富貴賤。智愚賢不肖。等級無量なれ共。幾分か二利の徳なきは非ず。ノの兩點を集めて人の字を作りし如く。人は必ず一人にて世に居り難し。必ず他の人と相對し。互に勞役を交換し。有無相通じ。相扶助する所にて生活すべきなり。是れ農工商漁職務の分るゝ所。役心。役形。治者。被治者。朝野。君民。交武。海陸百工千職の出づる所以にして。是皆業務を區別し。利用を交換する者なり。若只自利のみを以て生活せんとせば。竊盜強盜若くは博奕の外に其術なし。彼等は利他の行

なくして、只自己の利のみ是れ謀る者なり。如此は人類社會に存すべからざる故に、之を囹圄に幽し、縲泄に縛す、人權を奪つて禽獸と伍するに至らしむ、是れ利他の行為なき所以、人の本徳を失ふが故なり。

凡そ他の禽獸虫魚の如きは生れ出づるや、直に生活を自己の用きに求め、各個に獨立自營を爲す物なり。人は然らず、其生るゝや、僅に蠢動するのみにて、自ら生活する事能はず、父母養育の保護に由て、多數の歲月を累ねし後、漸く社界に交る事を得る者なり。故に人は萬物に異つて最も多方面の恩恵に依つて、人と成る事を得る者なり。而して、其生活の職業の如きも、すべて他を利益するの事業に依つて始めて自己の幸福を受くべき者なり。假令何程數日力を盡して製造するも、其器物にして、人の用を作さざる時は、何人も之を購求する者無かるべし。假令微々たる小品を作りても、其品物が世人の用をなさば、猶相當の値を拂ふて、買ふ人あるべし。故に、社會を利益する者は行はれ、社會を害する者は廢せらる。物を造り、産するは、社會を益する資料なり。有無を更換し、勞役を貿易するは、社會を融通する媒約なり。賣る者は賣つて喜び、買ふ者は買つて喜ぶ、畢竟一體中の枝末分業なり。

如此人は仁にて、必ず慈悲仁愛の心行ある者を以て人とすれば、此仁慈の徳に背く者は、自から人面獸心と云べきなり。然れば即ち、人は其形も柔軟にして、頭角なく、背鱗なく、牙も虎狼と同じからず、爪も鷲鷹と異なる者は、殺伐に適せずして、仁慈に應ずべきものにて、他の諸動物の如く、人は天然の戰爭器械、即ち自然の武器を持せざる者なり。是れ佛陀の性徳を本具し、否聖教の薰化に依て、聖賢佛陀の眞徳を發顯すべき、萬物の靈長たる位地に生れたれば、此本具悲智の徳を養成擴充して、悲智圓滿の好果に昇進すべき、本源の資格を備へ居る者は、我等人類の性徳なり。此資格ある以上は、其性徳を切瑳琢磨して、佛と同等なる悲智圓滿の妙果、二利の光用を赫揚せしめざるべからず、是更に我等自己の功績に非ず、全く彌陀佛二利圓滿の徳化に、照融せらるゝの致す者なり。

乘彼八道船 能度海難度海 自度亦度彼 我禮自在人

此の一偈は龍樹菩薩の十住論中、易行品彌陀章に出でたる者なり。八道船とは佛の八正道を船に喩へて示す者なり。八正道とは正見、正思、惟正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八道なり。此八ッが皆悉く邪曲を離れたる、正直の道路なる故に、之を八正道

と云、此八正道を履行して、自覺も極位に達し、他の衆生をも、極位に導く、即ち難度の迷海を度して、涅槃の彼岸に登らしむる自度亦度彼の二利に圓滿なる故、之を自在人と尊崇するなり。

已に然れば、佛性を具して、佛道を行ずる者は、此二利の本務を全うするが正當の事業なり。若し佛教徒にして、此本旨に背き、假令禮佛誦經を怠りなく勤め行ふも、其目的は唯自己のみにて、極樂往生は唯自身一己の樂地を求むる者と思ふ如きは、惑の大なる者なり。凡そ人の尊ぶべきは、自利に非ずして利他にあり、古聖先賢は勿論志士仁人として、世人より尊崇賞讃せらるゝも、皆此利他の徳あるが爲めに、君父の爲め、國家の爲め、一般世人の爲に忠孝徳義を盡し、幸福利益を他に施す、利他の事業あるが爲に非ざるはなし、世人已に然り、況や佛菩薩の慈悲を以て心とし玉へる此善徳美事を、等閑にし玉ふ所以あらんや。

然れば、我等佛教を奉じ、往生を願する者は、本佛彌陀と平等の正覺を開き、利他圓滿の妙位、無上涅槃の極果を得れば、淨土往生は、此濟度衆生の本城に到つて、利他の事業に従ふ者なり。たとひ今日猶此娑婆界に滯留するも、唯是形體の表面のみなり、

内心は已に佛土に生じて佛の眷屬と成り、佛の家事を勤むべき身なり。之を見眞大師は有漏の穢身は替らねど、心は淨土に住み遊ぶとの玉へり。是れ眞宗に尊ぶ所の平生往生又は不體往生にて、此世に在り乍ら早や淨土往生人と呼らるゝ、正定聚不退轉の大利益を得し身の幸福なり、榮譽なり。上は 陛下へ忠勤を盡し、次は父母に孝養を旨とし、下は人民兄弟へ信義を行ふ、皆是れ佛陀光明中の任務にて、四恩報酬の要行二利並行の勝徳と云ふべき者なり。

第 貳 編

基 督 教 綱 要

廣 井 辰 太 郎 著

序

時勢推移の結果、基督教の形勢日に増々非にして、昔日の面影なしと雖も、其隋性的潜勢力は、三十年五十年にして地を拂ふべしと想はれざるなり。従つて該教が世界三大宗教の一として、依然靈界に覇を競ふべきは、縦し單に時間の問題となすも、全くこれを否認するを得ざるべし。さすれば斯教に對する研究熱は、

例令從來の如くならずとするも、宗教、倫理、教育、人生問題等に興味を有する者に對して、基督教は猶ほ一個の研究問題たるを失はざるなり。

本篇は、畏友米峰高嶋圓君の囑に依り、十四行三十五字詰の稿紙五十枚に、斯教の大綱を收むるの約を以つて稿を起せしもの、博引精議は、この小天地に於て素より企圖すべくもあ

らず。さりながら、予は斯教の起原、原始基督教義の大要、聖典の梗概、主なる儀式、及び日本の基督教等に關して、略ぼ其輪廓丈はこれを畫き得たりと自信するものなり。

宗教學專攻者、若くは基督教の専門的研究者に向つては、著者はこの小篇の一讀を強要するの意なし、但し基督教の何たるやに關する概念を有するの要あり、又その責任ある是等專

門家以外の人士に對しては、最短の時限と最少の勞力とを以つて、基督教を窺ふに便なるの書として、著者自らこれを推薦するを躊躇せざるなり。若し夫れ、この小篇にして、世に些少の裨益を與ふるを得ば、筆者の勞は爰に酬ひられたりと云ふ可き也。

廣井辰太郎識す

目次

總論……………一

第一章 基督教の歴史的準備……………二

 (一)猶太建國者摩西……………四

 (二)豫言者の運動……………六

第二章 基督教の起原……………九

 (一)基督の時代……………一一

 (二)耶蘇基督……………一二

 (I) 歴史的人物としての耶蘇……………一三

 (II) 傳説の耶蘇基督……………一七

 (III) 教義的の基督……………二〇

 (1) 使徒保羅……………二〇

 (2) パウロの説……………二三

第三章 經典

(一) 舊約全書 二五

(I) 歴史の部 二七

(II) 詩歌の部 二八

(III) 豫言の部 二九

(二) 新約全書 二九

(I) 歴史の部 三〇

(II) 書翰の部 三一

(III) 一般文書 三二

第四章 教義概要

(一) 神論 三三

(I) 三位一體の説 三四

(II) 神性論 三六

(III) 有神證據論 三八

(二) 世界と人間 三九

(I) 天地創造説 四〇

(II) 原罪及び贖罪の説 四二

(III) 奇蹟 四四

第五章 基督教の倫理

(一) 個人的倫理 四六

(I) 動機と行爲 四六

(II) 清淨、操守 四七

(二) 社會的倫理 四八

(I) 博愛 四八

(II) 國家、社會、家族 五〇

第六章 基督教の儀式

(一) 洗禮 五二

目次

(一) 聖餐式…………… 五四

第七章 日本基督教の概況…………… 五五

基督教綱要

廣井辰太郎著

總論

基督教は神話と哲學とを有せざる實際的民族の產物にして、教理に於ても經典に於てもこれを他の世界的大宗教に比較すると遙かに單純である。さりながら歴史上極めて變化に富み、一種不可思議なる猶太民族の胎内より生れ出て、或は希臘の思想と交渉し、或は羅馬の生活と接觸し、或は歐羅巴の文明と抱合して人類生活の一要因をなすこと爰に二千有餘年、現今科學の權威と物質的文明の旺盛と生活の意義に關する概念の移動等に依りて其勢ひ従前の如くならず、既に下り坂で僅かに惰力によりて其餘生を支へ居るか、觀なき能はざるも、兎に角過去二千年の間世界に於ける優等民族の生活系統に織込まれ、世界文明の潛勢力として今日に至つたのであるから、決して近き將來に於て遽かに其勢力の失墜するものと

は思はれぬのである。故に宗教の研究者は勿論世界文明の研究者に向つても、基督教は重且つ大なる資料を供給するのである。

基督教は教理の系統としては比較的單純である、單純とは云ふものゝ其二千有餘年間に於ける興敗盛衰の有様を精論して其單純なる本質に併せて史上に於ける變遷、位置、勢力等にも論及することになると中々廣汎なる大問題となるので、一概に單純の二語を以て評し去る譯には行かぬ。本文は其標題の明示するが如く斯教の梗概を述ぶるを以つて目的とするので、基督の人格を中心として其起原、發達、教系、經典及び日本に於ける沿革等に關して極めて大體論を試みるに止まるのである。故に若し予の一文が基督教の専門的研究者以外の諸子に、基督教とは何ぞやと云ふ問題に關して一通りの知識、概念を與ふるとを得るならば予の目的は爰に達せられたと云ふことが出来る。

第一章 基督教の歴史的準備

釋尊及び佛教を了解するには婆羅門教に關する知識が必要である。基督及び

基督教を會得するには猶太教の何物たるかを知らねばならぬ。世の中には先哲未言など云ふ言葉があるが、多くはコレ言葉文、音調丈である。如何なる偉人天才でも決して天から天降つた者ではなく、矢張り時代の産物である。釋尊も基督も時代と國土こそ異なれ共に時代の産物であるとは何人も拒むことは出来ぬ。釋尊と基督、佛教と耶蘇教と言へば、吾人の頭にはスグに到底相容れざる二物と云ふ様な感じが起る。これは全く歴史的偏見の遺物である。所が二聖の間には非常に異つた所もあるが、また非常に似て居る點もある。特に二聖が各々其時代に於ける位置、時の宗教に對する關係及び態度、また其宗教的經歷等は極めてよく似て居るとは逸す可からざる事實である。釋尊が始め婆羅門教の高僧に師事して、婆羅門教的の訓育を受け、後獨立の宗教觀を建て、佛教を創立したるが如く、基督も始めは猶太教徒として猶太教の會堂に出入し、猶太教の教師に師事し、猶太教の經典を尊奉して居つたが、後所謂救世主的自覺を起して基督教と云ふ新宗教の旗擧げをやつたのである。基督教は始めは猶太教中に於ける運動であつたのである。そこで見様では釋尊も基督も當時の宗教に對する謀叛人の様に想はれるが、

其實婆羅門教を離れて釋尊なく猶太教を離れて基督は無いのである。さすれば婆羅門教が佛教の出現に對する歴史の準備であつた如く、猶太教は基督教の夫れに對する史的準備であつたと云はねばならぬ。歴史には一貫せる計畫がある、而して史乘に現はるゝ一切の事相は決して離れゝに存するものではなくて、其間にはチャーロンと因果的の聯絡が通じて居るのである。基督教を以つて特別なる天啓であるなどと主張した時代もあつたが、ソレはダーキンやコペルニクス以前には通用したかも知れぬが、今日は苟くも多少の教育ある者ならば何人も斯くの如き妄説を認容する者は無い。そこで予は今基督教の起原を論ずるに當り、猶太民族の歴史に遡つて其重要な人物と事件とを簡短に叙述するのは當然の順序であると信するのである。

(一)猶太建國者摩西

西曆一千五百年前、即ち今を去ること約三千五百年前に埃及の殖民地に於ける酷遇と苦役よりイスラヘル民族を救出して其祖先の國たるパレスタインに歸り、

此處に國礎を定めたるは實にコノ摩西なりとせられてある。是より先イスラエル民族はパレスタインより轉々として西方に浪遊し、一時埃及に殖民したる游牧の民であつたが、當座は埃及王の治下に幸福なる生活を營むとを得たるも、後優遇は變じて虐使酷役となり、其民は土炭の苦みを受くるに至つた。其頃埃及に恐るべき疫病が流行して上下非常に混雜を極めた、即ち摩西は機乗ずべしとなし、一夜密かに其同族を率ひて埃及を遁走し、途次幾多の歳月を経て、又種々なる辛酸を嘗めて祖先の住地パレスタインに歸り、愈々此處に定住するに至つたのである。所が彼等が愈々落ち付いた所はカナソンの土地で、其住民は農業民族であつたから追々風俗習慣等が其地に同化せらるゝに従つて其單純素朴なる信仰も淫祠邪教の侵す所となつたので、摩西はコレを以つて由々敷大事となし、極力イスラエル民族固有の信仰を擁護せんと腐心し、其民族を戒めて斷じて他族の神を拜す可からざるを警告したのである。摩西はイスラエル民族の禮拜すべき神はエホバなるを極言したるも、敢て他神の存在を否認したのではなく、未だ一神教的見地に達して居ないのは明かであるが、併し其神の觀念は強き道義的觀念を包含し、其民族の

守護神として好戰的軍神であると同時に、神聖正義の神と云ふ考もあつたのである。即ちエホバはイスラエルの神にしてイスラエルはエホバの民なりと云ふのが摩西の唱へたる神學なのである。

六

（二）預言者の運動

古來預言者を目してたゞ未來の事を豫言する一種の賣卜者の如く考ふる者もあるがコレは預言者の正解ではない。勿論彼等の言論には未來の事を言つて居る事も澤山あるが、是は現在の民族を誘導し、覺醒せしめんが爲めの警告の言葉で今日世の識者先覺が時人の敗徳を嚴戒して、將來恐るべき非連の其頭上に落下すべきを警告し、改惡遷善を要望するのと少しも異いはない。要するに預言者とは敬神の熱火を其心中に包藏したる愛民愛族の志士を云ふのである。而して彼等の神學思想は摩西の夫よりも更らに一步を進め、エホバ神を以つて正善神聖の義神となし、責惡賞善の正神となし、イスラエルは其殊遇に浴し特寵を蒙るものとしたのである。預言者は正義を以つて殆んどエホバ隨一の屬性となしたので、此

處に他日宗教的普遍主義を生ずるの素因が伏在して居たのである。彼等が正義の觀念に重きを置いた結果はやがて一民族を偏愛する種族神、即ち十誡の所謂「嫉むの神」と目するを以つて足れりとせず、爰に神觀の本質の上に大なる進境を現はし、エホバの神は正義を愛するの神なるを以て例令其撰民たるイスラエル民族と雖も、若し不義邪道の民たるに於ては、彼は其民に加ふるに嚴罰を以つてすべしと云ひ、單純なる「義」の觀念に加味するに更らに大なる積極的なる「道」の觀念を以つてし、大ひに一神教的色彩を發揮し來つたのである。さりとて預言者とても敢てエホバ以外の神祇の存在を絶對に非認した譯ではなく、摩西時代の所謂他の民族は各々神を有するも、イスラエルはエホバの民なるが故にエホバの外信すべからずと云ふ民族神教(Monolatry)に對して、エホバの外に神有るも其神は外道の神にして信仰の價値なしと云ふマックス・ミュラーの所謂單一神教(Henotheism)を提唱したのである。

預言者の神に關する主要なる觀念は神の「正義」であつたが、既に神の「愛」と云ふ信念も多少現はれて居る。最も其「愛」は廣義の博愛大慈悲と云ふ様な絶對的のもの

てはなく、寧ろイスラエル民族に對する愛である、しかしコノ民族に對する愛がやがて耶蘇教の所謂人類に對する神の大愛の基礎となつた事は逸視すべからざる要點である。預言者の愛の神の觀念も未だ全くは民族的局限を脱却しては居らぬけれども、コレを其以前の純然たる民族の守護神に比較するに當つては、其愛の強度と純性ピュアとに於て時俗の神觀に比して優ること萬々である。然るに神の觀念は後世の預言者になればなる程益々進化して終にはエホバは唯一の神、天地萬有の創造者にして、彼の外に神なく、イスラエル人も異邦人もコレを拜すべきを主張する様になつた。勿論是は餘程後世の預言者の考であらうと想はれる。ソコデ預言者には人により、又時代により其宗教的見解に多少の相違ありて、今日の言葉で言へば硬派と軟派（軟派とは今日の政治家の如く日腐金に其節を賣るの謂ひにあらざして世を難じ、民を賣むる硬者の峻嚴なるに對して比較的穩かなりしを云ふ）との區別はあつたけれども、要するアモス、ホゼア、イザヤ、エレミヤ、イゼキエル、ダニエル等の所謂小預言者は、當時の慨世憂國の士、改革者として民族の救済を企畫したる人物である。彼等はエホバはイスラエルの神にしてイスラエルは其預言者なるを宣傳し、民族の自覺を喚起し、其使命を道破したのである。就中イザヤ、エレ

ミヤの思想の如きは殆んど基督教の思想に彷彿たるものがある。但し預言者の一神觀は倫理的、一神觀であつて、後世基督教の宗教的一神觀に比して一步を譲つて居ると云はねはならぬ。預言者は勿論バイブルに錄せられて居る以外にも澤山あつたに相違ないが、バイブルに出て居るのは所謂大小預言者を併せて十六人である、但し後章舊約聖書の段に至りて再論するの必要があるから今は精しく述べぬ。

第二章 基督教の起原

基督教には天啓論イニシエーション若くは默示説と云ふものがあつて、基督教は幼稚なる歴史的宗教より序を追ひ階を経て次第に向上發展したものでなく、一夜造りに既成の宗教として遽かに天外から授けられたといふ信仰がある、所謂近世の科學的精神に促がされて起りたる自由派基督教の外は斯く信するのである。故に従來の宗義的基督教即ち正統派と稱するもの、立脚地から云へば、猶太教は猶太教、基督教は基督教、其間何等歴史的、有機的の關係脈絡はないと云ふことになるのである。

但し斯の如き議論が今日の學風に合はず、現代の人心を首肯せしむるに足らざることは素より論を俟たぬ。今日の世界人生觀の立脚地から觀る時には自然、人事、宇内の萬象にして進化の大法に支配されぬものは一つもない、獨り宗教のみ例外として破格の取扱ひを受く可きものでない。さすれば是を精神進化の理法に照らして考察する時は、基督教の起るは其起るの時に起るにあらずして、遠く百年千年前に其起る可き因縁があるのである。予が前章に猶太教の概畧を述べたるは、基督教が既に一千五百年前のイスラエル民族の内の生活中に業に既に準備せられ、更らにコノ一千五百年間の民族的仰望が偉大なる基督の人格に流入して、新しき一大信念、一大理想として再現したることを説明せんが爲めの前提に外ならぬのである。基督教に存在する教理は實質的に殆んど猶太教に存せぬものは無いと謂つても強ち附會の言とは云へぬ。但し基督教の特色は神的、生活的、實踐的、經驗的として基督の人格に活現したる點にある即ち神人合一の理想が一種獨特の力を以つて具體的に基督耶穌の人格に織込まれて居る點にあるのである。

(一) 基督の時代

猶太民族は實に一種奇妙なる民族である。國民としては極めて團結心の堅き自國民の優越なる使命を信ずるの國民であつた。去りながら一方から觀れば實に不幸なる民族で屢々四圍の強國の爲めに威壓せられ、制服せられ、其殿堂は破壊せられ、其聖都は燒棄せられ、而して其民は土炭の苦みに呻吟して居つたのである。若し世に國家的奇跡と云ふものがあるならば猶太人の如きは實に奇跡的民族と言はねばならぬ。猶太民族は政治に死して宗教に生きたる民族である。彼等は他國に捕虜となつて居る間も、宗教的信念を中心としたる民族的意識を失はなかつた。而して彼等は將來必らず偉大なる建國者即ち救主が出現して、民族を統御し、國民を大盤石の上に置き、四圍の強國は來つて其足下に跪拜するに至る様な光輝ある黄金時代の到來すべきことを確信して居つたのである。基督の時代に於ては猶太民族は羅馬帝國の治下にあつて、依然虐政の爲めに苦められて居つた、従つて救世主の出現に對する民族の熱心は愈々其度を加へ、其當時に於てコレが熱

情は殆んど焦點に達して居つたのである。現に當時自ら救世主の名乗りをあげて天下に呼號した者も鮮くはなかつたことを想像することが出来る。然るに當時の猶太民族の信仰は如何であつたかと云ふに、コレは飽迄單純で且つ形式的であつて、所謂律法と預言者(律法とは摩西の五書、預言者は預言の書卷)とは信仰の基礎であつたのである。猶太人には本來教義と云ひ哲學的思索と云ふ可きものはなく、實踐躬行と儀文修行とを以つて其眞面目として居つた。この事は時の所謂パリサイ宗徒、また學者と稱せられたる者の宗教的態度に依りてよく分る。學者及びパリサイの徒は徒らに形式の些事に拘泥し、律法の字句に捕らはれたる極めて偏狭なる又極めて保守的の團體であつて、彼等が後に耶穌の一大敵國として兩者の間に激烈なる衝突を生ずるに至りたるは當然の事である。

(二) 耶穌基督

耶穌と云ひ基督と云ひ、今日では殆んど無差別的に使用せられて居るが、本來、耶穌は歴史的人物の名稱であつて、基督は耶穌の使命を表はす尊稱であることを忘

れてはならぬ。耶穌と云ふも基督と云ふも別に何の差支もない譯ではあるが、神學上から觀察すれば其間には大いなる意義上の相異がある。故に耶穌基督と云ふ時には神人兩性の結合と云ふことを暗示するのである。ソコデ耶穌基督を研究するには、今より二千年前に一猶太人としてこの世に生れ落ちたる歴史的人物として觀察すると、この歴史的人物に對する元始基督教徒の歸依崇拜と其時代の一種の哲學的思想によりて神化せられて、形而上的人格に祭り上げられたる教義的人物として觀察するとの二方面がある。所謂正統派と自由派即ち舊派と新派との分るゝ所は主として以上二種の觀察點にあるのである。即ち新約全書卷頭の三文書を根底として元始的、歴史的純基督を叙するものを自由派基督教若くは新神學と云ひ、約翰傳のロゴスの説、ポロの書翰等に現はれたる神人基督及びコレを根底として成立したる教會の宗義を立脚地として教義的基督を辯證するものを正統派即ち舊派基督教と云ふのである。予は今如上の二様の見地から耶穌基督を觀察して、基督論の概畧を紹介して見やうと思ふのである。

(I) 歴史的人物としての耶穌

耶蘇基督は羅馬帝アウグスタスの治世にパレスチナの小邦ガリラヤの僻村ナザレに生れた。其父はヨセフと云ひ工匠を業とし、母はマリヤと云ひ貞操なる賢婦であつた。耶蘇の生れた年代は西曆第一年よりも一兩年の前であつたことは諸家の一致する所である。併し其降誕に一年や二年の差異あることは研究問題としては幾分の價值あるものとするも、宗教道德の上から觀て何等の價值もないのであるから先づ西洋紀元は耶蘇の誕生を以つて起點として居ると見て敢て差支はない。聖書には卷頭に面働なる耶蘇の系圖やら、降誕に關する幾多の奇聞奇説、不可思議神秘的なる傳説が澤山併べてある。勿論是等も詩的にまた宗教道德的に解釋してよく玩味するに當つては種々なる教訓を含有して居るけれども、歴史的事實として文字的にコレを是認する能はざるは素より其所である。耶蘇には弟や妹が幾人もあつて彼は長子であつたらしい、しかし彼の兄弟は世に現はれて居らない。

耶蘇は家庭と彼を圍繞せる天然より受けたる教育の外に別に大した教育は受けなかつた。勿論コノ外に當時の寺小屋式の塾の様な所で讀み書きの如き單純

なる教育は授けられたに相違ない。最も耶蘇は奮約全書には餘程精通して居つたと見へ、其座談に於ける、説教に於ける、書中の適切なる名句を隨所隨時に引用して居る所を見ると彼は隨分學者當時のであつたとも言へる。耶蘇に關する傳説を調べて見ると、其誕生に關しては色々様々の話が出て居るが、生立ちの事は殆んど傳へてない、唯だ十二歳の時神殿に於て學者と對談し、其奇才、達辯、才識は學者をして舌を捲かしめたとの話が一つある位に過ぎぬ。一體偉人の傳記や言行録と云ふものは其人が没くなつてから始めて出來たもので、傳説や想像で以つて後に拵へられるのである。傳記と云ふものはコノ人間は後世非凡なる人傑になるに相違ないと云ふ見當を付けて母胎を出てから成人する迄の一切を豫め記録するのではない、コレ聖人偉人の誕生、生立等に關して小説的の物語りが捏造、勿論善意的にせられて、實史の中に混入し、後世の傳記研究者に鮮からぬ難儀を與ふる所以である。

さすれば耶蘇の誕生及び幼少の時代に關する傳説は、歴史的事實としては殆んど價值はない。耶蘇が世に知られたのは嬰兒時代、少年時代ではなくて、彼が愈々

發心得道として驟然立つて所信を天下に呼號し始めた後の事である。即ち彼三十にして始めて世の中に打つて出たので其名を成したの寧ろ早熟ならざる三十歳の後である。彼の説法は痛く時人の心底に徹し、彼の名を慕ひ、彼の教に歸依する者踵を接して到るの觀があつた。彼の傳道は僅かに三年或は一年とも云ふを出てない、僅かに三年の事業に依りて彼が後世に遺したる成績は實に偉大と言はざるを得ないのである。前にも一寸述べて置いた通りに、耶蘇の時代には民族の救世主の出現に對する熱望は殆んど其焦點に達して居つたのであるから、耶蘇が一度び救世主の名乗りを擧ぐるや、民衆が狂喜して彼を迎へたのは當然の事であるのである。然かし時人は多く耶蘇を誤解し、彼を以つて猶太教の經典舊約全書中に預言せられたる政治的救主即ちメシヤであると想ふたが、段々彼の説く所爲す所を観ると彼等が期待した様な意味合ひのメシヤではないと云ふことが明かになつて來たので、小數なる眞の歸依者の外は、學者、パリサイの徒等大擧して彼に反抗し論難攻撃は愈々嵩じて辛辣なる迫害となり、彼が猶太の大典メギラ逾越節にエルサレムに上つた時に終に宗敵の毒手に捕へられ不正の口添と不公平なる裁判

の爲めにゴルゴダ山上に於て磔殺の殘刑に處せられたのである。

(II) 傳説の耶蘇基督

耶蘇傳の研究は由來史實と傳説とが混合して容易に見分けの付かぬ様なバイブルを主なる材料としてコレに往々世界歴史の所記を參酌して考證研鑽するものであるから中々面働なる事業であるが、今日に於ては細目の點に於ては始終新なる發見、新なる研究によりて幾分かの變化を生じて居るけれども、大體に於ては十九世紀以來今日に至る迄の諸大家の苦心の研究によりて略ぼ決定して居ると言つても善いのである。

基督教家が耶蘇傳に對する態度は自由派の夫と正統派の夫との二つに分かれ前者は歴史的耶蘇を取り後者は傳説的耶蘇を取るのである。最も正統派と云つても今日の如き人文の發達したる時代にマサカ二千年前の篤信なる愚民の傳へた傳説を文字的に甘受する譯には行かぬから、正統派と云つても段々自由思想に蠶食せられて日に増し其領土を失つて居るから決して昔の儘の頑迷なる正統派ではないが、大體に於ては傳説的基督を取るのである、又コレを固執するに非らず

んば正統派と云ふことは出来ぬ。されば正統派即ちオルソドックスの目に影ずる傳説的耶蘇は如何なる者であるかを左に少しく紹介したのである。

耶蘇基督はアブラハム、の苗裔、ダビデ王の子孫なるヨセフとマリヤとの間に生れたのである。最もヨセフとマリヤはまだ聘定の間柄で同棲をして居らなかつたので、マリヤは處女であつたのである。即ちコノ處女が神の靈に感じて孕んで出来たのが所謂神の子基督である。基督の生れたのはユダヤのベツレヘム（耶蘇の地はナザレなること毫も疑ふの餘地なきも、教主はダビデ王の裔としてユダのベツレヘムに生るべしと舊約書に出て居るにより斯く附會せしものなり）で、其時東方の博士は空の星に導かれて彼を拜せんが爲めに遙々ベツレヘムに上つて來た、其時天地には種々の瑞徴奇瑞が現はれて彼が神の獨子たる事を證明したのである（因に耶蘇の誕生譚と佛陀の誕生譚との間に殆んど符節を合するが如き物語甚だ多し）彼は斯の如く神の獨子として處女マリヤより生まれ靈肉共に壯健に成長して世人をして其將來に大ひに屬目せしめたのである。果然彼は十二歳の弱齡に於て其品性見識共に凡を抜き、祭司長老をして舌を捲かせたのである（十二歳の時に宮に於て學者長老と語り彼等を驚）基督が世に現はれて救世主の旗擧げをなす前に、バプテスマのヨハネがユダヤの野に救世主の出現を

呼號して世俗に悔改めて救世の歡迎に備へんことを説法した。ヨハネは即ち基督の先驅者（ヨハネは蘇は始め彼れに師事したるが如し）である。基督はヨルダン河でヨハネに洗禮を授けられたのであるか、彼が洗禮を受けて水より上り來りたる時には、天忽ちひらけ神の靈鴿の如くに下り、天より聲ありて此は我心に適ふわが愛子なりと云へりとある。

彼は洗禮を受けてから惡魔に試みられんが爲めに野に往き、四十日四十夜の間種々惡辣なる惡魔の試みを受けて遂にコレに勝ち、愈々大悟徹底して神子の自覺を躰得し、愈々天下に新しき福音を宣傳すると云ふことになり、弟子も一人が二人となり、三人が四人となり、かくして集め得たる直弟子が十二人出來た。彼は十二使徒を提げて熾んに傳道をやつたが、當時猶太教の覇を握り居たる學者、パリサイ人と衝突して彼等の怨府となり、彼等の毒手に捕へられて獄に投ぜられ、終に死刑の宣告を受けて十字架上の露と消へ、葬られて三日の後即ち金曜日の午後處刑せられて日曜日の早朝復活して、間もなく昇天したのである。

附言、以上述ぶる所余の意見を交へず、只傳説其儘を略記したのであるが、妄誕不

稽なる奇説を除くの外は大抵事實と看做すを妨だけぬのである。

(III) 教義的の基督

傳説的信仰と哲學思想との結合によりて組立てられたのが教義ドクトリンで歴史的人物なる耶蘇の非凡なる言行と、悲慘なる末後とに關する原始基督教徒の哀悼敬慕の熱情に時代の哲學思想を加味して、思辨的に耶蘇の人格を描寫したのが所謂神子基督即ち教義的基督であつて、基督教の一大教義三位一體論の基礎であるのである。然らば今日正統派神學者の基督教の根本義として尊重する所の教義的基督、即ち三位一體の一位なる神の外に獨立する人格にして然かも神と同體同質なる神子基督の信仰及び教義は如何なる道程を辿りて現はれ來りたるかコレは素より多方面より觀察する必要がある。而して餘り煩瑣に流れざる程度に於て左に其由來を述べて見やうと思ふのである。

(1) 使徒保羅 保羅パウロは使徒と稱するもかの十二使徒の如く耶蘇の直弟子ではない、彼は始め名をソシリウスと號し、基督教の大敵を以つて自ら任じ、猶太教の宣傳者また擁護者として極力基督教の撲滅に盡し、有らゆる手段を以つて教徒に迫害

を加へた人物である。然るに彼は矢張り耶蘇教迫害の目的を以つてダマスダマスと云ふ所に赴く途中不斗思當る所ありて心機一轉遽かに熱烈なる耶蘇の信仰者となつた。「善にも強く惡にも強い」と云ふ言葉は保羅の場合に文字的に當嵌まるとは言へないか、形の上から見ると先づソシリウス云ふもので、耶蘇教を惡むの情の強かつた保羅の改宗後の信仰の力は又非常なもので、彼は萬難を排し、生命を賭して基督教を傳道する様になつた。保羅は一面基督教義の開山であると共に、基督教會の創設者傳道事業の率先者である、而して基督教を遍く世界に傳播せしむるの基礎は實に彼保羅が築いたのである。

彼が頑強なる基督教の迫害者より一轉して、熱烈なる傳道者となるに至りたる動機は、決してダマスダマスに赴く途次突然に起つたと云ふが如き單純なものではあるまい。彼は兼ねて耶蘇教徒の堅忍不拔なる信念に對しては、敵ながら天晴れと思ふて居つたであらふ。彼等を苦しめ迫害して居る中にも彼は心に一種の疑惑不安の念を有して居つたに違ひない。即ちダマスダマス途上の改宗は唐突の心的發作ではなくて、日頃鬱結して居つた此疑惑不安の妖雲が此時に遽かに散じて彼の

心に光明の世界を現じたのである。

基督(救主の義)が十字架にかけられると云ふことは猶太教の立脚地から観ると全然不可能である。故に保羅は基督の生前の説法や其弟子の信仰には心密かに感服する所があつたけれども、奈何せん耶蘇は十字架に掛けられた十字架の露と消へた人間がド^トして救主たるを得やうかと云ふのが彼に取つての蹟石であつた。しかし又一方から考へると斯くの如き立派なる人物が何故に十字架に掛けられたのであらふかと云ふ疑問も起る、即ち保羅の心中には切實なる求道の精神と、古來の猶太教典に於ける文字的信仰との矛盾があつたのである、然るにこの大矛盾大疑問はダマスコの途上、彼の自律的信念が他律的信條に打勝つたことによつて、忽ち解決せられ、彼は耶蘇の十字架上の死は自身の罪惡の爲めにあらずして世人の罪惡の爲めである、即ち耶蘇は世の罪を一身に引受けて世人の身代りとして磔殺せられたのであると云ふことを悟つて、茲に翻然として基督の教門に降つたのである。

以上の單純なる信仰は保羅の基督觀の根本であり、且つ基督教々義の基礎とな

つて居る。保羅は一面熱烈なる信仰家であると共に、一面深刻なる思想家で、彼は立派なる哲學者、神學者たるの素質を具備して居つたのである。ソコデ彼は基督代死の信仰を單に信仰としておくを以つて足れりとせず、コレガ神學的説明を試みんとを努めたのである。是即ち基督論なのである。保羅惟へらく、基督は世の罪の爲めに死せり、故に彼は復活して神の御位の許にかへれり、否な彼はこの世に神の獨子として生るゝ以前より神と共に居れりと。即ち保羅は天地開闢の始より基督は神と共に在つたと考へた、而してコレを靈なる天人と呼んで居る。然らばコノ天人と歴史的人物たる一猶太人たる耶蘇との關係如何。保羅は天人なる基督と人間なる耶蘇とが此世に於いて合體したと観るのである。十字架に死んだのは基督耶蘇の肉體である、肉體は罪の根元である、従つて基督の十字架上の死は罪の滅亡を意味する、故に人は己れの罪を悔ひ、基督を信ずるによつて救はるとなすは、保羅の贖罪説である。

(2) ロゴスの説 新約全書の卷頭から第四番目に約翰傳と云ふのがあつたが、開卷第一太始に道あり云々と出て居るが、この道が即ちロゴスである。ロゴス

は希臘語で言語、道理等の意である。論理學の事をロギックと云ふのは語法や思想の法則を研究するの學と云ふ義でロゴスと云ふ言葉に出て居ることは明かである。然るに此處に云ふロゴスは同じロゴスに相違ないが、神學上で云ふロゴスは一個の實在、本體であつてヨハテが説いたと云ふことになつて居る。素よりコレは十二使徒の一人なるヨハテが説いたものとは思はれぬ、但し其約翰傳の著者が何人であらふとも、ロゴス教義の祖述者が何人であらうとも、約翰傳にコノ教義が出て居つて、基督教々義の一大資料となつて居ることは争ふ可からざる事實である。

是より先ロゴスの説は耶蘇と同時代のアレキサンドリヤの哲學者フィロなる者が説いて居るが、約翰のロゴスの説はこのフィロ及希臘の哲學に取つたものでヨハテはロゴスは太始より神と共にありて、神の獨り子である、彼は自身神であつて他の被造物とは根本に於て異なつて居る、彼は天地創造及天啓の中介者であつて肉體と成つて此世に現はる、是耶蘇基督となすのである。最もヨハテの説によるとロゴスは超然的實存にして彼自身もまた神なるも、即ち本質に於ては彼

は神と同躰なるも、人格的存在者としては神を離れて別個の人格を有し、而して神に依りて存在する者となすのである。勿論ヨハテの説は保羅の説く所と其概念の上に於ては別に相異した所はない、ロゴスの説は寧ろ保羅の耶蘇に關する信念を教義的鑄型に入れて形式的に表はしたものと云ふべきである。

以上(1)及び(2)に述べた保羅と約翰の基督觀は教義の樞軸となつて、所謂三位一躰説の基礎となつて居るのであるが、三位一躰論は特別の題目の下に後章に略述する所あるべきを以つて今此處に論ぜない。保羅や約翰の説は教義として觀るに當つては當代の世界觀を根底として居るから、新しき頭腦の人間には其儘受取る譯には行かぬが、其形式論を取除いて直ちに其信仰の堂奥を窺ふに當つては千古不磨の宗教的眞理を含有し居ることを認むるのである。

第三章 經 典

基督教の經典は舊約全書と新約全書の二部より成り、舊約全書は本來猶太教の經典にして新約全書は基督教の經典であるが、猶基兩教の經典は一貫したる神の

天啓によりて出来たもので、絶対無謬の神書であると云ふ所謂經典不可誤の宗義を基礎として兩部を合せて聖書の名の下に基督教のバイブルと看做される様になつたのである。勿論人間が理性の權威を無視して純信仰の上に安住して居る間は、經典無謬の説も無事であるが、苟くも信仰の理的根底を要求する様になつて來る曉には、從來一點一畫の誤謬なしと信じて居つた神聖なる經典中に幾多の矛盾誤謬を發見する様になるのである。そこで宗教萬能の時代が過ぎ去つて理性の要求が精神生活の上に相當なる歩武を占むるに至ると、爰に始めて經典の批評的研究が始まるのである。基督教經典の批評的研究は文藝復興の時代即ち十六世紀の中頃からポツ／＼起つて來て、科學の進歩、歴史的、文學的研究の精神が勃興するに従つて歩一歩益々盛んに成つて來た。最も聖書批判の鋒先はまづ舊約全書に向けられて、直ちに新約全書には及ばなかつたのであるが、去りながら聖書完全説が舊約の一角に破れたる以上は他日また新約の聖地に龜裂を生ずるに至るのも止むを得ざる勢ひで、果して十九世紀に至つて新約全書も辛辣なる批評眼の的となるに至つたのである。併し新約に對する批評的研究には舊約に對する夫

れに比して幾分の手加減の存するは昔も今も變りはない。

(一) 舊約全書

舊約全書は其名稱の表はす如く、新約全書より舊きことは無論の事であるが、この書が今日吾人が有するが如き一冊の經典として結集せられたのは、多分耶蘇降誕のズット後、新約全書よりも後であると想はれるのである。舊約書は三十九卷より成り、これを歴史の部、詩歌の部、預言の部の三種に分類する。

(I) 歴史の部

歴史の部は猶太民族の興敗を叙述するもので、遠く筆を天地開闢の昔に起こし西洋紀元約一世紀前に及ぶのであるが、この書は現今の史家が史實に對するが如き學究的態度を以つて編纂したるものに非らざるが故に、其中幾多の神話的描寫年代の錯誤、事實の逆轉、名稱の誤記等を含むことは拒む可からざるの事實である。然かし大體の氣分が記述を旨として居るに依つて、コレを歴史の卷と稱するるのである。歴史の卷は創世記以下、士帖迄の十七卷より成り、創世記出埃及記、

利未記、民數記、申命記の五卷には特に摩西の五書の名を冠するのであるが蓋し、摩西の著述でないことは論ずる迄もない。

(II) 詩歌の部

詩歌の卷は約百記、詩篇、箴言、傳道の書、雅歌の五篇を包容する猶太民族の文學とも稱すべき物である。文學とは云ふものゝ敢て純文學といふのではなくて、宗教道德の信念、理想、教訓を詩的に美文的に言ひ表はしたものである。約百記は確固不拔の信念によりて人生の有らゆる悲惨苦痛に勝ちて大安心大樂境に到達したる約百の光輝ある經歷を物語るもので、煩悶解決の良書として、惱める者の友として、基督教徒の愛讀するものである。詩篇はもと太古の樂器に合せて歌つたもので、幾多の高遠なる宗教的、信念及び教訓を含む宗教文藝の傑品として、コレ又基督教徒の愛誦する所となつて居る。箴言は通常ソロモンの箴言と稱して處世の要道を説きたる一種の格言集の如きものであつて、また一讀の價値ある好書である。要するに舊約全書三十九卷中以上の三種は特に教訓と慰藉に富むものとして尊重せらるゝのである。其他の書卷中にも素より見る可きもの甚だ多いけれども、

限りある紙上に一々其内容を紹介することは到底不可能なるを以つて内容の説
明は乍遺憾コレを省略せざるを得ないのである。

(III) 豫言の部

本部に屬するものは以賽亞、耶利米、以西結、但以理、何西阿、約耳、亞廢士、阿巴底亞、約拿、米迦、拿翁、哈巴谷、西番雅、哈基、撒加利亞、馬拉基の十六卷で、始めの四卷を大預言者と稱し、後の十二卷を小預言者と云ふ。預言者とは前にも一寸陳べた通り、將來起る可き事を豫め預言する者の謂ひではない、彼等は厚信熱血の國士、宗教的政事家、で燃るが如き三寸の舌端を以て民族を戒飭し、激勵したる一團の人物である。猶太國にはバイブルに現はれて居る者の外に多數の預言者があつたのである、而してバイブルに出て居る者は其最も傑出したる者のみである。

(二) 新約全書

新約全書は耶穌の生涯及び初代基督教の情勢を記述するもので、總計二十七卷より成り、内容の類似、編述の時代及び人物等によりて、コレを歴史の部、書翰の部、一

般文書の三部に大別する。新約全書の用語は希臘語であるが、中には其原本中アラマイック語で書かれたものもあると云ふ説もある。アラマイック語は希伯來語の系統に屬する一種の方言で、先づ巴利語の梵語に於けるが如き關係に居るのである。新約とは舊約の『舊き約束』に對して『新しき約束』即ち神が基督を通して人類に與へたる新しき約束の意であつて、耶穌の死後大凡五十年から百五十年迄の百年間に結集せられたものである。

(I) 歴史の部

四福音書使徒行傳の五卷は即ちコノ部に屬する。福音とは「喜びの音信」と云ふの意で、耶穌基督の救済の説法及び其前後の誕生終焉の事情を詳記するものである。新約全書の巻頭より馬太傳、馬可傳、路可傳、約翰傳迄の四卷を四福音書と稱するのであるが、コレは著者の目的思想筆致が色彩を同ふして居る所からカク云ふのである。就中馬太馬可路可の三書に於て特に左様であるに依て、コノ三書を共觀福音書又は對觀福音書と名ける。

福音書中馬太馬可の二卷は大體に於て其内容は一致して居る、而して馬太は最

も多く耶穌の説法、教訓を記述して居る點に於て異彩を放つて居る、かの有名なる『山上の垂訓』は馬太の五章乃至七章に出て、居る、使徒の派遣に際する懇切熱心なる訓戒もまたコノ書に出て、居る、而してコノ點は稍や馬可傳と趣を異にして居るのである。路可傳は共觀福音書の一であるが、また頗る克く使徒行傳に似ている所がある、故に學者は使徒行傳を以つて路可傳と同一の記者の手に成りたるものとなし、寧ろコレを路可傳の後篇と看做すのである。約翰傳は福音書中最後に出來たもので希臘哲學の影響を受けたる形跡明かである。コノ書は三位一體の教義に因縁淺からざるものであつて、教義上の立脚地から觀ると最も大切なる物になつて居る。最も歴史上の耶穌を眼目とする新派の學者宗敎家はコノ書に左程重きを置かぬ。

(II) 書翰の部

書翰とは使徒が教會又は個人に宛てて贈りたる獎勵、勸告、慰安、仲裁、説法等の手紙であつて、使徒保羅手裁の書翰と云ふことになつて居る。而して保羅の書翰の中其出色のものは、羅馬書、哥林多書、加拉太書の三文書で、書名は手翰を贈られた教

會所在地の名稱である。是等は先きの福音書よりも早く出来たもので、大抵紀元後五十六年乃至五十九年の間に成つたものである。其外コノ部に屬するものは、以弗所、哥羅西、腓立比、帖撒羅尼迦、提摩太、腓利門、提多等である。

(III) 一般文書

所謂保羅の書翰なるものは教會若くは個人に宛てたのであるが、コノ部に屬する文書は只希伯來書を除くの外は以下七篇共に夫々筆者の名前が冠せられて居る。而してコレ等を一般文書と稱するは誰ともなしに一般世人に讀ましむる目的で編述せられたからである。

新約全書の卷末に約翰默示録と云ふ一書があるが、コレは獨立の一卷を成すを以て項を新らたにして説明を試みるの必要を認めぬ。本書は世界の末日を描寫したる妄誕不稽なる奇書、怪書であつて、宗教道德の立場から觀て決して價值あるものとは考へられぬ。勿論世にコノ妄誕不稽なる書に關して牽強附會の説を樹つる學者もあるけれども、本書は一種の好奇心を煽動する以外には殆んど何等の價值なきものと斷定しても大過なしと信ずるのである。

第四章 教義概要

(一) 神論

神學上の神論は哲學上の實在論に該當するもので、後者が思考の根本原理とすれば前者は信仰の大本である。然るに神は本來信仰の對境なるも信仰を言語を以つて發表するに當つては必ず智的様式に依らねばならぬから、有神論は時代の哲學に其形骸を藉らねばならぬと云ふことになる。然るに後來の神學者は其形骸を以つて宗教の本質と誤認し、陳腐なる哲學的外皮を被りたる舊信仰を飽迄墨守して止まぬ、コレ即ち基督教と新思想との衝突を來たす所以である。最も今日の神學者は表面古説を尊守するが如きも内心到底現代の世界觀に反抗すべからざることを諦め居るが故に内外伴らずして三世紀の神學思想を其儘信する者はないと云つても恐らく過言ではあるまい。故に正統派基督教が公然其宗義を改竄せざる限りは表向きには三位一體説の如き迷信も依然其命脈を維持して居ると云はねばならぬ。新教中最も進歩したる信仰を有する獨逸派神學の如きは、一切の

獨斷的神學説を放棄して單純なる耶穌の神人父子觀に歸へり、コレが様式は較近の學問上の結論に求むるのである。

(I) 三位一躰の説

三位一躰の説とは其文字の表はすが如く、神は三にして一、一にして然かも三なりと云ふ極めて不合理の説である。但し頭から不合理と云つて仕舞つては議論にはならぬ。然らば昔の基督教徒は何故にコンナ不合理なる神學説を固持したのであるか、敢て不合理であるからコレを頑守したと云ふのではなく、コレには何等かの信仰上の因縁があるに違ひない。然らば如何なる因縁があつて斯の如き不合理なる信念を生ずるに至りたるかは斯説を説明する中に自ら分ると信ずるのである。

然らば教義上て云ふ三位一躰の神とはドンナ神を云ふのであるかと云ふに、獨立自存なる父なる神と、人間世界に己神を啓示する子なる神と、神人の間に介在して道德的宗教的使命を果たす聖靈なる神と、三對の神があつて、各々獨立別個の人格を有し、然かも同質同躰の獨一神であると云ふのである。コノ説は三世紀に於

て非常に八ヶ釜しかつた議論で、四世紀末にコンスタンチノロブルで開かれた宗教會議で、三位一躰の宗義は愈々確立して基督教會の根本教義となるに至つたのである。然るに今少しく前代に溯つてコノ宗義の淵原を探求するならば、保羅、約翰を論じたる際に既に論及したる基督は天人として世の始めより神と共に在り史上の人物たる耶穌と彼が洗禮を受けたる時に合躰したと云ふ保羅の説、約翰傳に出て居る彼の有名なるロゴスの説及び希臘哲學の思想等がコノ教義の要材となつて居ることは明かである。原始基督教徒には基督は凡人ではない、神の子である、然かし若し神の子なりとすれば、其十字架の死は不可能である、非凡の人―神の子と十字架の死、コレ原始基督教徒の非常に煩悶したる苦しき謎であつた。所が彼等は基督の死は己の罪の爲めの死にあらずして所謂世を救ふ神の小羊となつて世の罪を贖ふ爲めに死んだのであると云ふ信仰に一條の光明を認めて、爰に始めて其の疑問を解決することが出来たと推測せらるゝのである。若し基督が神の子であるとすれば其威嚴に於て、又其實質に於いて父なる神と略ぼ同じき父なる神の外に獨立の本躰を有する者に違ひないと考ふるに至つたのである。去

りとして父なる神の外に存するとせば一種の多神教となるので、父なる神の外に獨立の神格を有する獨自一個の神と考へながら、一方には又父なる神と一躰不二であると思考したのである。しかし原始人民は矢張り原始人民で、彼等も相應に合理的要求はあつたものゝ此合理的要求は元々其單純なる信仰の擁立を計らんとする素志に外ならぬのであるに依つて、彼等は此邊の理論で一通り諦めがついたのであらふ。要するに三位一躰論の抑々の成立は先づコンナ物である。而してコレガ聖書天啓説と、教會の權威に依りて支持せられたる宗義神聖説とに保障せられて爰に愈々吾人が今日有するが如き三位一躰論が出来あがつたのである。

(II) 神性論

神は無限絶對にして一切を超越する人格的存在者、天地萬物の創造者、又支配者であつて永遠、全智、全能、遍在、神聖を以つて其屬性となす者である。彼は聖善なると同時に無限の愛を以つて人に望む所の父である、されば聖書に「神は愛なり」と言つてある。以上神の諸屬性に就いては聖書中一々據所があるので、神をかく觀察することは新教通同の觀法である、否な^{コノ}點に於ては舊教とても又別に異

議を申立てぬのである。

但し神の人格と其絶對、全智と人間の自由即ち道德の基礎とは如何にして調和することが出来るか、コレ基督教神學の一大難關である。最もコレに對する正統派基督教の言分は、神は絶對なるが故に能はざる所なしと云ひ、AはAなりと云ふ様な説明にも何にもならぬ獨斷説を以つてコレを不問の中に葬り去るのである。勿論神明絶對論やインスピレーション説等を論據として論ずる場合には、^{コノ}前提の正否如何は別として如上の論斷は形式上矛盾はないが、到底人智の満足を買ふことは不可能である。神は全能なるが故に二二が五と云ふ事は彼に於て可能であり、^{ダー}キンの進化論はバイブルに出ていないから誤謬であると云ふ推論は、愚説ではあるが論理の形式としては強ち拒否することは出来ぬ。

近世の科學的神學は^{コノ}困難を自覺して、相對的理由に依りて^{コノ}難問を解決せんと試みて居る。曰く神は無限絶對なるが故に有限の人智を以つて明かに説明することは出来ぬ、即ち吾人々間が不完全なる擬人的言語を以つて神性を智的に描寫する時には假りに彼を人格と看做すは實に止を得ぬ。然かし人格は人の

最高屬性なるも猶ほ色々の缺點が伴ふて居るから、吾人は人格の觀念に附隨する有らゆる弱點を取り去りてコレを神の屬性の一に數へ、以つて神を絶對的人格と思考するのである。絶對的人格—コレ既に自家撞着である、自家撞着てはあるが、吾人有限の人智を以つてコレ以上を考ふことは出来ぬ而して又かく考へる方が都合が善いのである。其要を摘まんで言へば新しき神學者の議論の立方は先づザットコンナものである。以上の神學論は所謂價值判斷ウエルトウレムスの上に立つもので、獨逸の神學者はコレを具體的有神論コンクレテヘイステイスマスと稱へて居る。

(III) 有神證據論

神の存在を證明するに當つて基督教神學者の常用する論法は色々あるが、其主要なるものは左の五種類である。

- (1) 萬有的證據論
- (2) 終局的證據論
- (3) 人類學的證據論
- (4) 道德的證據論
- (5) 宗教的證據論

右の中第一は整然として一糸亂れざる宇宙萬有は偶然に存在するに至りたる物にあらずして必ず其大原因がなくてはならぬと云ふ因果の論法から神の存在

を證明するもの、第二は宇宙萬物には夫々一定の意匠、目的がある以上は世界には必らずよく思惟し、立法する所の絶對神有らざる可からずと云ふ説、第三は人間は心靈的の者なるが故に、人間にコノ靈性を賦與したる靈的大自在者あらざるべからずと主張するもの、第四は人間界には嚴正なる道德的因果律行はれ、且つ人間には良心なるものが備はつて居つて善惡の判斷を爲す以上は、宇宙にはコレに該當する神明有らざる可らずと論ずるもの、第五は宗教普遍の史的事實を根底として、神人の相互關係によりて生ずる宗教が世界的現象たるの事實は、コノ關係を規定し且つ誘起したる大原因即ち神無かる可らざるの證なりと斷ずるものである。以上の論法は極めて不備であるを免れぬけれども、神學者の好んで使用する所の有神證據論である。而して其弱點の那邊にあるかは讀者の容易に發見する所であらふと信ずるにより爰にコレが評論を試むることを省略する。

(二) 世界と人間

基督教は世界人生に關して果して如何の見を有するか、二元論か將た一元論か、

創造説か、進化論か、性善説か、性惡説か、コレ等は以下論ずる所に依りて略ぼ了解が出来るであらふと信ずる。前にも述べた通り基督教は永き歴史を有する事故、其教相は時代に依り、教派に依りて多少の相異があるから、一々精數分解的に論ずるとは限有る紙上到底思も寄らぬことである。そこで本論は始終ヨリ永き歴史とヨリ大なる勢力とを有する正統派を主とし、原始基督教と、現代的基督教とを賓として立案したるものなることを記憶せられんとを希望するのである。是よりコノ綱目に屬すべき諸教義を捕へ來りて簡短にコレを紹介して、本章を結ぶことにする。

(I) 天地創造説

基督教々義の世界觀は全く舊約全書の天地開闢の説を基礎として居る。宇宙は始め無であつたが、コノ無即ち真空の中より神が森羅萬象を創造したといふのである。舊約書の天地開闢説に依れば天地萬物は、彼の星雲説や、進化論などで云ふ通り、世界は始め一種の氣體であつたが、コレが冷却凝結して地球となり、無機物から有機物、植物から下等動物、下等動物から人間と云ふ様な風に次第に進化した

る物ではなく、全能全知の神が一擧にして無より創造したと云ふことになつて居る。舊約書には二種の創造説が出て居るが、一説の方では天地が出来るとスグ人間が出来、其次ぎに草木禽獸等が出来たと説いてある。最もコレは他の一説によりて訂正された形にはなつて居るけれども、何れにしても幼稚なる昔話たることを免れぬのである。また基督教々義は天動説であつて、地球は扁平なる物なることを説いて居る。コペルニクスやダーキン以前にコンナ考があつたと云つても別に怪しむを要せぬ、今日でさへ世界には地球扁平説を擔出す様な變物も出て來る事がある位だから昔の人がかく考へたのも無理はない。しかしながら聖書のインスピレーションを信じ、基督教々義を固執する神學者は今日の學説に反對なる如上の傳説をも固執すべき筈であるけれども、彼等はコレは最早や到底不可能なることを悟つて居るから、バイブルや宗教の世界觀は何とか近世の學説に合ふ様に附會するか、さもなければ努めてコノ云ふ問題は沈黙の中に葬り去らんとして居るのである。コノ點から云ふと嚴密なる意義に於ける正統派なるものは既に存在して居らないと云つても差支はない。

天地開闢の説は、世界は神の創造にかゝるものなりと云ふ宗教的信念を時代の幼稚なる知識によりて説明したるもので、本来物理説ではなくて、一片の信仰と考ふれば何の苦もなく解釋が出来る。天地創造譚の記者の本意は「神世界を造れり」と云ふ事を教ふるにありて「如何に世界は造られたるか」を説くには無かつたと考ふべきである。

(II) 原罪及び贖罪の説

原罪の説は正統派基督教々義の一大樞軸であつて基督教世の聖業と密接なる關係を有するのである。基督の使命はかの十字架上の死に依りて罪海に沈淪したる人類を救ふにあつて、救主の十字架上の最後は人の罪（ペリヤ、ネイテ、ユア）即ち罪性を根底より破壊したのである。人間界には如何にして罪惡起りしか、コレに關しては創世記第三章に出て居る人祖アダム、エバ墮落の傳説が説明を與へて居る。アダム、エバは人類の大祖で、この人類の第一の父母たるアダム、エバが神に背きて犯したる爲めに罪と死とは爾來人類の免るゝと能はざる恐ろしき運命として永劫にコレを支配することになつた。故に人間は生れながら人類始祖の罪性を遺傳せられて

居る、而して罪は即ち滅亡である、死である。そこで基督が十字架上に悲惨なる最後を就げたのは自分の罪の爲めではなくて、其肉の死に依りて罪性の根本を斷滅せん爲めの神の攝理に出たのである。使徒保羅は基督の死に依りて人性に鬱結したる罪惡は全く消滅したるが故に基督を信する者は肉に於て彼と共に死し、靈に於いて彼と共に生きて新しき不朽不滅の新生命に入るべきとを説いて居る。要するに人間は始祖の犯罪に由りて先天的に罪人（シンナ）となつたと云ふのが所謂原罪の説である。然るに贖罪論は原罪論と同質異形の教義であるから、兩教義は必然相俟つて論ずべき性質のものである。人性善惡論に關しては古來東西共に異説があるが基督教は「人性は本來惡なり」と云ふ説に左祖するものである。最も人性善惡論と云つてもコレは倫理的に觀ると宗教的に觀るとの二法あるが、基督教々義に於て「人性惡なり」と云ふのは宗教的見地から觀察したるものなることは論を俟たぬのである。基督教では人性は本質が既に惡であつて、如何に立派なる言行も未だ以つて人間の罪惡を償ふに足らず、只だ十字架の基督を信するに依て救はるゝとを得るのみで、コレ外には救道は斷じて無いと云ふのである。萬

民は只だ神の獨子基督耶穌を救世主と信ずるによつて、肉と罪とに死し、罪惡の羈絆を脱して神意に適ふ神の愛子となることが出来る。基督の死は罪ある萬民の代死なるが故に彼を信じさへすれば、人は間接に十字架に掛りて罪の肉に死して新たなる靈の生命に生くることが出来ること云ふのである。基督の死によりて神と人とが和解せられ、爰に救濟の神企が限定せられたとなすものが所謂贖罪の説で、コノ兩説の祖述者は保羅であるのである。

(III) 奇蹟

宗教史を按ずるに奇蹟譚を有せざる宗教は古來一つも看出さぬてあるによつて、基督教の奇蹟に對する觀察の態度は一般宗教の夫に對する觀察の態度と同一であらねばならぬとは素より論を俟たぬ。奇蹟とは普通に自然の法則に對する全能者若くは全能者より偉力を分與せられたる聖人の任意的干涉に由つて生ずる反則的現象と考へられて居る。基督時代の東洋は僅かに希臘の合理哲學者及び其流を汲める羅馬の思想家を除くの外、擧げて奇蹟の信者であつた故に、歴山府の哲人プロテウス其他の哲人さへも奇蹟を行つたと云ふ話が傳はつて居る位で

ある。奇蹟は神の威力を表はす必然の一要件として、預言者の行ふ可きものと信ぜられて居つたから、舊約全書中には其例實に擧げて數ふべからずであつて、エリヤ、エリシヤ等の奇蹟行爲に關する幾多の傳説が後世に傳へられて、聖書に録せられて居る次第である。舊約の預言者が奇蹟を行つたとすれば、基督が奇蹟を行ふと云ふとは原始基督教徒の位置から觀れば當然にあらねばならぬ事である。基督は奇蹟を行ひながら、「コレを人に告るゝ勿れ」と云つてコレを口外するとを誡しめたのを見ると、奇蹟を行ふ事は自家の使命と直接の關係ありと認めなかつたに違ひないが、さりとて基督もまた時代の産兒であつた以上は、自然法に關する嚴格なる觀念なき時代に奇蹟の可能を信じ、コレを行ひ且つ行はんとしたる事は疑ふの餘地を存せぬのである。基督の行つたと傳へらるゝ奇蹟中には色々あるが大別すれば、自然奇蹟(酒を水に變へし話、ラザロ復活の話、二魚五片の麵包を以つて五千の人を養ふた話、耶穌水上を歩行したる話、無花果樹を詛ふた話等は自然奇蹟の類に屬す)と醫療奇蹟(費人の息子を癒やしたる話、百人長の下僕を癒したる話、)の二つに類別することが出来る、其外後世には聖者の遺物の媒介力に依つて、聖畫聖像の利益に依りて行はれたる奇蹟も澤山あつたのである。

奇蹟の解釋法には文學的に解釋すると、宗教道德的教訓として解釋するとの方法がある。近世の學術に重きを置く神學者は主として宗教道德的にコレを解釋するのである。詩的や宗教的にコレを解釋すると一見學理に矛盾するが如く見える奇蹟譚も案外容易に解釋せられるのである。最も醫療奇蹟の如きは大部分文字的に解釋が出来る、即ち一種の精神治療と觀れば善いのである。

第五章 基督教の倫理

基督は保羅パウロの如く思辨の人でなく、又約翰ヨハネの如く神秘的の人格でなくて、意の人情の人で、言はゞ直情徑行の人物であつたので、其宗教倫理の思想には別に系統なるものゝ存在を認めぬのである。故に基督教倫理學なるものは、基督の言行中より斷片的の思想を集めて便宜上系統的に排列したるものに過ぎぬのである。

(一) 個人的倫理

(I) 動機と行爲

新約書中に雅古ヤコブ書と云ふのがある、コノ書の著者は行爲を以つて倫理の骨髓とし、保羅は敢て全く行爲を無視して居ると居ふのではないが、信仰(faith)を以て道德の神髓と看做して居る。基督もドチラかと云ふと、動機本位論者であつて、誠實フルネスを以つて道德的行爲の生命なることを説いて居る。故に基督教の立場から言へば、表面上如何に立派なる行爲でも、若し正善なる動機に出でずして、私利、私慾、偽善、術氣の醜動機に出でたる場合は、其行爲には何等道德的の價値あらざるのみならず、反つて一種の罪惡となるのである。基督の宗敵パリサイ宗徒は名分、文字に拘泥し、所謂律法モーセの一點一畫をも忽にせないと云ふ様な極て几帳面なる修道者であつて、彼等は律法慣例を嚴行するを以つて其任となし、且つコレを無上の誇りとして居つたのである。然るに基督は反つて彼等を目して偽善者と嘲り「蠅の裔よ」と罵つて居る。コレはパリサイ宗徒が文字形式の末事にのみ拘泥して倫理の大本たる誠心誠意と云ふとを閑却して居つたからである。要するに基督教は動機善ならざれば如何なる行爲も道德的たる能はずと云ふ意見である。

(II) 清淨、操守

基督教綱要

人間は「神殿」に擬せられて居るので、身心を清淨にし、操守を嚴にすべきことは勿論である。故に饜餮、醉酒、奸淫、好色、争鬪、嫉妬、妄想等は「神の子」たる尊貴なる人の品格を辱しむるものとしてコレを禁ずるのである。人間は「神子」である、而して神子の本質を發揮して眞生命に入らんが爲めには克己、自制、耐忍、々辱を以てせねばならぬ、コレが爲めには常に功名利達、名譽、富貴のみならず、場合によりては父母兄弟、否な自己の生命をも抛つの覺悟を要するのである。十字架は基督教に於ては屢々自己抛却の表號に使用せられて居る。基督の所謂「十字架を任せて我に従へ」と云ふ言葉は、人が神子の天稟を發揮し完成するには甚大の苦闘を要するを暗示したものである。基督教の清淨、操守に關する意見は、「女を見て色情を起す者は心すてに奸淫せるなり」と云ふ言葉に依りても分る通り、嘗だに言行上の清淨を教ふるのみならず、思惟の上にもコレを要求するのである。

(二) 社會的倫理

(I) 博愛

保羅は「信仰」と「希望」と「愛」とは人事の最も大なるものとなし、其中愛は最も大なるものと言つて居るが、新約書中には神の本體を以て愛なりと説いて居る所もある位で、愛は基督教に於て極めて重視せらるゝ精神的要素である。耶蘇は教師の言に答へ、人對神、人對人の宗教倫理的關係を愛の一字を以つて説明し、「爾心を盡し、精神を盡し、力を盡し、意を盡して主なる爾の神を愛すべし、亦己の如く隣を愛すべし」と説いて居るが、コレは基督教の骨子として斯教徒の金科玉條として嘆頌置かざる所の文句である。人類は凡て神の子供である、神の小供である以上は人類相互の關係は同胞兄弟の關係である、さすれば人間は其父なる神を愛すると共に、また其兄弟を愛せねばならぬと云ふことになる。而してこの精神が有らゆる救濟施與、慈善矯風の事業となつて現はれて居ると云はれてある。故に博愛の見地から觀る時には基督教は四民平等、人類同胞、平和非戰の主義であらねばならぬ。最も今日に於ける基督教國の現狀に照らして考ふる時は、この主義は遼遠なる一個の理想であつて斷じて現實の力であるとは云へぬけれども、西洋各國に於ける平和運動や、仲裁條約の提議の如き、この理想の實現の曙光と認むるのは必

しも失當ではあるまいと思ふ。

五〇

(II) 國家、社會、家族

基督教は本來人の道を教へたる宗旨で、ドチラカと云ふと個人主義の方に近い、従つて直接に國民道徳や社會道徳を説いて居らぬ。さりとして基督教を直ちに非國家的であるとか、家族制度の破壊者であるなどと説くのは、強いて基督教を國家主義、忠君愛國主義なりと附會する臆病卑劣なる宗教家と共に誤謬に陥りたる者と云はねばならぬのである。基督教には特に國家、社會、家族に關する系統的の倫理觀なるものは無いが、是等の團體生活に關する責任義務の大綱は極めて含蓄的の主義として説示されてある。例へば同情を以つて相愛し、相敬すると云ふ思想には、獨り廣義の世界人類のみに限らず、小にしては一つの社會に於ける共同扶掖、相濟互導の義を教へたるものと觀るとができる。基督の所謂「凡て人に爲られんことを欲ことは爾また人にも其如ごとく爲よ」と云ふが如きは、社會に於ける人間相互の義務を教へたるものと觀られる。また比喩的に社會に於ける各自の任務分業を説き、例へ其位置職業の上に貴賤の別あるに拘らず、各々其分に甘んじ、且

つコレを重んずべきを教へたるが如き、共に一種の社會的倫理の説と認むべきものである。國家も一つの社會である以上は、直接に國家道徳は説いてなくとも、其主義は國家の上にも應用せられ得るのである。基督教に明確に國民道徳を説いてないのは一つの缺點であると同時にまた一大長所である。何となれば若し基督教が米國の國體に合ふ様な國家道徳を教へたならば、日本や、英國や獨逸の國體には斷じて適合せぬ。さりとして日本の國體に適合する様な國家道徳を説いてあつたならば、恐らく日本以外の國には何れの國にも適せないことになるであらう。故に予は基督の早逝と、基督がたゞ主義のみを遺して固定したる詳説を遺さなかつたのは基督教を世界的宗教として何れの國民國情にも同化するを得る所の宗旨たらしめたる一大秘訣であると信じて居る。其外家族に關する倫理は、基督教は夫婦の關係を重んじ、一夫一婦を以つて其本義となして居る。基督教の家族觀は先づ夫婦本位であると觀るべきである、基督教を奉ずる西洋の家族が夫婦本位であるとはコレが適證である。基督教には別に忠を説かず、孝を論ぜずと雖も、敢て不忠不孝の主義であると云ふとは出来ぬ。先づ公平に言ふならば基督教の

倫理は主義の倫理であつて、其細目は時代と國土の相異に依りて如何にも應用することが出来る様に出來て居るのである。

第六章 基督教の儀式

基督教會には色々の儀式があるが、各宗各派に共通なる大典にして、宗教的意義を有する主なる儀文は洗禮と聖餐式である。故にコノ二大典禮に關して少しく述べて見たいと思ふのである。

(一) 洗禮

洗禮は洗ひ清めるの謂ひであるが、歴史的の意義から云ふと、古き人が死して新たらしき人が生まるゝの意を寓する表號的の儀式である。歴史的起原から云ふと、今日一般の基督教會が行ふて居る所謂洗禮よりも、浸禮バプティスマの方が正しい。現に基督教會中にはコノ史的舊慣を墨守して依然浸禮主義を實行して居るものもある。例へば浸禮教會バプティストの如き其一つである。洗禮と浸禮の問題に就ては古來基督教會

には入ヶ釜敷き爭議があつたが、コレは洗禮を形式以上に重んじ、單に一個の表號儀式と看做さず、洗禮の水其物、儀式其物に一種の偉力、實質があると認めたからの事、コレを一つの儀式と考ふれば、其洗禮たると浸禮たるとは其實効の上に毫も差等ある筈はない。惟ふに洗禮の儀典は遠くイスラエル民族の清淨(Kadosh)の觀念に淵源して居る。即ちエホバ神は聖なる、義なる神なるが故に、コレを拜するに當つては手を洗ひ、身を清め、衣を更める等の習慣があつたが、コレが實に洗禮の原形と認むべきものである。かの舊約書の利未記レウイと云ふ文書には十一種の汚漬が列擧してあつて、コレを清むるには「水の清め」の缺ぐべからざるとが記してある。さすれば洗禮は割禮と共に基督以前から猶太人の間に行はれて居つたことが明かである。然るに基督の時代にかの洗禮バプティスマの約翰ヨハネが「悔改めのバプテスマ」を施したが、基督もまた彼の弟子となりてヨルダン河で彼に洗禮を受けたのである。洗禮の形式は約翰ヨハネの發明でなく、彼は猶太の舊慣を模倣して、コレに悔改メタノイアと云ふ宗教道德的の新意義を附加へた迄である。要するに洗禮は爾來基督教會の通式となりて、舊罪を悔改めて新生命に入るの表號として普く用ひらるゝ様になつたので

ある。

(二) 聖餐式

古來猶太人間には、サマライイ 踰越祭と云ふ一種の宗教的祭典があつて、基督も猶太人の一人としてコノ祭典を守つて居つたのである。基督は或時十二弟子と共に卓を圍んで踰越の晚餐を共にするに當り、其死期の近づけるを察知したる彼は、其機を利用して彼等に永別の意を諷して、「パンを取り、祝して之をさき、弟子に與へて曰く、取りて食らへ、これは我身なり」とまた「杯を取て謝し、爾等みな此杯より飲め、これ新約の我血にして罪を赦さんとて衆の人の爲めに流す所のもの也」と言つたとある。コレが基督教會の晚餐式(また聖餐式、聖餐式とも云ふ)の起原と云ふことになつて居る。即ちコノ式にパンを用ひ、赤酒を用ふるのは、基督が罪なき神の獨子でありながら、世俗の罪の爲めに其肉を裂き、血を流して、世の罪惡を償ふたる大慈悲大功德を永へに記念せんが爲めにの表號としてある。

パンと赤酒に就いては随分込み入つた議論があつて、一度び聖僧がパンを祝し、

赤酒を祝すると、パンは實際基督の肉と化し、赤酒は血に變ずると云ふ信仰も一時は行はれた。彼の加特力教會は正にコノ主張信仰である。加特力の向を張りて新教を樹てたるルーテルでさへ意氣は極めて新鮮であつたが、信仰は至つて頑迷で、殆んどコレに近い信念を抱いて居つたのである。最も今日では新教中にはルーテル一派の信じたるが如く、式用のパンと葡萄酒に客觀的に神秘的偉力の具はつて居ることを信する様な教派は恐らく無い。而して今日では一種の莊重なる表號的儀式として定期又は臨時に行はれることになつて居る。

第七章 日本基督教の概況

日本に基督教の渡來したのは、天文十八年(西曆一千五百四十九年)であるが、此時我國に來たのは加特力教の一派ジエズイット派であつた。當時の基督教宣教師は其信念強固且つ熱烈で、加ふるに布教の巧妙を以つてしたので、渡來後僅かに三十年にして意外なる成績を挙げたのである。加特力教の傳道政策は先づ權門有司を自家藥籠中の者として一舉にして國民を改宗せしめやうと云ふ方針であつ

たらしい、故に彼等は藩の中でも特に其雄なるものを撰んで、熱心に耶教の播種を試み、或は將軍に謁見してこれを説服せんと謀かつたのである。彼の信長の如きは其動機は縦し耶教利用の政略にあつたとするも、斯教の布教に對しては多大なる援助を與へたので、時の切支丹は如此貴族的地盤アキシツクノチハタンによりて一躍して日本國民の精神界を支配するの大勢力たるに至らんとするの形勢を示すに至つた。秀吉、家康は耶教の跋扈は他日累を國家に及ぼすに至る無きやを憂へたと見へ、有らんに限りの方略を講じて斯教の撲滅を企てた爲めに、兎も角一時隆盛を極めたる耶教も表面上鳴りを鎮むるに至つたのである。辛辣なる迫害の爲めに一掃せられたる加特力教は、其後二百年を隔て、安政年間から明治初年にかけて新教諸派の傳來と共に再び布教を始むるに至つた。明治六年には所謂「制札」の撤回により耶教の布教が公許せられたと云ふものゝ何を云つて鎖國攘夷熱の熾んなる時代であつたから、斯教の傳道は危険且つ甚だ困難であつたのである。

今日てこそ基督教は基督教で通つて居るが、明治初年には或はこれを「イエス教」と呼び或は耶穌教と稱し、而して今日でも地方に於ては因襲の久しき依然と

してソ一云ふ傾向があるが「耶穌」と云ふ言葉は輕蔑、侮辱の代名詞になつて居つたのである。故に明治初年の傳道者は實際生命を賭して布教の難事に當つたのである。最も時代が時代であつたから、今日の基督教徒よりもより多くの迷言を有して居つたにせよ、其至誠と熱情に向つては敬意を表せざる譯には行かぬ。新教の傳道は安政六年に始まつたが、明治四五年頃迄は、ほんの準備の時代で、實際斯教の播種に取掛つたのは明治五六年の頃からである。明治十六七年頃歐化主義が盛んになつた爲め基督教は布教の上に鮮からぬ利益を得て、夫から國會開設期に至る頃迄が實に日本に於ける基督教全盛の時代であつたのである。然かして二十四五年頃からまたソロ／＼下り坂になつて、日清戦争前後は衰微の極點に達し、其後或は榮へ或は衰へ、以つて今日の如き不振の状態を來たし、明治廿年前後の新教全盛の時代は織田信長時代のジエズイット教の盛時と共に過去の夢と成りつたのである。そこで最近の内務省の統計に依ると、現今日本に於ける基督教は其宗派二十三、外國宣教師七百十七名、内國傳道者一千四百二十五名、信徒總數十五萬五千六百八十名となつて居るが、其數字が果して數學的に正鵠を得て居るや否

第 參 編

神道綱要

立足栗園著

やは疑問に屬する。またこの數字は如何なる程度迄日本に於ける該教の實力を表はすものなるやも疑問であつて研究を要する問題である。しかし何れにしても今日基督教が殆んど救ふ可からざる衰頹の深淵に陥りつゝあることは動かす可からざる事實である。然らば何故に日本の基督教は其形勢日に益々非なるやにつきては色々の理由もあり、予はこれに關して意見を有するも、爰にこれを述ぶるの餘裕を有せぬのである。これは他日別問題として更めて論じたいと思ふ。

附言本文はもと五十頁に收むるの約束にして既に豫約の頁數を超過すると八頁予は本章下に於て進んで現日本の新舊基督教各派の狀況に關して概述する所あるべき筈なりしも、紙面の都合上、日本基督教概況は其文字の表はすが如く單に概括的敘述に止め其細目に入るを得ず。

はしがき

本編は神道綱要との題名を付してあるけれども、實は神道の經過を一瞥して、其の發生の由來と發達の狀態とを、極めて公平無私に、又極めて平易通俗に叙述したものに過ぎない、されば無論初學者に便せん爲て、大方識者の覽に入るべきものではない。

神道といふと、今日は一の宗教の形をして居

る、それによつて我が國民の一部は救はれて
居る、金光教でも天理教でも、今日は立派な宗
教である、それを一概に迷信とケナすのは、宗
教元來の性質を知らぬ者と思ふて居る、若し
其の教義で満足せずば、それこそ信教自由の
世の中であるから、耶蘇なりと回教なりと勝
手に信ずるがよい。

然し神の道と廣くいふ以上は、此等既成宗教

のみを指すのではない、我國開拓の祖神を始
め奉り、代々我國の開化に功績を遺された神
祇を尊崇し拜祀すべき道をいふのであるか
ら、何人でも此道の一通りは必ず心得て、日本
國民たる義務を盡さねばならぬとである、其
の敬神の儀式を朝廷にあつては嚴修したま
ふのであるが、それが即ち一般國民の模範に
もなつて居るのである。

此の敬神の道は我國固有のものであるけれども、我が神の道の有難い事、忝いことを篤と了解せしめ合點せしめる爲に、夙に支那の教學は採用せられ、又佛の教も用ひられて、而して神の道は益々明かになり、倍々擴充せられたものである、其の宏量なる手本は、聖徳太子によつて開かれ、即ち儒佛二教を以て神道の羽翼として神の道を闡明せられたものである。

る。

こゝが喧しい所で、即ち公平無私といふことの六かしい所である、或人の如きは、聖徳太子を國賊のやうに見下すから、神道を説くといふ以上、寸毫も他の分子を入れてはいけないうやうに思ふ、それも一見識であらうが、それでは惟神かんむらの大本だけは分つても、神道として發達した内容といふものが分らぬ、譬へていへ

は骨だけ知つて肉を知らぬやうなものである。特に既成宗教としての神道などは、此の歴史を知らねば何だか雲を攫むやうに分つたものではない、それだから、一概に此等神道を迷信視する人もあるといふものである。こゝが予をして先づ公平無私に且つ平易通俗に筆を執らしめた所以である。

若夫れ神道としての單なる研究や、種々の見解や臆測は、予といへども多少は懐抱して居るけれども、本編などには、無論言ふべき性質のものでないから、一切省略に従ふて置いたのである、それ等は他日纏めて私見を公にしたいと思ふて居る。

足立栗園識す

目次

緒言……………一

第一 神道の名義……………二

第二 原始思想と信仰……………三

第三 儒教より受けたる影響……………六

第四 佛教より受けたる影響……………九

第五 三教一致……………一一

第六 兩部神道の隆盛……………一四

第七 唯一神道の興起……………一九

第八 垂加神道の唱道……………二四

第九 神道復古の大勢……………三二

第十 世俗神道の勃興……………四〇

第十一 明治維新と神道の獨立……………四九

第十二	神宮及神社制度の確定	五五
第十三	神道各派の現状	五八
第十四	神道各派の教義と概評	六〇
(一)	神道派の教義	六一
(二)	修成派の教義	六二
(三)	大社教の教義	六三
(四)	實行教の教義	六五
(五)	神習教の教義	六五
(六)	御嶽教の教義	六七
(七)	禊教の教義	六八
(八)	神理教の教義	六九
(九)	天理教の教義	七〇
(十)	金光教の教義	七二

神道綱要

足立 栗園 著

緒言

神道といふ語ほど、我が邦人に取て普遍的のものはないが、また此の語ほど意義の徹底して居ないものは少い。一般には敬神の道といふことゝ宗教的に説かれたる神の道といふことすら混同して、或者は日本人は必ず神道各派の信者でなければならぬやうにいへば、或者は之に對してかゝる迷信的宗教は信ずるに足らぬなどいつて、敬神の事をも疎んじて居る、誠に了簡違ひの甚だしきもので、由來我が邦人には神明を敬ふといふ觀念は必ず存在して居るに相違ないから、如何なる宗教を信ずるにしても、敬神の事は疎んずべからざる筈である、其の道を相當に盡すのが祖先に對する禮でもあり、又國民として當然盡すべき義務である、然し此の敬神の道を盡すからとて、必ずしも神道各派中の一人とならぬ

ばならぬとはない、それは人々の自由である。然らば神道とは一體どういふものであるか、其の意味で神道の歴史を語り、且つ現状に及んだのが本篇である。

第一 神道の名義

神道といふ熟語は、固より支那にもあつて、漢學が傳はつてから我國にも適用せられたものであるが、漢學傳來以前我が國民は、太古以來の神の道といふものを信じ守つて居つたものである。神といふのは尊敬を表する語で、長上者といふほどの意味であるから、國初當時に神々の行ひ玉ふた其の道を、世に立つ者の行ふべき道として、國民は遵奉して居つたものである。無論朝廷に於ては、嚴かに其の神を祭るの道を承け繼ぎて、之を修め守り玉ふた。さればこそ孝徳天皇三年の詔に

惟神、我子應治、故寄是以與天地初君臨也

とあつて、其の註に「惟神とは神の道に隨ふて亦自ら神の道あるをいふ也」と載せられてあるのであらう。結局神道とは神の行ひたまふた道である。

次に道とは何ぞと尋ぬるに、ミチてふ言葉は本居宣長の考證の如くに「御路」とい

ふことに相違なからう。即ち道とは山路、野路などの路に御てふ言を添へて御路といふと直毘靈に載せて居るのが、それであつて、所謂尊敬せる神の歩み行ひたまふて、自然後人の模範となつたものが、即ち道といふことであらう。

かく推考して見ると、神道といふ名義は、夙に我國に存在したもので、之を後世支那や印度の道德宗教が傳はるにつれて、種々に解釋を試むるに至つたものである。即ち眞道といつたり、心道と書いたり、いろ／＼に筆を弄して居るが、要するに神道は之を單純に神の示させたまふた御振舞といつても差支ないのである。さればかの藤浪時繩の神道篇に「神道人道本是一致にして二にあらず、神代の人道、人世の神道也。唯だ是れ神代に諸神の行ひ給ふ人道を、今に傳ふる故に、吾朝にては人道と言はずして之を神道といふ也」と載せて居るのは、最も公平にして且つ分りよい解釋といつてよい。即ち神道とは神代の人道であるから、神の開かせたまふた我が國民は、須らく其の道を修め守るべきことである。

第二 原始思想と信仰

さて我が國民の原始思想はどんなものであつたらうか、太古の事未だ遠かに斷言することは出来ぬのであるが予の推考する所に依れば、神とは賢能長上者で之を上に戴くといふのであるから、國民の側より觀れば、此の尊長といふとは即ち偉人崇拜である。且や又此の偉人を崇拜し、長く其の偉業を追懷して、之を繼承せんとするのであるから、其の點より觀れば、子孫としての祖先崇拜である。我が國民は此の如く、寧ろ現世的思想を有した人民であつた。

然し未來といふ觀念に就いて絶無であつたかといふに、決してさうではなかつた、即ち偉人の神去りたまふた後即ち死後には、其の偉靈は尙ほ此の世に存して人間界と交通するものと信じて居つた、そこで顯界と幽界とを別ち、靈魂なるものゝ存在を信じたのである。かの伊弉諾尊と伊弉册尊とが後に分離したまふて黄泉平坂で相争ひたまふた御事蹟の如き、或は大國主神が武甕槌經津主の兩神に盟ふて、予は爾來幽界の事を督せんと言明せられた如きも、所謂顯幽兩界に對する思想を有した證據である。

又靈魂説としては、和魂荒魂の區別があつて、例へば大己貴神の和魂は大物主神

即ち大和大三輪神であり、同じく荒魂は大國魂神即ち大倭神であるといひ、又降て人代となつても神功皇后の三韓征伐に際し、其の壽命を守りしは和魂で即ち之を船の鎮とし、先鋒となりしは荒魂で即ち之を船の導としたといふ如きは、兩者の區別を見るべき徵證である。この和魂荒魂の別は後世に所謂文と武との別とも見るべきものである。

又かの我が國土の經營を以て任とし玉ひたる大己貴神が、少彥名神と力を戮せ、後ち少彥名神が常世國へ歸りたまふたから、大に落膽せられた時、海上に光るものあつて、予は汝の幸魂奇魂なりと稱せられたのが、即ち大物主神であつて、此の神の力を得て近畿の開拓を成就したまひし事蹟の如きは、これ亦明かに顯幽を交通する靈魂の存在を信じて居つたものなることを證據立つるのである。

其の他我が國初の幽冥に對する觀念としては、神を祭りて齋宮を立て、依て神教を請ひ、神託を受けたといふ如き、確かに現世の外なる或る幽界を信じたものである。且や國民一般の祭祀の中に、所謂祈禱といふ如き現世祈願の方法があつて、方術といひ、利請といひ、ノロヒ、カジリ、マジナヒ、ウケヒ(祈厭術、ヒレなど)といふ種々な

る祈禱法が行はれたといふのは、これ亦一種靈界の威力あるを信じたもので、未だこれを未來觀念と稱することは出來ぬけれども、確かに現世の外の或る界を信じ、而もそれが顯幽を通ずと信じたものと認めることが出来る。

六

第三 儒教より受けたる影響

我が國民の原始思想なる者は、極めて單純なもので、且つ現世的に實際的であつたが、漢學の傳來と共に、漸次大陸的思想の感化を受け、敬神思想の上にも變移を來すに至つた。而して儒教の弘まるにつれて、國民の頭腦は自然推理的となり、道義の事も何時しか之を倫理的に究むるに至つた。之が我が國民思想の第一變化である。蓋し我が國民は國初以來、神祇其者の威力を信じ、其の威力は顯幽兩界を通じて直接に人界を支配するものと認めて居つた。故に偉人崇拜、祖先崇拜の念慮の下に、常に神を祀り、之に親しみ仕へ、敬ひ事へて、禍を攘ひ、福を享けんと、希ふた。これが抑々神教を仰ぎ神託を待つた所以である。然るに支那思想は之に異なり、固より大陸的であるから、自然の力を過信して、威靈ある者とし、一般に之を神と見做して、

畏れて祀つたのである。かの鬼神を敬して之を遠ざくといつた語の如きも、其の一端を語るものである。即ち天帝、日月、星辰等を始め、社稷、五祀、五嶽、山林、川澤、先王、山陵、川谷、丘陵の能く雲を出し、風雨を爲し、怪物を現はすを以て皆神といひ、之を畏れ祀つたものである。此の鬼神に對する觀念が、漢學の傳來と共に我が國民間に弘まり注いだから、自然神といふ解釋に就いても、之を廣義に見做し、世代を経ると共に、山林川澤等の信仰をも高むるに至つた。而して以前の神に、親みて奉仕するといふ觀念は、漸次に畏れ敬ふて之を遠ざくといふ風になつた。即ち神は人間に直接なるものでなくして、廣く宇宙萬物に交渉するものであるから、人としては寧ろ間接なるものであると認むるに至つた。此の影響は我が邦人をして悉く然らしめたといふのではないけれども、歲月を閱すると同時に、漸次其の色彩を帯はしむるに至つたのである。次に神人の關係を説くに至つても、儒教の影響を受けて、漸次推理的となつたことは否定することは出來ない。蓋し支那の神人關係としては、かの孔子家語に、人生氣あり、魂あり、氣は神の盛なるもの也、人死して土に歸す、之を鬼といふ、魂氣は天に歸す、之を神といふ、鬼と神とを合せて之を享るは教の至り也と載

せてある如くに、神の解釋も我が邦人とは異なる推理的であつたから、此の影響を受けたる我が國民は、大に其の思想を緻密ならしめたのである。

特に道義の點に至ては、以前は神の道即ち人の道なりとして、正直、信義等の倫常を守つたものであつたが、それが儒教の感化影響を受けて倫理的となり、神と人との關係の變化と共に、人と人との關係上にも自然變遷を來すに及んだ。かの五倫五常の倫理説が我が國民間に傳はり思想上に進歩を與へたから、唯さへ世事複雑となれる社會に於て、此の秩序あり細密なる約束交際の道が採用し實行せらるゝに至つたことは固より疑のなき所である。

要するに支那の文化に接觸して、其の大陸的思想を受け取り、又儒教の倫理説を耳にしたる我が國民は、以前の單純なる偉人崇拜、祖先崇拜の觀念をして更に山岳崇拜、萬物崇拜等の觀念を交へしめ、其の神に對する尊敬、奉仕的な態度は、畏怖、敬遠的態度に傾くに至り、從て其の神人關係に至ても解釋を廣汎ならしめ、又靈魂説にも一步を進め、而して社會的交際の人々相互の關係に至ては、全く高尚細密なる倫理説の下に行動するに至つたものである。

第四 佛教より受けたる影響

一たび儒教の影響を受けて、敬神思想上に變移を來したる我が國民は、更に佛教の傳來によりて、二たび全思想上に大なる變移を來すに及んだ。短言すれば、現世的思想が未來的觀念を帶ふるに至り、所謂現世の神にのみ縋つて居つた者が、更に未來の佛に頼るに至つたのである。これは何故といふに、單に現世の禍福をのみ念として居つた者が、進んで未來の因果を信ずるに至つたからである。言ひ換ふれば、現實的より理想的に進み、道德的より宗教的に進み入つたものと見做すべきである。

蓋し我が國民の神に對する觀念は、儒教の傳來によりて廣汎となり、敬遠主義となつたが、それが佛教の傳來によりて、復ひ直接的となり、依賴的となつたのは、殆ど敬神思想の再變によりて、復舊的態度となつたものといつてよい。そこで一たび審神と斥けたる佛と、我國古來の神とは、一致して離るべからざるものではないかと推考するに至つた。これが幾くもなく、三教一致説の胚胎より、進んで山王一實

或は兩部習合等の神佛渾融説が社會を風靡するに至つた所以である、思ふに神道にては夙に顯幽兩界の區別を立て、靈魂の存在をも許して居つたのであるから、佛教に現世と未來との區別を立つると相距ることの遠きものではなかつた、然し神道の神は現世に於て直接人間を支配するのみであつたから、人々は之に祈願して禍を攘ひ福を求めたのであるが、佛教の佛に至ては、未來に在て人間に賞罰を與へるといふのであるから、從來の神とは少しく進んだものでもあり、又其の趣を異にして居るものである。所が社會の複雑となるに従ひ、現世の禍福のみにては、人々満足する能はず、未來の賞罰を論ずるによりて、始めて心を安んずる状態となつたから、神儒の道德説に加ふるに佛教の宗教的なるを歡ぶに至つたのは、自然の順序である。此に於て始めて理想的に神佛を信仰すると云ふ顯象を生じたのである。即ち三世因果の理法を信じて篤く佛に依頼し、歸依して、未來を助からんとする國民を生じたのは、理の當さに觀易き所である。

第五 三教一致

我が敬神的念慮を有する國民が、儒教の感化を受けて、年次思想上に變化を來したことは無論であるが、之が爲に偉人崇拜、祖先崇拜の意義を沒却し遺忘するに至らず、反て倫理觀念の明確を來せる所より、愈々神の道を宣揚するに至つた。かくて後に又もや佛教の傳來に接して因果應報の理を知り、宗教趣味を味ふに至つたから、此の傾向を看取して、益々我が國民の敬神思想を善導せんとする識者及び有志者を生じたのは、固より其所である、これが即ち三教一致説の由來である。

蓋し我が國民が、他の宗教道德を排斥せず、又他邦歸化の人を排斥せぬといふ宏量なる精神は、夙に我が皇護の宏大なるに包擁せられて漸次養成せられたる美風である。さればこそ一時の騷擾は免かれぬとしても、終にはよく己が國粹を維持しつゝ、自己發達の羽翼たらしむることを成し遂げ得るのである、かの推古天皇の十五年の勅を見よ、

朕之を聞く、曩には我が皇祖天皇等の世を宰するや、天に踞り、地に踏し、敦く神祇

を禮し、周く山川を祠り、幽に乾坤を通ず、是を以て陰陽開和し、造化共に調ふ、今朕の世に當り、神祇を祭祀する、豈に怠りあらんや、故に群臣爲に心を竭し、宜しく神祇を拜すべし。

この勅語たる、よく／＼内容を調査すれば、我が敬神の念慮に加ふるに、支那的思想を以てし、何時しか廣義に於て神祇を祭祀するの必要を認めたと見做すことが出来る、之をか神武天皇が、我が皇祖の靈天より降臨し、朕の躬を光助すと仰せられた單純なる敬神思想と大に趣を異にし、寧ろ年所を経て歩を進めたるを認むべきであるが、其の進歩の點こそ、實に支那思想の感化を受けて大陸的色彩を帯び來つたものである。

所て以上の詔勅なる者は、全く當時の聰明なる攝政厩戸皇子の配慮に出たものとすれば、皇子に敬神の念慮厚くして、而も國體を重んじ、一に我國の進歩を促がすに心力を注がれたものなることを了知せらるゝのである、其の結果として遂に社會の表面に成文として現はれたのが、即ちかの有名なる十七憲法である、同憲法の第二條に曰く、

篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸、萬國の極宗たり、何れの世何れの人か、是法に嚮はざらん、人尤惡なる鮮し、能く教へは乃ち化す、其れ三寶に歸せずんば、何を以て枉れるを直さん。

此の語は實に世界の廣きも佛教より最上なる教法なしと見做し、之を以て我が國民を教化する治具として採用せし精神を看取することが出来るのである、既にかく儒教を採り佛法を用ひ、之を神道の羽翼たらしめんとせし所に、三教一致の歸趣を得んと勉めた趣を知了することが出来る。

三教一致といふ語は、或は厩戸皇子(聖德太子)に依て唱道せられしものではなからう、然し三教を合一して我が社會の進歩を促したいといふ精神は、確に皇子の胸中に往來して居つたものに相違ない、されば後世種々に皇子の心事を忖度して、三教一致の根源が厩戸皇子に依て開かれたものなることを言説するに至つたのである。かの神祇正源集なる書に、聖德太子選述と傳ふる三光妙經を引用して、枝葉花實説といふのを載せ、神は萬法の根、祇は枝葉、佛は花實なりとし、更に儒佛二教は神道の末葉なり、枝葉、其の本源を顯はし、花實根に歸る、然れば異曲同工なる者か

一四
など、巧妙なる文字を示し、又憲法傳といふ書には、政を正すの本は學問に在り、學問の本は儒釋神なり、是れ此三法は正なり、眞なり、玄なりと記し、而も三教合一の事の容易に行はれざりし消息としては、三教論といへる書中に、政は學にあらざれば、至らず、學の本は儒釋神なり、然も一を好む者は、各其二を惡み、其存を嫉んで、其亡を欲す、我が知る所を理と爲し、知らざるを非となす、故に政は宜しく三を通して、一を好まざるべしと記して居る、兎に角此の如くして三教一致は漸次に行はれ、而して神道の思想は年と共に變移するに至つたのである。

第六 兩部神道の隆盛

三教一致の説が社會に現はれてより、識者は之が實際的調和に就いて心力を勞するに至つたが、三教中の儒教は倫理道德に重きを於けるより、神佛何れに調和するにも支障少くして、徒に其の教旨を固執し、他と論争する者は少かつた、唯だ神佛兩教を調和することに至つては、如何にして其の根本思想を渾融すべきかといふことに就て、識者及び有志は全力を注ぐに至つたのである。

神佛習合の第一着として手を染められたのが、即ちかの奈良大佛を我國の天照大神と同體なりと言説したことである、言ふ心は、印度の毘盧遮那とは、日輪を意味し、我國の日輪は天照大神を指すのであるから、大神即大佛であるといふ習合を是認せよといふのである、而して其の習合の根據を確かならしめる爲には、此に本地垂迹なる一説を拈出し來つたのである。

本地垂迹とは、佛は本地であつて神は佛の垂迹なり、唯だ出現地を異にし名を異にして居るのであるが、神も佛も元來は同體であるといふことである。此の本地垂迹説は支那にも行はれて釋迦、伽葉、阿難を老子、孔子、顔回に習合し、又悲華經とか荒神經とかいふ經文に、佛が大明神と現したとか、法身は大日て垂迹は不動であるなどいふことが載せてあるに至つた、これは後世の付會であらう。我國に於ては、此の本地垂迹といふ如き考が、奈良大佛建立後、一層社會の一部に行はるゝに至つて、八幡神の如きは何時しか大菩薩となりたまひ、大三輪神の如きは權現となりたまふた、これ皆神佛習合の一手段と見てよいのである。

さて此の神佛接近の企圖が、世の識者によつて着々實行せられ、奈良朝にては、行

基、良、辨等の高僧によつて萬事奏効し、世人漸く之を怪まざるに至り、神と佛とは離るべからざるものなりとまで勅せらるゝに至つた。稱徳天皇の神護元年の勅に曰く、

神等を佛を離れて觸れぬものと人々思ふべきも佛の法を護り奉るは諸神等なり、故に以後は、出家人も以前の如く忌まるゝことなく神宮に雜りて神社に仕へ奉るも障りなし

かくて勢を得たる佛教は神道を併合し、伊勢を始め諸國の大社に神宮寺を建て、僧侶は神官と伍して神社に奉仕するに至つた。之は餘りに極端であつたから、一時に止まつたが、而も神佛の習會は爾後續々と企圖せらるゝに至つた。其の最も著しきものは山王一實の神道である。

山王神道とは、我國天台宗の開祖傳教大師最澄の唱導した所である。山王の由來は假空中の三諦これ一實なるに基して、豎の三點に横の一點を加へて山。横の三點に豎の一點を加へて王、豎三豎にあらずこれ一實、横三横にあらずこれ一實といふ意に出て居る、全く謎の如き話であるが、此の三諦一實の佛理に叶へる神が即ち

三輪の神、其の神は欽明天皇の元年に大和國城上郡大三輪神と天降りまし、天智天皇の元年に近江國琵琶湖畔に大比叡大明神と現したまふたのである。此の神は我國々初以來の大地官を治め、玉ふ神であつて、大物主神と稱し、大己貴神の幸魂奇魂と現し玉ひ、終に近畿の經營を全うしたまふた神である。それ故に近畿中國の信仰大方ならず所謂地主の神とも稱へられて居つたのであるが、此の神が佛法に歸依し玉ふて山王權現となり玉ふた即ち日吉大明神一に地主權現とは此の神をいふのであつて、比叡山寺は、かくて平安鎮護の道場として、時の朝廷の覺え目出度、名も延曆寺と賜ふて、天台宗の榮を傳へたものであつた。

然る處天台宗の次に起りたる眞言宗は、萬事彼と對抗的態度を執り、其の主唱者弘法大師空海が時の皇帝嵯峨院の覺え目出たき所なり、此に帝城鎮護の道場なる教王護國寺(東寺)を開き、後に高野に入定したが、此の師卓磊の資を以て、大膽にも神佛併合寧ろ神道を佛教の裡に包擁するの術計を按出した、それが即ち兩部神道であつた。

抑々兩部とは眞言宗にていへば、金剛界、胎藏界の兩界を指すのであるが、之を神

佛兩部と見做して習合を全うした、其の意は天照大神は我國の日神で、眞言宗に所謂、智不二の徳を具ふる大日如來に當るのである、これ毘盧遮那即ち遍照如來である、而して伊勢神宮を眞言の兩部に配すれば外宮の豐受大神が金剛界、内宮の天照大神が胎藏界であつて、我國は阿字の國なるが國に葦原國、大日の本國なるが故に大日本國であるなど、稱し神代の故事を眞言宗の傳説に付會し、かの神代に於て天手力男神が天、岩戸より大神を引出したのは、印度にて龍樹菩薩が鐵塔を開きて大日の秘密を取つたといふと同一事實であるなど、稱へたといふ、如何にも思ひ切つて習合の歩を進めたものである。

所が此の兩部神道が、一世の博學宏才なる弘法大師の力によりて我が社會に勢力を得るととなり、神道は殆ど佛法の中に包まれて仕舞つた傾となつた。かくて後、引續いては天台より分れたる淨土宗の開祖法然上人、源空が諸神本懐といふ説を唱へ、佛陀は神明の本地、神明は佛陀の垂迹であるから、結局垂迹の神明に歸せんと思はゞ、本地の佛陀に歸せよ、これが諸神の本懐であるなどと言説した、これにて、神は全く佛の中に祭り込まれ、専念彌陀に歸依すれば、自然神明を敬ふこととなる。

との信仰を國民に懐かせんとしたものである。

この諸神本懐説に對して、日蓮宗の諸佛本懐説起り、釋尊出世の本懐は法華經なれば、諸佛菩薩並に垂迹の諸神も法華を以て本懐とするなど、言説し、後には立川流といへる神道起り、佛を一代の守り本尊といつて之を産土神に配するに至つた、全く神佛習合の極端に達したものである。此の如く兩部神道の勢力、代を逐ふて盛んとなり、我國神道の本意全く國民間に忘れ去られんとするに至つたから、此の趨勢に反對して慨然蹶起したのが、即ち唯一神道であつた、之は兩部の語に對するの唯一たることは、固より言を待たぬ所である。

第七 唯一神道の興起

神道が儒佛兩教の習合によりて種々に附會せられ、固有の眞義を失はんとするや、慨然起つて神道研究を思ひ立ち、而して公平に批評し、紹介せんと勉むる人士を出した。忌部正通の如き、北畠親房の如きが、即ち其の人である、これは殆ど唯一神道の先驅を爲したものと、いつて可なる傾がある。

忌部正通は南北朝時代の人で、貞治年間に神代口決を著した、自ら其の書に序して曰く、粵に儒教は善に止つて先王の法を教へ以て佛法を制す、佛道は理觀以て戒定慧を立て、儒教を輕んず共に異國の善道なり、神道なる者は我國の正路にして、天命を仰ぎ、明理を貴び、元を元と爲し、除かず、止まらざるなり、寧ろ神書は和語以て源妙を顯はす、事理幽微なりと雖も、禎然として正に基くことは、則ち明けし、是れ明清明理、神國に鎮へなり云々、これにて其の國粹的意見を了知すべきである、されば神の語を解釋して曰く、

神とは嘉牟嘉美なり、略して嘉美といふ、神靈は明鏡の萬物を照すが如く、不捨一法、不受一塵なり。天に在ては神、萬物に在ては靈、人に在ては眞心なり、萬物の靈人の心清明なる時は、則ち神なり云々、

これは神は鑑なりといふ倫理説で、儒釋二道の語を以て神道を道德的に釋せんと試みたものである。此忌部正通に尋いて北畠准公親房は、古來の神道説を正直に叙述せんとて、爲に元元集を著した、其の天地開闢篇中に曰く、

昔は渾沌未だ分れず、唯だ元氣あり、氣あれば便ち通す、一陰一陽なる所以なり、清

陽なる者は上升し、重濁なる者は下降し、天先づ成て地後に定まるに及んで、兩儀の稱此に由て起る、時に天地の間に一の物を生ず、或はいふ葦牙の如しと、或はいふ浮べる膏の如しと、蓋し狀貌言ひ難し、強めて之に字くるものなり、其中に精あり、之を神聖と謂ふ、能く萬物に祖宗とし、兩儀に主掌す、即ち是れ三才を成す所以なり、元を元として、元の始めに入り、本を本として、本の心に任す、心此に在り、かくて本朝造化篇に及んで居るのであるが、其の解釋たるや、全く儒説を承けたものといつてよい。思ふに、これより以上に新説は按出せられなかつたものであらう、要するに正通も親房も、これ等の解説を以て、正しく神の道を釋したるものとし、之を以て神佛習合の僻説に抗らんとしたものであつた。

かゝる趨勢であつたから、此の神道獨立の氣運を看取した神道家の有力者は、遂に起て在來の兩部に對し、始めて唯一神道なるものを唱へたのであつた。其の有力者とは、太古以來龜卜を以て朝廷に仕へた卜部家で、其の人は兼俱である。扱て我國の神道なる者は、世上一般には儒佛に習合せられたけれども、朝廷にあつては依然として獨立の姿を維持し、花山天皇の皇子清仁親王の一子延信王が後一條天

皇の萬壽年間に勅ありて神祇伯に補されてより、我朝廷の神事を總監した、それが即ち白川家である、それ故に神祇の四姓なるものを、此の白川家即ち王氏が率ゐたもので、他の三姓なる中臣、齋部、卜部は皆之が支配下に屬して居つた。然るに中古朝廷の式微と共に、卜部家の吉田氏は自ら神祇伯に補せられたりと稱し、神祇長、上官に任ぜられたりといひ、遂に唯一説を唱ふるに至つた、それといふが、卜部氏は兼延より七代の間侍従として朝廷に仕へ、中興の祖と稱せらるゝ兼直に至り、神祇官領と稱し、神道大意を撰して之を後鳥羽天皇に密奏した程であつたからである、其の言に、夫れ吾國は天地と共に神明顯はれ座す、故に國を神國といひ、道を神道といふ、國とは千界の根本なり、故に日本といふといふ風に、既に純一無雜なる神道意見を有して居つたから、一世の偉人兼俱の代に至り、遂に集大成して唯一説を社會に高めたのであつた。されば唯一神道の唯一なる著書、名法要集中には、唯一の三義を述べて、

唯[○]一[○]法[○]にして二法なし、唯[○]受[○]一[○]流[○]にして二設なし、唯[○]一[○]天[○]上[○]にして證明あり、
など、示し、さて唯一宗源の義を釋して曰く

唯一宗源といふは夫れ一を守るを以て神道の宗とす、故に唯一といふ、二なれば則ち情欲出て心神濁る、一は神道の源なり、民生日用して其始源を知らず、且つ其宗たる源に遇はんことを要す、故に宗源といふ。唯一宗源共に此混一の神徳を持すといへども、唯一とは其元本をいひ、宗源とは二より原に合はんと欲ふ、故に好く分別す、云々

而も之を神代の聞書なりとて、最も神聖なる者とした、蓋し正通親房等によりて神道は自由に解釋せられて、純一の旨を發揮し、終に何時しか元本宗源といふことを唱ふるに至つた、即ち在來神道家の主張する所にては

元[○]とは陰陽不測の元々を明かにし、本[○]とは一念未生の本々を明かにす、頌に曰く
元々元初に入り、本々本心に任す、

宗[○]とは一氣未分の元神を明かにす、故に万法純一の元に歸し、初めて之を宗とす、
源[○]とは和光全塵の神化を明かにす、故に一切利物の本基を開く、之を源といふ、頌に曰く、宗は万法の歸一、源は諸縁の開基、

此の所謂頌が即ち唯一家の稱讚文字であるが、此の如く神道は夙に兩部に對して

獨立の態度を持し、而も其の解釋たるや、全く儒佛の意を取て、之を自家の用に供したものであつた。それが兼俱に至り、全く一派として唱道せられたのである。

蓋し兼俱の時、其子九江といふは南禪寺下神龍院に寓して居つたから、卜部家は佛敎の護摩と神道の火祭とを折衷して神道護摩を創め、特に後土御門天皇の延徳元年には、伊勢兩宮の御神體が唯一の本部なる吉田山へ飛移られたといつて、自家を高め、それが大に社會の賛全を得て、豊太閤の時には、分家なる萩原兼從大に信用せられ、秀吉薨するや、豊國大明神の社司となり、二万石を賜はつた程であつたから、唯一神道は一時大に榮へたものであつた。かくて豊國廟破却の後、兼從は其祿を継はれ、吉田村蟄居の身となつたが、而も唯一神道は依然として其命脈を維いたのである。

第八 垂加神道の唱道

我國の文化は、徳川氏以前は殆ど争亂相踵いたから、王朝式微以後、全く地を拂ふて見るべきものなきに至つた、されば宗教教育の事の如きも全く等閑に附し去ら

れ、世人之を顧みる者すらなかつたが、さしもの戰亂漸く跡を斂め、代は徳川太平の季節に入りてより、當局者稍々此等の點に整理の手を染むるに至り、學者亦競ふて研究的態度を取り、自説を主張するに至つた。それが爲に、林羅山の如き碩儒は講學の餘暇、神佛兩道の發達を史的に攻究し、終に本朝神社考の如き著述を出して、世人を驚かすに至り、引續いて白井宗因の如きも神社啓蒙の著を出して、世に示した。何れも従來の習合神道を論難し、兩部の妄を指摘したものであつた。そこで之を見たる佛敎家の學者にありては、其の兩部習合の決して怪むべきものならざるを辯護し、漸く甲論乙駁の觀を呈するに至つた。之が遂に垂加神道をして其の間に起たしむるに至つた所以である。

これより先き、唯一神道が兩部に對して起つた當時、疾くも伊勢外宮にあつては、儒敎を以て神道を釋したる神儒習合ともいふべき神道説を唱ふるに至つた。此の企圖は外宮が内宮に對立する手段として、夙に研究せられたものであつたが、博學なる出口延佳に至て之を大成するに至つた、されば延佳は其の著陽復記の中に、神代^ノ故事^ト易道^ト似通^ヘる點^{ある}を擧げて曰く

我國の神道に易道は全じと見るこそ忠厚の道ならめ、易道に神道は全じきといふは、如何と思ひ侍る、かく神道、儒道、其旨一なれば、其家によりて修する教のかはる所は、あるまじけれども、異國と我國と制度文學はちがひめあり、それを辨へず古より我國になき深衣を着る儒者など、近頃はありとなん、此事大なる非義なり、異國にも夷狄の服をきるは、重き戒めぞかし

かく國粹的意見を發表して、而も儒意を取て神道を釋し、かの三種の神器を説明して曰く、

三種の神器は智仁勇の三徳を表したると古き傳あるにぞ孔子の道は我國の神道にひとしき道と思はる、或は玉は柔にとり、劍は剛にとり、鏡は正直にとりて、柔剛正直の教に全じと、親房卿の作東家秘傳といふ物などには書かれたり、そも昔より傳ふる所なればなるべし、然ればかの洪範も我が神道にひとしき歟、此玉の柔なる如く溫潤の仁徳を以て天下の御政をきこしめすとぞ、曲妙といへるは、曲は不直なるをいふ、直なる物は、強くものに當る故に曲とはいふ、然れども邪曲ならざれば、妙とはいへるにや、又此鏡の如く分明なる正直の智を以て山川海濱ま

ても看行し玉は、下に遺賢もなく、万民其所を得べきかと、劍は又勇にとりて剛なれば剛にして無慾にとどほる所もなく、而もおのづから威ありて天下を平げ、万民を利益し玉へとぞ、此三つの物一つも缺けては、天下治まり難し、智仁勇の三徳の事は、中庸の書に侍れば、今更くだくしき言をもてしるさず、道知る人に傳授すべき事なり、云々

かく延佳は神儒習合をなしつゝ、遂に中極の道といふを立て、外宮の神體を以て天御中主神とし、大に自家を高めたのであつた、されば、中臣、祓、瑞、穂、抄に記して曰く、抑々中極の道を神道といふ、其由來を尋ねれば、明理本源の神を天御中主と號し奉り、又天常立尊とも申し奉る、此時體用を分つべきにあらずと雖も、天御中主の御號は體にて、天常立尊の御名は用ともいふべし、儒道中庸の二字も自ら此に合ひたるにや、元氣化生の神を國常立尊と號し奉る、天常立、國常立と對したる御號なれども、是亦天御中主全體異名の由、古紀の文分明なり、意味すべき事なり、中ならては、常といふ事なし。吾が神宮に於ても心の御柱といふは、中極の道を以て國を治めたまふ御心の表示なり、上一人より下万民まで、天御中主尊の分身の神

を中心し含し奉りて自性とすれば、心は神明の含りといへり、分つ時は百千万の天御中主にて御坐せば、根本は神と人と差別なしと雖も、汚穢不淨の惡心によりて、神明の舍の御戸を閉ちて、人々心中に坐す天御中主を拜し奉る人稀なり、云々此の如く道徳的に神道を釋しつゝも、尙ほ國粹的に論して曰く

天地の始めは異國本朝とても、相違あるべからず、然れども、我國の神道は、日本國を主とする故に、神書の説日本に限りたる如く書きたるなり、我國の元祖國常立尊を元氣化生の靈に配することなれば、異國と元祖全じ事にあらず、日本紀の私記に、日本の日月と異朝の日月と各別の由記したるは、愚なるやうなれども、日月は異國と相違なきとても、配する神に相違ある故なるべし、然らずんば、則ち私記の説以ての外の僻見なり、日月の全じ事のみを知て、配する神は各別なる事を知らず、故に兩部習合は起りたるなり、深く思ふべし、云々

蓋し考證家の説く所にては、外宮は元來内宮の御膳所ともいふべき御饌津神を祭れるものなるを、内宮の天照大神に對するに天御中主神を以てし、以て兩々相對立するに至つたものであつたといふ。此等の事は茲に細論するを得ないけれど

も要するに外宮の神道説は一種異彩を中世に放つたものである。

此の時に當り、儒者の多くが支那崇拜なるに對して、神道家は此に國粹的念慮を高むべき必要ありとし、爲に唯一神道より出て、一層その氣勢を高めた一人があつた、即ち吉川惟足其人である。惟足は一奇才を以て、當時豊國神廟破却後、吉田村に蟄居せし卜部家の吉田兼從に就いて唯一の旨を究め、之を鎌倉より江戸に傳へて幕府の許可を得、新神道を樹てたが、其の所謂神道とは即ち國粹論に過ぎない、其の論に曰く、此日本國が萬國の根本の國なり、凡そ三國の中に、日本は東方なり、萬洲の中には中央なり、さて東方は春なり、朝なり、春は四季の始めといふのみにあらず、總して萬物の始めたり、茲に天地開闢の始めも、東方より開けしこと理の當然なり、とて我國を高め、而して道を和語にて説明して曰く、道といふ和語は充滿の義にて、此理天地にみちわたりてあるといふ事なり、吾國のみちといふ處に道の字を書いたは、能く其理に叶ひたる者なり、道は須臾も離るべからずと中庸にいへるに、よく似合ふたることぞ、神明の天地と俱に顯はれ生じて、此道を立てられたぞ、道は世界の海道の如し、道の字の注に道は猶ほ路の如きかといへり、異國の義もかやうの

事は替らざるなり、人々ふまへて居る道路のやうに須臾も離るゝことなきものは此道なり云々。此の如く神道を道德的に解釋し、而も國粹的の見地より論歩を進めたから、一時大に世人の賛同を得た。此の惟足と前に出た延佳とに學んだのが山崎闇齋であつて、爾來闇齋は其の奉ずる朱子學を捨て、垂加流なる一神道を唱道するに至つたのである。

垂加神道とは、神道五部書に、神垂以祈禱爲先、冥加以正直爲本とある語中より取り來つたものであつて、一世の碩儒山崎闇齋が靈社を京都上御靈の内に建て自ら垂加翁と稱したものであつた、されば一時其の門下に馳せ參する者頗る多く、此の翁や實に舍人親王即ち藤森神社の神崇道、敬天皇以來の一人である、とまで推稱し、此の流を汲む者全國に充滿するに至つた、即ち垂加翁は其の道統を出雲路、信直に傳へ、信直は之を、玉木正英、竹下重興等に傳へ、兩人より又之を跡部良顯に傳へ、良顯より更に伴部安崇に傳へて、益々其の勢力を隆ならしめたのであつた。

抑々垂加神道の社會を風靡したのは、如何なる點にあるかといふに、全く儒學の尊外的なるに對して國粹的の自尊説を主張した點にあつた、加之當時道德説とし

て社會を教化した程朱學等に對し、此の神道も亦よく道德を以て人心を感化し、殊に固有の大道を宣揚するといふ風に説明したから、國民は之に靡くに至つたものである。即ち以前の兩部神道に對して、堂々一敵國を成し、此の流派よりして更に考證復古の學風を誘ひ出して、神道獨立の氣運を惹起さしめたものであつた。されば垂加神道の道德説は、其の言牽強付會に陥つた所もあるが、また我が國運發展上に取りて、一大効果を遺したものであることを忘れてはならぬ。

垂加神道にては、道德説として土金といふことを拈出した、土とはツママリ、ツマク、イヅクといふ訓であつて、いづくまでもつゞまり、つゞきあるものなりとの意、又金とはカチル、ネルといふ訓で、土の中に兼てかくれあるものとの意である、此の土金説を敷衍して曰く

造化を以ていへば、土地の何處までも續き、山の常磐堅磐に動かず、崩れずあるは、中に金の藏れある故なり、金石は同じ事なり、少しにても金石の土よりあらはるゝ時は、崩れて堅固ならず、金石の中にかくるゝ故、土地もつゞき、山も崩れず、人事を以ていへば、人の一身は皆土にして、金氣をしむるなり、金氣にて身の土も

いむるなり、眞といふは、ム、マ、コトなり、マ、ヒは土の味なり、
 偽といふは、其形の五つに、わるいをいふと也、五つといふはイン土といふとにし
 て、インはつゝしみの古語なり、
 つゝしみを土縮とも訓し、土のしまるは中に、金氣の藏れ、さ、さ、す、故なり、諸事萬物
 共に土金の體にあらざれば立たず、

以上が土金説の要點であるが、此等の言説を以て、巧みに國體、風俗等の點より國民
 道徳を鼓吹したから、當時考證學の盛ならざりし國民は、何れも其の愛國的精神に
 感じて其の信徒となつたのである。要するに此の考證不備なる垂加神道が更に
 考證復古的の神道學者を出し、又一轉して神道を一種の宗教として組織せんとす
 る氣運を造らしめたものであつた。即ち維新前に於ける世俗神道、引續いて維新
 後の神道各派の先驅を爲したものは、此の道徳的なる垂加神道であるといつても
 敢て不可はあるまい。

第九 神道復古の大勢

儒佛兩教の影響を受けて、寧ろ他働的に進歩發達した神道は、一轉して更に自働
 的に己が運命を開拓せんとするに至つた、言ひ換ふれば之は神道獨立の運動とも
 いつて可なりであつて、從來は名は神道といふも、實は儒佛の説明によつて臆氣に
 神の道を窺ひ知るといふに過ぎなかつたから、かくては眞に神道の本義を辨へ知
 ることが出來ぬといふので、茲に古代の真相を究明せんとといふ運動が開始せられ
 たのである。荷田春滿に始まり、賀茂本居、平田等の大家に依て史的研究を遂げら
 れ、遂に考證復古の學風を高めたのが即ちそれであつた。

今此の神道復古の大勢を述ぶるに當つては、勢ひ此の趨勢を誘起した原因を一
 瞥せねばならぬ、蓋し神佛習合といふことは、庶民教化の方便としては、一時の權道
 として看過すべき事情もあり、且つ代々高僧碩徳の苦心も諒とすべきであるが、時
 勢の進歩につれ、科學的知識が高まり、且や歴史事實が世に明かとなると共に、從來
 の古代式、瞞着的なる習合説にては、世人をして首肯し感服せしむることは到底不
 可能であつた。さればこそ近世以前には、伊勢、八幡、春日の三社を三尊佛に配し、三
 社詫宣なる語の下に神佛を習合したものや、或は弘法大師の作と傳ふる、天地麗氣

記或は南光坊天海の作なる「兩部神道口訣」などの習合書が民間に行はれたものであつたが、近世の劈頭、文運開くるや、疾くも林羅山の「本朝神社考」或は白井宗因の「神社啓蒙」等の書が出て、歴史的に神佛習合の妄を辯するに至つた。此に於て佛教家にあつては之を由々しき大事として、爲に「神社考辯疑」「神社啓蒙辯疑」などの著書を公にし、又伊勢祠官龍熙近は「神國決疑編」の書を著して、唯一宗源の旨の深遠なるを論じて折衷説を出すに及び、此に我が教學界は甲論乙駁の状態となつた。そこで此の趨勢の下に、精力をかゝる點に集注する學者を出し、かの聖徳太子の撰と傳ふる「神教經」「宗徳經」等の神書を細密に註釋して、神道の旨を明かにせんと期せる編無爲を出し、又志摩國伊雜宮神主の家に藏したる古記録は、これを聖徳太子の眞本なりとて、全部七十二卷の「舊事大成經」を作成したる潮音禪師を出し、最も大膽に最も眞面目に神道を解釋せんとするに至つた。此の間、又名古屋東照宮祠官吉見幸和の「神道五部書說辯」なる一書出て、「神道五部書」の妄を辯じ、これ行基の撰と稱するも實は外宮の徒の作也、外宮の豊受神を天御中主、國常立に配せん爲に故意に作せしものなり、抔と攻撃して、茲に神儒の習合をも論駁するに至つたのである。我が教學

界は實に多忙多事なるに至り、遂に三教一致は、勢ひ三教分離とならざるを得ない状態となつた。

此の時に當り、かゝる趨勢を看取したる京都稻荷山祠官荷田春滿は、此に考證復古學の起源を開き、夙に釋契沖、北村季吟等によつて研究されたる我が國語の新解釋を參取し、以て考證的に神道を釋し、而して神道の眞義を闡明せんとした。されば嘗て國學校創立の事を論ぜる中に記して曰く、

我が神道の教、陵夷一年より甚だしく、國家の學、廢墜して十一を千百に存す、格律の書泯滅し、復古の學誰かに云問せん、詠歌の道散缺し、大雅の風何ぞ能く奮はん、今の神道を談ずる者、是皆陰陽五行家の說、世の詠歌を講ずる者、大率、圓頓、教儀の解、唐、宋、諸儒の糟粕にあらずんば、則ち金胎、兩部の餘瀝、鑿穴の妄説にあらずんば、則ち無證不稽の私言、曰く秘、曰く訣、古賢の眞傳、何處にかある、或は蘊、或は奧、今人の僞造、これ多し、臣少より寢となく、食となく、異端を排撃するを以て念と爲す、以て學び、以て思ふ、復古の道を興さずんば、止むなし、云々、

此の文字にて彼が國粹的見地を看取すべきである。此の春滿の精神を承繼げる

は、有名なる賀茂真淵であつて、元文元年春満死してより、幾くもなく江戸に出て、大に其の道を弘め、専ら神道發揮を以て任じたのである。されば真淵は、古道の眞を明かにせんと期して、國意考の著を公にし、それによつて儒道を排撃し、神道を宣揚した。之に續いては、真淵の高弟本居宣長出て、更に大に神道の發揮を以て任じ、愈々考證學をして社會に地盤を廣めしめたのであつた。其の著「直毘靈」中に記して曰く、

そも、天地のことわりはしも、すべて神の御所爲にして、いとも、妙に奇しく、靈しき物にしあれば、さらに、人のかぎりある智りもては、測りがたきわざなるを、いかてかよくきはめつくして、知ることのあらむ、然るに聖人のいへる言をば、何ごともたゞ理の至極ぞと信たふとみをこそいと愚なれ、云々、されば聖人の道は、國を治めむために作りて、かへりて國を亂すたねともなる物ぞ、すべて何わざも、大らがにして、事足りぬ、ことは、さてあるこそよけれ、故皇國の古は、さる言痛き教も、何もなかりしかど、下の下まで、みだることなく、天の下穩かに治まりて、天津日嗣いや遠長に傳はり來座り、さればかの異國の名にならひていは、是

ぞ上もなき優れたる大さ道にして、實は道あるが故に、道てふ言なく、道てふことなければ、道ありしなりけり。

又、うひ山ふみの著書中に皇學の便を示して曰く

此道は古事記、書紀の二典に記されたる神代上代のもろくの事跡のうへに備はりたり、此二典の上代の卷々をくりかへし、よくよみ見るべし、略道を學ばんと心ざすともがらは、第一に漢意、儒意を清く濯ぎ去て、やまと魂をかたくする事を要とすべし、さてかの二典の内につきても、道をしらん爲には、殊に古事記を先とすべし、書紀をよむには、大に心得あり、文のまゝに解しては、いたく古への意にたがふこと有て、かならず漢意に落入るべし、次に古語拾遺や、後の物にはあれども、二典のたすけとなる事ども多し、早くよむべし、次に萬葉集、これは歌の集なれども、道を知るに甚だ緊要の書なり、殊によくよむべし、

以上の文字は、何れも一意神道の本義を明かにせんために、古道を論じたものであるが、而も専ら漢學に對し、國粹的見地より之れを排撃し、以て獨立の氣焔を高めたるものなることを徴せらるゝのである。

此の宣長の高弟が即ち有名なる平田篤胤であつて、彼は師の意を承けて大に儒道を排撃し、進んでは佛教をも痛撃するに至つた。其の漢意に所謂太極、陰陽五行、八卦等の説を駁して、天下の理此に盡くると思ふのが抑々大早計で、物の理たるや、中々極まりのなきものである。即ち人の考へ知るべきは、たゞ目の及ぶ限り、心の及ぶ限り、測算の及ぶ限りに過ぎない。其の及ぶ所は、いかに考へても知ることの出来ぬものであると論じ、而してかの漢士の天動説が輓近の推理によつて地動説に其の根據を覆へされた如く、到底物の至極などを考へ盡すことは出来ぬと論じて居る。此等は全く他道攻撃の歩を進めたものである。而も佛教攻撃に至ては、平田は羅山以來の史的考證を提け來りて傳道の妄を辨じ、更に佛典攻究によつて佛教を駁し、俗神道を語り盡した。出定笑語といひ、古今妖魅考など、いふのが佛教の攻撃書で、俗神道大意などいふのが民間神道の攻撃書である。今特に鬼神新論に掲げたる所説を見るに、中に曰く、

委しくいへば、天竺にても、神と佛との二つの別あり、謂ゆる神とは、諸天、善神などいふ類ひ、いはゆる佛とは、彌陀、觀音、勢至などいふ屬なり、大概をいへば、謂ゆる諸

神は彼國に元より事實の傳はりたるにて、諸佛は大かた釋迦法師の杜撰り出でたる物と見えたり、此は實にしかあるべき謂れあり、さるは、出定後語に記せる如く、彼國には、釋迦よりもいと上世に、既に教ありて、佛法に外道とさすもの即ち是なり、この外道かの國に元よりある所の諸天善神の古傳説に原づきて、人を導びけるを、釋迦法師いて、一層其上を説き、諸天諸神にまさりて尊きものこそあるなれとて、過去の諸佛といふもの、並に其妄説を杜撰り、いはゆる神變といふ、くさくさの妖術をもて、其有様に現はして證とし、さて終に彼國人を誑きおぼせたる物なり、然れば佛經に諸天諸神の屬、佛の下吏の如く見ゆるは、此故なり。

此の文中に、出定後語と記せるは、富永仲基なる者の著で、彼は佛典、自由討究の先驅を爲し、其の結論として大乘、非佛説を唱道するに至つたのであるが、篤胤は世の趨勢を見て大に佛典を究め、更に傳道史を探りて、遂に佛教攻撃の材料とし、尙ほ當時服部天游り、赤髯々なる著出で、佛典攻究の結果を明かにした文意に倣ひ、さてこそ「出定笑語」の書を出したのであつた。此の如くにして神道は考證復古の氣運に際會し、其の所謂古來の本義を闡明したのであるが、これのみにて宗教なる佛教と對

立するには固より足らぬ所がある、これが即ち世俗神道の興起を見るに至つた所以である。

四〇

第十 世俗神道の勃興

此に世俗神道といふのは、世人一般を通俗的に教化する宗教として發達するに至つた神道を指すのである。かゝる神道の新運動は、考證復古の學が起つてより神道の本義の明かとなるにつれて、自然に起り來るべき顯象であつた。何となれば、唯だ單に教學界に於て、神道が原始以來組織せられたる、教學の一種なりと認められたのみにては、眞に社會に勢力を占むることも出來ねば、又實際社會衆人を教化することも出來ぬのであつて、それでは、未だ宗教としての價值がなく、唯だ僅かに一の學派として存在するに過ぎぬことゝなる。此に於て單に文字議論の上に於て勢力を得るのみならず、進んで社會教化の實力たらんと期する有志者を生じたのは、無理からぬ趨勢である、これが大要を述ぶるには、どうしても其の重なる二三宗教的のものを擧げて、其の主義目的とする所を明かにする所がなくしてはなら

ぬ

第一に擧げたいのは、神道を以て、禪や陽明の如く、悟りを開くといふ點に基礎を置いた烏傳神道である。此の首唱者は京都上賀茂の社人梅辻規清といつた人で、十二年間に三十三ヶ國を廻歴し、山河を跋涉して大悟する所あつたといふ、弘化三年江戸に出て、下谷池の端に本社を設け、中橋松川町並に京橋山城町に支社を置き、瑞鳥園と號して布教した、此の瑞鳥といひ烏傳といつたのは、梅辻の賀茂姓が家系遠く皇祖神武天皇の御時に、八咫鳥となつて嚮導をした賀茂建角命に出て居る所よりかく稱したといふ、而して其の講釋する所が心法應用といひ、靜坐肝要といふ如きは、明かに悟道に主義を置いたものである。されば規清は中臣稜講釋の中に記して曰く、

人々彼の心理を得んと覺さば、先づ靜坐肝要なり、若し靜坐をなさざれば、いつも口先の論のみにて、實に天地の妙用を我が物と爲すこと難し、斯の如く、心の妙體を大悟せば、道は遠きに求むるに及ばず、先づ日道、月道の年々歳々に四十八度の往返寸分差はざる所は、既に道の根元なり、續いて四季、二十四節、七十二候等の約

東の差はざる所、即ち道なり、此外、人間に五常の道備はるも、皆其元は天地の道の人間に含る所にして、決して私の此體に妙あるにあらず、凡て天地の神の爲す所の道なり、かくの如き道を、我國に於て神道と號する所以は、皆既に天照大神の道なるが故なり、云々、

かく基礎を悟道に置き、進んで道徳的に神道を釋して曰く、

古歌に「我が心鏡にうつるものならば、さぞや姿の見にくかるらん」とあり、此歌の如く、我が身をふり顧みて、篤と思慮あるべし、然も是等の事、胸にこたへぬ程の人は神の御見捨にあひて、必ず全からず、終に變事にかかり、禍近きにあるべし、之を草木に譬ふるに、人の胸中に惡木生ひ繁れり、奏神樂の記にある如く、不忠、不孝、不實、不貞、不和合、家業不出精、晨臥、悒氣、嫉妬、憎恨、誹羨、強慾、意智惡、口返答、無理合、陰陽勤、嫁捻、爭、口論、癩癩、短氣、驕奢、邪婦、大酒、遊藝、自慢、吝嗇、抓合、無慈悲、空言、惡巧、陰言、我儘、博奕、賊心等、其の樹木荒まし三十八本あり。此惡木日増年増に繁茂して、運の蔭を爲す、然るを世人此理を知らず、唯だ無性に神佛を念し、開運を祈願するとも、神の方には驗たくも、かゝる理ありて成され難し、神道の奥義、燒鎌の敏鎌を以

て、此惡木を伐り、拂ふの外は、開運するの術は、あらず、是に於て神を驗す法を傳授すべし、毎朝珍し御食を献じ、毎夕生魂の御料を献ずべし、さて珍し御食とは、惜まざる御食といふ事にて、捧くる心清淨なるをいふ、生魂の御料とは、人の生膽なり、云々、

かくの如くして、烏傳神道は先づ心法より入り、て道義の根據を得せしめ、進んで宗教的に人心を感化せんと勉めたものであつた。

此の烏傳神道と殆ど前後して世に出てたのが禊教である、禊教とは神代の故事なる禊の式に、則りて、罪惡を洗ふを主眼とし、基礎を信仰に置いたものである、又此の神道を吐普加美講といつたのは、神呪に「トホカミ、エミタメ、拂ひ玉、へ淨め玉、へ」とよんだからである、而して此の教の主唱者は井上正鐵であつた。正鐵は安房國平群郡瀧田村の人で、諸國を遍歴して神儒佛三道を究め、京都南北庵にては胎息の術を學び、それより東に歸つて井上周易と號し、幾くもなく井上東園と改め、醫を以て業と爲し、旁ら神道の玄旨を説明したが、後ち京都に出て、神祇伯の門に入り、惟神の大道を修めた所より、遂に江戸神田に於て禊教を始めたものであつた、かくて千

住在梅田村の神職に補され、井上式部と稱したが、其の説く所は烏傳と殆ど反對の主義で、世上一般をして悟道に入らしむるなどは、到底不可能であるから、先づ第一に信仰を以て基礎と爲し、一心に神呪を唱へて身の罪惡を免れるやうにせよと説いたものであつた。されば正鐵嘗て其の教の根源を述べて曰く、

父眞鐵の志を継ぎ、神儒佛三道に就きて悉く師を求め、其奥義を究むるも、唯だ一己の道を述ぶるのみにして、安心、修身、齊家等に及ぶことなし、心安からず思ふて飲食を斷ち、木食を爲し、水を浴び、坐禪を爲し、觀念を凝らすと雖も、悟り得ることなし、力盡きて空しく過すに、四十歳の春、觀念の床に夢幻の如く、一人の若き女子我れに大道を傳へんとて、明玉を口に授け入ると覺えて、眠りより起き、爾後始めて惑ふ所なし、これ神明の使たりしなり、云々。

之は全く神道の基礎を信仰に置くの外なしと示したものである、乃ち進んで道を説いて曰く、

予が人に教ふるに、忠孝の事を先とせずして、信心の事を先として教ふるは、全く忠孝の教へを捨てよといふに、あらず、信心の道を得れば、自ら忠孝の心を生じ、教

へずして得、學ばずして至るの故にして、教ふるなり、されば今此教を説き、皇神の傳の廣大にして、尊く有難き故よしを、述ぶるのみにて、全く忠孝を捨て、惡を懲らし、善を勸むるの教を廢するにあらず、唯だ忠孝も身を修むる道も、此信仰といふことを知らざれば、我々の如き生れ付き、惡き性質の者は、勤まり難き故に、先づ信心といふことを授かりて、後に學びたまへと教ふるなり、此信心といふことは、誠の心といふことにして、此誠の心といふは、即ち神の心なり、故に古歌に、心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとも神や守らんとあり、云々、

かくて宗教と道徳とを連結せしめて、一代の救世教たらんことを期したものであつた、即ち前二神道を比較して一を自力教といふならば一は之を他力教ともいふべきものであらう。即ち先づ悟道より入らしめたものと、信仰より入らしめんとせるものとの差異である。

禊教の次に現はれたのは、黒住教である、此の教は備中國御野郡中野村の人黒住宗忠に依て唱道せられたから、かくは命名するのであるが、其の信仰よりも日常道徳の實踐に重きを置いたのは、社會の狀態が既に理論よりも實行に重きを置くこと

いふ傾を有したからに相違なからう。蓋し宗忠は一朝死期に迫り、切に望む所あつて太陽を拜した所、それが効驗ありて快復し、遂に志を決して道徳的宗教家として世に立つに至つたのである。されば宗忠は道徳的に神道を釋して曰く、神明とならんとするには神の行を爲すに限る云々又太陽の爲に人の體中に暖氣を生ずるので、之は即ち日神より授けられたものである。蓋し心はコ、ハ、ルといふ義にて、日神の御陽氣の凝結して心となつたものである。されば人欲を去り正直にして明かなれば、それは日神と全じ心を有したものと説明したのである。

かく黒住教は道徳の實行に重きを置く所より、身を世に處する信念としては、五ヶの信條を有せしめ、又日々家内心得七ヶ條を示すに至つた左の文字である。

五ヶ條信條

- (一) 誠を取外すな
 - (二) 天に任せよ
 - (三) 我を離れよ
 - (四) 陽氣になれ
 - (五) 活物を捉へよ
- 日々家内心得七ヶ條
- (一) 神國の人に生れ常に信心なき事
 - (二) 腹を立て物を苦にすること

- (三) 己が慢心にて人を見下すこと
- (四) 人の惡を見て己れに惡心を増す事
- (五) 無病の時家業怠る事
- (六) 誠の道に入りながら心に誠なき事
- (七) 日々有難きことを取外すこと

要するに黒住教は道徳實行の宗教たらんと期したのである。

以上の三教より少しく後れて信仰と悟道とを折衷した易行道を唱へたのは金光教祖金光大神である。文化十一年備中國淺口郡占見村に生れ、通稱を川手文治郎といつた、幼より信仰の念厚く家業の暇には神社佛閣に詣て又善行を積んだが、一朝住宅の改築に當りて災禍に罹り、尋て大患に罹つたが、只管誠意を盡したから、其の病も癒へ其の災も去つた、かくて安政五年七月十三日に顯幽感通の靈德を受け、てより、日夜神傳に従ひ、之を實行して其の徳を積み、終に世人を教化するに至つたものである。既にして維新の大業成りし時、五年十一月の改曆に就いて世人大に迷ふたのを、彼はかゝる迷信を排し、専心一意天地金乃神に歸信せよと教へたのである。其の眞道の心得といふ神國民としての日常心得、又道教の大綱、信心の心得などを述べた所を見るに、彼が如何に一神歸依によつて他の雜行雜信を棄てしめよと

勉めたかゝ判るのである。「神徳を受けよ、心配する心で信心をせよ、信心してまめで實業を務めよ、君の爲なり、國の爲なりなど、説いて居る文字で其の大概を推知することが出来るのである。

此の金光大神と殆ど同時に世に出て、今や我國の大勢力となつて居る天理教の如きも、神人交通の最易行門を開いたもので、他の難解なる悟りや形式を要せぬだけに世俗一般に受け入れらるゝに至つた。特に此の教は神の前に一身を犠牲に供するといふ階級打破の立場を示したから、下層社會は一層之に靡いたものである。此等は一々列擧する暇もないが後段に於て少しく紹介する所があらう。

尙ほ幕末に於て信仰界の一勢力として遣るべからざるは、富士講なる神道結社であつた。之は實行教と改名して今も世に行はれて居る傳ふる所にては、天文十年に生れた角行東覺なる人を開山祖とし、富士信心を以て教としたのであつたが、五世食行身祿に至りて大に社會教化に心を注ぎ、尋て鳩谷三思翁と呼ばれたる祿行三思によりて富士講社の積弊を一掃し、四十餘年間の東奔西走によりて信者五萬人を得たといふ、此の三思翁の高弟が十代中興の祖と稱せらるゝ柴田花守翁で

現今の柴田實行教管長は其の子であるといふ、思ふに舊幕時代の富士講が世俗神道として世に行はれ、維新後一教派として世に立つの組織を成したのが花守翁であつたこと、思へる。要するに幕末の世俗神道は即ち今日の宗教的神道の前身であり、又先驅を爲したものである。

第十一 明治維新と神道の獨立

幕末に於ける神道復古の大勢は、破竹の勢を以て進み、一方に皇學の發揮を以て任ずる學者を生じ、他方には、佛敎に代て、國民の信仰を支配せんと期する、世俗神道を生ずるに至つたから、こゝに幕府倒れて皇政の復古となるや、神道は祭政一致の趣旨に基きて全く獨立し、而して諸國に於ける兩部支配下の神社をして、悉く純粹なる神社たらしむるに至つたのである。

蓋し兩部習合といふことは、一時の便宜に出た所であるけれども、因襲の久しき年を逐ふて、本迹の別を紊り、最初主神とせる名目をも湮滅するに至つた、之が爲に神式は紊亂し、祭儀は混雜し、其の弊言ふべからざるに至つたから、明治維新の事成

るや、國民信仰上にも一大改革を加へ、神佛の區別をして截然たらしむるに及んだのは、勢の當に然るべき所であつた例へば熊野權現三所の神體は彌陀藥師觀音の三位とし、延寶九年に開帳を行ふたことがあるが、實際の主神は伊弉册尊速玉之男事解之男の三位であるといひ、或は伊弉諾伊弉册の二尊と本宮五十猛命であるともし、附會杜撰極りなくして本迹をさへ別つべからざるに至つた、其の他豊前の彦山權現、讃岐の金毘羅權現といふ如き皆同一の權現號を有して、垂迹と本地とが判然しない、又日光の東照權現といふ如きは徳川家康の神靈を祀れるものであれば、此の權現は本地も垂迹も我が神にして本地の佛號はない。加之熊野權現心願の輩は立身出世を希望するが、其の本地は西方接引の彌陀如來て、現世利益に關係はない、又金毘羅權現は佛法護持の神であるが、之を天竺の鰐魚といふ所より我國の船玉明神に付會して海上安全を誓はしめるといふ如き、國民の信仰をして實に迷妄不稽に陥らしめたことは夥しいのである。かくては明治聖世の本旨でないといふ所より、明治天皇親政の始に當り、万機革新の時を機とし、神佛分離の御沙汰を下したまふたのであつた。即ち戊辰當時の官達は實に左の如くである。

一 中古以來、某權現或は牛頭天王之類、其外佛語ヲ以テ神號ニ相稱候神社不少候、何レモ其ノ神社の由緒委細ニ書付早々可申出候事

但勅祭之神社、御宸翰勅額等有之候向ハ、是又可伺出、其上ニテ御沙汰可有之候、其餘之社ハ裁判鎮臺領主支配頭へ可申出候事

一 佛像ヲ以テ神體ト致候神社ハ以來相改可申候事

附本地杯ト唱へ佛像ヲ社前ニ掛或ハ鰐口梵鐘佛具等之類差置候分ハ早々取除キ可申事

戊辰三月二十八日

太政官

この官達を以て、從來の兩部習合を一掃した後、更に朝廷に神祇官を置き、着々改正の實を擧ぐるに至つたのである、左の官達を見よ、

一 今度諸國大小神社ニ於テ神佛混淆之儀ハ御廢止御成候ニ付、別當社僧之輩ハ還俗ノ上、神主社人等之稱號ニ相轉シ、神道ヲ以テ勤仕可致候、若亦無據差支有之、且ハ佛教信仰ニテ還俗之義不得止之輩ハ神勤相止立退可申候事

但還俗之者、僧位僧官返上勿論ニ候、官位ノ義ハ追而御沙汰可有之候間、當分ノ

處官服ハ風折鳥帽子、淨衣白差貫着用勤仕可致候事

戊辰四月十四日

神祇官

此の官達一たび下つてより、廢佛毀釋の聲高まり、神佛分離に就いて非常の混雜を來さんとしたが、幸に全月十七日付を以て、太政官より神社に在る佛像佛具を取除かしむると雖も、粗暴の所爲を禁ずといふ達しが下つたから、漸く一時の騷擾を免かれ、尋て全月二十四日付を以て終に石清水、宇佐箱崎等の八幡大菩薩の稱號を止められ、更に八幡大神と稱へ奉るべき旨仰出され、大小神社此の例に倣ふて、それと改稱するに至つた。こゝに於て我國の神社に對する制度は全く一變し、結局神道家の勝利となつて、佛敎家は敗衄を見たこととなつたものである。即ち従前の兩部神道は此の時を以て、其の跡を我國に絶つに至つた。

更に戊辰當時に於て神道獨立の著明なる事蹟といへば、新神社を起し、從來我國に大功のあつた忠臣を祀り、進んで維新前後に於ける勤王諸臣の忠魂を慰する神社を設けらるゝに至つたことである。即ちかの豊國神社の豊臣秀吉、湊川神社の楠木正成、此の兩公を祀れる如きは皆、新設の神社である。尤も豊國大明神は後陽成

院慶長四年四月十八日に勅號あつて神社となつたのであるけれども、湊川神社の楠公神名は此の時始めて仰出されたものである。而して全時に古今殉難の忠死者を招魂社に合祀せらるべき勅旨を發せられ、尋て之が官達を下されたのであつた、少しく當時の法令を閲するに左の文字がある。

太政御一新之折柄、賞罰ヲ正シ節義ヲ表シ天下之人心ヲ興起被遊度既ニ豊太閣楠中將之精忠英邁御追賞被仰出候、就テハ癸丑以來唱義精忠天下ニ魁シテ國事ニ斃レ候諸士及草莽有志之輩、冤枉罹禍者不少、此等之所爲親子之恩愛ヲ捨テ世襲之祿ニ離レ墳墓之地ヲ去リ、櫛風沐雨四方ニ潜行シ、専ラ舊幕府之失職ヲ憤怒シ、死ヲ以テ哀訴或ハ縉紳家ヲ鼓舞シ、或ハ諸侯門ニ説得シ、出沒顯晦不厭、万苦、竟ニ抛身命候者、全ク名義ヲ明ニシ皇運ヲ挽回セントノ至情ヨリ盡力スル處、其志實ニ可嘉尙、况ヤ國家ニ有大勳勞者、爭カ湮滅ニ忍フ可ンヤト被歎思食候、依之其志操ヲ天下ニ表シ且忠魂ヲ被慰度、今般東山之佳域ニ祠宇ヲ設ケ、右等之靈魂ヲ永ク合祀可被致旨被仰出候、猶天下之衆庶益節義ヲ貴ヒ可致奮勵様御沙汰候事、

戊辰五月十日

太政官

かくて同日太政官の布告を以て、伏見戦争以來の忠死者の功勞を思召し、其の忠敢義烈實に士道の標準たりとて、京都東山に於て新一社を建立し、其の靈魂を祭祀せらるゝに至りたのであるが、其の結果、東山招魂社を置かれ、其後明治八年一月十二日太政官達を以て陸海軍兩省及び内務省に達の趣ありて、之を東京に移し、九段招魂社に合祀せられた、されど此社は一般神社と異なる性質ありとて、未だ教部省の直轄する所とならなかつたが、明治十二年六月十四日に至り、内務、陸軍、海軍三省合名を以て甲第十號達として府縣に達し、始めて靖國神社と公稱し、官幣社に列し、春秋二季を以て祭典を行はるゝことゝなつたのである。

蓋し古今に於ける神社の沿革を通觀するに、中古一度神佛の習合の下に榮へたものが、明治維新後に至り、全く上古の状態に復して純神道式となり、且つ我が國家に取りて功勞ある諸功臣をも純神道式を以て祀るに至つたものである。而して此等神社を區別するならば、下の三種に分つことが出来る、即ち一は上代天神祖神等を祭祀すると、二は歷朝の聖主王子を祭ると、三は名臣賢相の國家に功勞ある神靈を祭るとである。

第十二 神宮及神社制度の確定

前段述ぶる如く神道獨立の氣運熟し、皇政の復古と共に、以前の神佛混合の制度は根底より棄却せられ、諸國神社は其の多少に拘はらず悉く純神道的に祭祀を行はるゝに至つたのであつたが、因襲の久しき諸種の宿弊多く、一朝一夕にして之を除くことが出来なかつた。然るに明治四年廢藩置縣の制度確立し、諸政亦從て改正の緒に就くや、祭政一致の本源より流出てたる維新の制度を規定し、先づ神宮神事の改正を行ふことゝなり、同年五月十四日を以て初めて伊勢神宮に關する太政官の布告を見るに及んだのである。其の達示は左の如くであつた。

神社ノ儀ハ國家ノ宗社ニテ、一人一家ノ私有ニスベキニ非サルハ勿論事ニ候所
 中古以來、大道ノ陵夷ニ隨ヒ、神官社家ノ輩中ニハ神世相傳由緒ノ向モ有之候ヘ
 共、多クハ一時補任ノ社職其儘沿襲致シ、或ハ領家地頭世變ニ因リ、終ニ一社ノ執
 務致シ居リ、其餘、村邑小祠ノ社家等ニ至ル迄、總テ世襲ト相成、社入ヲ以テ家祿ト
 爲シ、一己ノ私有ト相心得候儀、天下一般ノ積習ニテ、神官ハ自然士民ノ別種ト相

成、祭政一致ノ御政體ニ相悖リ、其弊害不尠候ニ付、今般御改正被爲在、伊勢兩宮世襲ノ神官ヲ始メ天下大小ノ神官社家ニ至ル迄精撰補任可致旨被仰出候事

明治四年五月十四日

太政官

同時に官社以下定額及ひ神官職員の規則等を定められ、官社としては、官幣大社、官幣中社、官幣小社、並に別格官幣社を定められ、尋いて國幣中社、國幣小社を定められ、又府縣社、郷社を定め、尙ほ右官社定額の外、式内及び國史見在の諸社は、年を逐ふて検査を經、漸次官社に列せらるゝことゝなつたのである。

此の如く神社の事略と定まるや、明治四年七月十二日太政官達を以て、神宮改革の事を仰出だされ、神宮制度は確立するに至つた、其の中最も注目すべきは左の諸項である。

一 皇太神宮

豊受太神宮之儀ハ元ヨリ差等可有之所、中古以來全一ニ相成甚無謂事ニ候、第一兩宮御體裁ノ別ヲ始メ隨テ諸事釐革可被爲在候、此旨心得違無之様、神官等へ篤ト可申達事

一 荒木田度會、兩姓之儀ハ、豊受宮御鎮座以來兩宮へ分仕致居候事ニ候へ共、今後御評議之次第モ有之、自今其姓ニ拘ハラヌ全ク撰任ヲ以テ、豊受宮權禰宜ヨリ次第ニ轉任、皇太神宮禰宜以上へ昇進可致、尤不次拔擢ハ格別之事

蓋し中古以來外宮が内宮に對立せん爲に、天御中主神を以て本體とし、神儒習合の姿を以て、終に其の目的を達したことは、前段に略叙した通りであつた。そこで神道の本義明瞭となるにつれて、自然此の大改革あるに至り、上古の舊態に復古したのは當然のことである。而も荒木田度會兩氏が古來内外兩宮に分れて奉仕したものであるから、自然兩家の争の姿となつたのを、此度の改革と共に、斷然偏頗なく適任者を兩姓の中より撰任せらるゝことゝなつて、全く落着を告げたのである。

かくて後明治二十年十二月二十五日には、造神宮使應の官制を公布せられ、新神宮造營、及び神官裝束調達の事を全應にて主掌するに至り、又神宮を始め官幣、大中小社別格社、國幣中小社、府縣社、郷社等に奉仕する職員の員數も年次に確定し、特に二十四年八月十四日を以て、官國幣社神社奉務規則なる者制定せられ、苟も國家の宗祀に従事し、國家の禮典を代表する官國幣社神祇は、平素國體を辨し、國典を修め

躬行を正しくして本務を盡せよと達せられたのであつた。

第十三 神道各派の現状

明治維新後、神佛が分離してより、我國宗廟なる伊勢兩宮を始め諸國の神社が、全く純神道式によりて祭祀せらるゝに至つたことは前段に述ぶる通りであるが、之と全時に他面に於て、神道も亦佛耶兩教の如く宗教として世に立ち、以て國民の信仰を支配するに至つた、而も神の道は我が國民として何人も踏み守るべき所であるから、神道の各教派は之を基礎として世道人心を新にし、且つ各々其の執る所の主義目的によりて敬神思想を養成せんと期するに至つた、特に世俗に通ずる宗教的基礎を鞏固にして獨立の旗幟を鮮明にし、それ〴〵に全國に布教して信者の數を増すことを勉むるに至つたのである。

現在の統計に據ると、獨立したる神道の各派は十三を以て數へられて居る、即ち左の如くである。

神道 黒住教 修成派 大社教 扶桑教 大成教 實行教 神習教
御嶽教 禊教 神理教 金光教 天理教

以上各派には、皆それ〴〵に管長を置き、事務所を設け、各地に布教傳道して居るのである、即ち神道各派管長以下全教師の數は總計七萬五千人許で、最近の調査にては左の如き區別であるといふ。

神道 九千六百十七人 黒住教三千六百二十三人 修成派八千九百〇五人
大社教五千四百〇八人 扶桑教二千九百三十一人 實行教貳千七百四十四人
大成教三千三百九十二人 神習教三千八百〇五人 御嶽教九千五百五十六人
神理教二千九百九十二人 禊教 八百四十二人 金光教千〇三十一人
天理教二萬〇九百十三人

而して所謂信徒の數は左の如くであつて、總計千三百三十九萬四千餘人であるといふ、即ち我が國民全體の約四分の一は神道各派に於て信者として居るのである。

神道 百七十萬一千貳百四十三人 黒住教四十七萬七千四百七十五人
大社教百四十萬六千〇五十一人 修正派四十八萬四千九百四十二人

扶桑教九萬五千六百六十四人
 大成教七十一萬九千九百五十七人
 神習教百〇六萬六千〇七人
 實行教三十八萬四千九百十三人
 御嶽教二百〇一萬八千八百七十人
 禊教 十二萬四千五百〇八人
 神理教百五十三萬千八百五十二人
 金光教五十五萬九千九百五十人
 天理教二百八十二萬二千九百七十一人。(以上統計は「宗教之日本」所載に據る)

以上の概數は各派に於て調査した所に據つたのであらうけれども、固より正確なるものといふことは出来まい、又宗教信者の教と云ふ如きものは、多數無智者をも相手として離合時ならぬのであるから、其の増減は必ず年々に著しきものがあるに相違ない。要するに其の説く所が最も神の道の本旨に近く、且つ俚耳に入り易いものが多數を占むることであらう、而も布教傳道の方法にして、着實にして懇切であるならば、世の同情を博して其の教派を榮へしめることは勿論である。

第十四 神道各派の教義と概評

現存せる神道各派の教義に就いては、一々其の詳細を知ることが出来ぬけれども

其の重なる者に就いては大要左の如く公示せられて居るのである。

(一) 神道派の教義

神道派の教義は、惟神の大道を擴張し、固有の大道を宣揚するに在り、惟神の大道とは、皇祖皇宗の懿訓にして、本邦建國の大道、即ち國體の精粹なるもの、此道を受け傳ふる者、即ち本教の任する所、而して本教の因て立つ所なり、抑々臣民の皇室を尊戴し、忠を尙ひ、孝を重んじ、義勇公に奉じ、尙武愛國の氣象に富む所以の者は、他なし、顯世の事は、天皇親ら之を治め、幽冥の事は、神明之を宰どるに、因てなり、此顯世幽冥の事は、相依り、相待ちて、須臾も離るべからざるものなり、故に本教は、人爲の教義に非ず、歴世神皇の履經したまふ所、億兆之に頼りて、其嚮ふ所を一にし、自然の化爰に教を成し、禍を禳ひ、福を祈り、心を幽冥に歸し、身を神明に托し、以て心神を安立せしむと、同派代表者神崎一作氏によりて世に示されて居る。

蓋し此派は自ら稱して神道といふ如く、極めて神道の本義を宣揚して、教を垂れんとするのであるから、其の教義は、寧ろ包擁的にして、空漠なる觀がある、然し我が國民として、此の教義には、固より反對すべき理由もないから、布教して道を弘める

には、如何にも便利にして融通の利くことであらう。

(二) 修成派の教義

新田管長の言に、本派の主義は道に在り。道の大原は天神に出づ、即ち天之御中主神高皇産靈神、神皇産靈神の三神是なり。夫れ人身血氣を父母に受くると雖も、其主なる心魂は此三神より受けざるはなし。乃ち天神と同體なる至善の心魂にして、一身の根本なり。此貴重なる心魂を愛養保全せしむる爲に本派の教を立る所なりとある。然れば此の派は儒教の陽明學の如く治心に重きを置いたことは明かである。而して其の名の由て起る所を述べて曰く、神典に曰く、天神諸命以詔伊那岐命伊邪那美命二柱神、修理固成是多陀用幣流之國と之を活用すれば、心魂を正しくするより、修身齊家治國平天下及び我國の光りを輝かすも、皆修理固成にあらざるはなし。而して心魂を練磨するを主眼とす、何となれば、心清明なれば、萬事ならざるはなし。故に修理固成の四字實は神道の大本にして、須臾も離るべからざる要旨、凡そ教ふる所は、萬事に涉ると雖も、其要は修理固成に在り、是れ我が派名の因て生ずる所なりと、畢竟これ治心によつて修身齊家の効果を擧げんと期するものである。

(三) 大社教の教義

千家管長の言に左の公示がある、之にて略々其の教義を窺ひ知ることが出来る、

○教源 造化の神靈は其源一にして宇宙に瀾満す、故に天地位し、萬物育し、四時來往して以て生々化々窮りなきは、一も造化の神徳に非ざるはなし、それ一本散して萬殊となり、萬殊又一本に歸する所以なり、是れ即ち惟神、大道の教源なり、

○教體 萬殊一本、衆理一源に歸すと雖も、已に天地位を異にし、幽顯界を分つに至ては、各之が主宰ありて統御の區域明かなり、故に其統御の區域を知り、以て適從する所を定むるは、萬殊一本の眞理を明かにする所以なり、是則ち惟神、大道の教源なり、

○教用 主宰統御の區域已に明なれば、信賴すべきの序亦正しからざるを得ず、故に造化の大源に達せんことを欲せば、必ず先づ幽冥主宰の大神を信賴せざるべからず、而して之に事ふるの道は、君父に忠なるに始まり、君父に忠孝なるは、我を修むるに基く、是れ本教の實用にして、順序の亂るべからざる所以なり、而して神は最も忠孝の人を助く、故に此理を以て神に事ふる乎、其道を誤らず、人に接する

乎、其分を亂らじ、修身誠意の實功是に於て平行はる、是れ則ち奉教の實用なり、
 ○國體 天壤無窮の神勅は君臣の大義を教示し給ふ所にして、皇基の由て以て定まる所、國體の由て以て起る所なり、故に此神勅を敬戴して、皇基を萬世に奉護し、國體を無窮に保持するは、臣民の義務にして、神明に敬事するの一大要旨なるを、知り、至誠以て其道を履行すべし、是則ち本教を奉ずるの主眼なり、

○魂神 靈魂は神賦にして、祖孫其命脈を一貫す、故に人死すれば、靈魂は必ず幽府に復歸す、是を以て生死神助に洩れざる所以を明にし、且つ祖孫の親愛は、獨り顯世に止まらず、幽府の靈魂に感通することを辨へて、深く幽冥主宰の大神に信賴し、厚く追祭の誠を盡し、以て靈魂安定の本據を確守すべし、是れ則ち靈魂の終始唯神に賴るべき所以なり、

之を以て觀るに、大社教は大國主神が國を譲りて専ら幽界の事を掌り玉ふたといふ所より、現世の利益のみならず、未來の幸福を得る爲にも、此の神に信賴すべしと説くもので、佛敎の易行門に似た所がある。其他の國體を重んじ忠孝を實行せしめんと期する所は他の敎派と大に異なる所はない。

(四) 實行敎の教義

柴田管長の示す所によれば、我が實行敎とは、其敎名に示すが如く、虛文虛飾を去り、空理空論に走らず、専ら實行を旨とし、其の説く所は簡易にして諸人に理解し易く人の人たる道を實行することを教ふる一新派にして時に應じ世に隨ひ漸次に改良したるものなりとある、之を以て觀れば、一種の道德敎ともいふべきものであるが、然らば如何にして道を實行するかといふに、我が天地の主宰神なる天御中主神は體、男女の徳性を分ち有したまふ高皇産靈神、神皇産靈神は之が用であれば、造化三神はツマリ一神である、其の一神は我國の名山富士山として、姿を現したまふものであるから、其の八面玲瓏たる姿を理想として、身と心とを清潔にせよと説いて居るのである、此の敎は幕府の頃に富士講と稱し、一時世に行はれたものであつたのを、近時改良したものである。

(五) 神習敎の教義

芳村管長の説く所にては、神習敎は顯幽兩敎に通したる大道であつて、惟神の敎である、即ち、大中至正なる天地自然の大道で、幽顯を貫き、有無に互り、天地に塞り、古今